

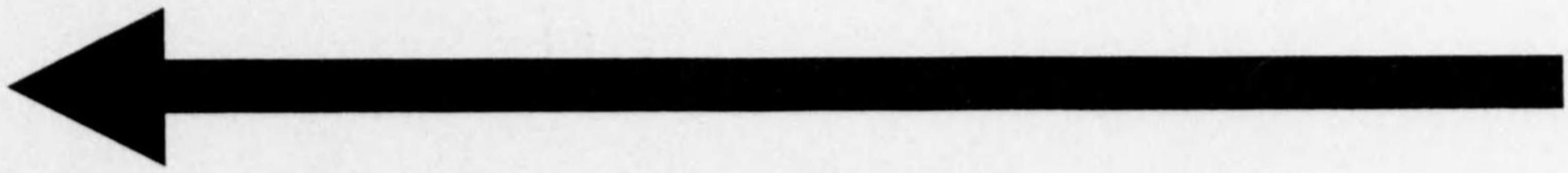
60-1263



1200501272688



始



67-123
2009127288



1203

說解方要學醫漢皇

實驗漢方醫學叢書₅ 藥方解說編



皇漢醫學要方解說

奧田謙藏著

東京 春陽堂發行



自序

古より、醫治の學術を究むる者、何ぞ嘗て傷寒論、金匱要略の二書を其極と爲さざる者有らむや。

此書、初は合一し、其題名を異にせりと稱せられ、又其作者に關しては、種種の臆測行はると雖も、未だ信憑す可き確説無く、且つ歷世の久しき、或は後人の傳注を交へ、或は字句簡策に譌舛錯亂を生ぜるは、眞に惜む可しと雖も、其上古聖人の遺法、儼然として此中に存し、世世之に由て生民の疾病を救療し來れるは、毫も疑ふの餘地無し。

唐宋以降、諸家輩出し、各論を立て、方を制すと雖も、要するに又皆此經の軌範を出づること能はず。寔に此二書は、醫術の規矩、藥方の準繩にして、千古に比無き醫家の洪寶大典たり。

是を以て、學者一たび此經に通曉し、其微言大義を了得せば、擴充限り無く、變通窮り無し。即ち一方にして、以て衆病に應ず可く、必ずしも異術奇品に因らずし

て、能く難痾痼疾を起たしむ可し。

嚮に我國西歐に倣ひ、其醫學制度を採用してより後、舊時、濟生の道として、吾が祖先以來之を研鑽し、之を育成し、綿綿として相繼承すること二千有餘年、依て以て民命を託せる皇漢醫學に至りては、嘗て一たび廢滅の危殆に遭遇すと雖も、尙ほ幸にして存續し、今や新たに眞摯なる學徒に由て、再び檢討せられむとするの時に際會す。此時に當つて、傷寒論、金匱要略の二書未だ地に墜ちずして人に在り。天恵に非ずして何ぞや。

余、夙夜此經を修め、爲に寢食を忘るること蓋し年有り。然れども性愚鈍にして識乏しく、未だ以て其經旨に通ずるを得ず。轉た慚愧に堪へざるを覺ゆ。

這回、自ら揣らずして書中の要方を採擇し、附するに爾餘の藥方若干首を以てし、之が解説を試みんと欲す。題して皇漢醫學要方解説と曰ふ。

蓋し方論の解し難きは、先哲も尙ほ且つ之を言ふ。况んや余の如き愚者に於てをや。然れども愚者にも亦千慮に一得有り。未だ必ずしも初より之を棄つ可らず。且つ現今、皇漢醫學に關する新著にして、既に世に行はるる者、其數決して少なしと

謂ふ可らずと雖も、其特に古方を遵奉し、此を世に傳へんと努力せるの著書に至りては、尙ほ未だ寥寥たるを免れず。然らば則ち此愚者の一得と雖も、亦全く無用なりと謂ふ可らざるに非ずや。

皇漢醫學要方解説の序文を作る。

皇紀二千五百九十四年六月中浣

著 者 謹 識

凡 例

一、本書に採擇する藥方は、主として所謂古方、即ち傷寒論及び金匱要略中のものを以てし、其兼用の丸散類は、古方兼用丸散方中のものなりと雖も、此他、余が家に傳はれる藥方にして、用法簡易、或は應急に便なりと思惟するものは、其後世に出づると、出所不明なるを問はず、また一二併せて之を篇末に附加したり。

一、傷寒論、金匱要略中には、往々後人の攙入に係る藥方及び方論あり。然れども之を討究し、其眞僞を論ずるが如きは、固より本書の目的に非ず。故に茲には暫らく其穿鑿を避けんとす。

一、藥品の分量は、諸家の説く所互に異同ありて容易に歸一せず。之を經驗に徴するに、吉益東洞氏の考訂する所、及び尾臺榕堂氏の定むる所頗ぶる實用に適するが如し。故に今概ね之に據り、更に之を現行の「グラム」量に概算し、各其藥品の下に注す。

但し、一「グラム」は約二分六厘強なるも、今便宜上二分五厘を以て之に充て、而して其「デシグラム」以下は、總て四捨五入の方法に従ひたり。

一、原本に在りては、藥品の下に、切、擘、炙、熬、或は氣味の辛、熱、苦、寒等を附記す。今、本書に於ては可及的煩冗を避けんが爲に、類聚方の例に倣ひて一切之を省略したり。

一、藥劑の投與に關しては、従前の諸家、多く一包を以て一回量と定め、而して病の輕重緩急に従ひ、其一

日中に服用すべき回数を示したり。本書も亦之に従ひ、且つ水率及煎煮の方法は、一に先考の實施したる所に倣へりと雖も、若し其煩に堪へざるときは、之を一日分に増量し、煎煮分服するも亦可ならん乎。

唯だ此際、水率及び其煮法を顧慮するの要あり。

一、實用に際し、加味、合方、兼用等の必要なるは言を俟たず。本書も亦之に關し、聊か論及せる所あるも、是れ固と權宜の處置なるを以て、必ずしも悉く爾かせざるを得ざるに非ず。

一、本書の記述に關し、引用したる先哲諸家の論説は、適宜各條に於て、其書名或は姓氏を掲げたるを以て、今茲に一々之を列舉せず。

唯だ方極に就ては、書中往々吉益東洞氏の説を誤傳せるものありと稱せらる。依て今、方極刪定及び方極附言に據り、其誤傳と認むべきものを訂正し、以て之を吉益氏の説と見做したり。

一、本書に引用せる原文は、盡く漢文なるも、今便宜上之を譯文となし、其譯文に限り、特に片假名を交へて他と區別せり。又、原文の譯出に就ては、謹んで其眞を蔽はざらんことに努め、一字と雖も、苟くも私意に任せて假名に換へざらんことに留意したり。譯文の、特に漢文直譯式なるは之が爲めのみ。

一、本書、記述の順序として、初に於て當に先づ總論の一篇を設くべきなり。然れども若し之を併設せん乎、恐くは一卷を以て完結する能はざるに至らん。依て今、之を茲に省略し、其一切を本叢書第一卷總論編に譲らんとす。讀者宜しく先づ同書に就て其詳細を知悉し、然る後に本書を繙かるべきなり。

一、原文の譯讀及び解釋等に關しては、決して誤謬無きを保せず。是れ皆著者淺學の致す所。謹んで明哲の示教を待つ。

藥方解說編 (皇漢醫學要方解說) 目次

[甲] 古 方

第一 桂 枝 湯 類

桂 枝 湯	二
桂 枝 加 桂 湯	七
桂 枝 加 附 子 湯	九
桂 枝 加 黃 耆 湯	三
桂 枝 加 葛 根 湯	四
葛 根 湯	六
葛 根 加 半 夏 湯	九
桂 枝 加 芍 藥 湯	二
桂 枝 加 大 黃 湯	三
小 建 中 湯	六
黃 耆 建 中 湯	九

桂枝加龍骨牡蠣湯	三二
桂枝加芍藥生薑人參湯	三四
桂枝加厚朴杏子湯	三五
桂枝去芍藥湯	三六
桂枝去芍藥加蜀漆龍骨牡蠣湯	四〇
桂枝去芍藥加皂莢湯	四二
茯苓桂枝白朮甘草湯又苓桂朮甘湯	四四
甘草乾薑茯苓白朮湯又苓薑朮甘湯	四七
茯苓桂枝五味甘草湯又苓桂五味甘草湯	四九
苓甘五味薑辛湯	五一
桂苓味甘去桂加薑辛夏湯又苓甘薑味辛夏湯	五二
茯苓甘薑味辛夏仁湯又苓甘薑味辛夏仁湯	五三
茯苓甘薑味辛夏仁黃湯又苓甘薑味辛夏仁黃湯	五五
小青龍湯	五七
麻黃附子細辛湯	五九
麻黃附子甘草湯	六一

射干麻黃湯	六三
茯苓杏仁甘草湯	六五
五苓散	六七
茵陳五苓散	七一
猪苓湯	七三
茯苓澤瀉湯	七五
桂枝人參湯	七六
人參湯	七八
桂枝去桂加茯苓白朮湯	八二
真武湯	八三
附子湯	八六
當歸四逆湯	八八
當歸四逆加吳茱萸生薑湯	九一
茯苓桂枝甘草大棗湯	九四
茯苓甘草湯	九六
芍藥甘草湯	九八

芍藥甘草附子湯..... 100

黃 芩 湯..... 101

黃芩加半夏生薑湯..... 103

甘草小麥大棗湯..... 105

炙 甘 草 湯..... 107

桂枝茯苓丸..... 110

第二 麻 黃 湯 類

麻 黃 湯..... 114

麻黃加朮湯..... 116

麻黃杏仁甘草石膏湯..... 118

越 婢 湯..... 120

越婢加朮湯..... 122

越婢加半夏湯..... 125

大 青 龍 湯..... 126

麻黃杏仁薏苡甘草湯..... 129

麻黃連軀赤小豆湯

131

第三 白 虎 湯 類

白 虎 湯..... 134

白虎加人參湯..... 136

白虎加桂枝湯..... 140

第四 小 半 夏 湯 類

小 半 夏 湯..... 142

小半夏加茯苓湯..... 144

半夏厚朴湯..... 146

第五 柴 胡 湯 類

小 柴 胡 湯..... 150

大 柴 胡 湯..... 154

柴胡加龍骨牡蠣湯..... 159

柴胡去半夏加栝蒌湯……………一六二

柴胡桂枝乾薑湯又柴胡桂薑湯……………一六五

黃連湯……………一七〇

麥門冬湯……………一七〇

竹葉石膏湯……………一七三

吳茱萸湯……………一七四

厚朴生薑半夏甘草人參湯……………一七七

半夏瀉心湯……………一七八

生薑瀉心湯……………一八〇

甘草瀉心湯……………一八二

甘草湯……………一八五

桔梗湯……………一八六

乾薑人參半夏丸……………一八八

大建中湯……………一九〇

柴胡桂枝湯……………一九三

第六 橘皮湯類

橘皮湯……………一九六

橘皮竹茹湯……………一九八

橘皮枳實生薑湯……………二〇一

茯苓飲……………二〇二

橘皮大黃朴消湯……………二〇四

第七 栝蒌薤白白酒湯類

栝蒌薤白白酒湯……………二〇七

栝蒌薤白半夏湯……………二〇九

枳實薤白桂枝湯……………二一一

小陷胸湯……………二一三

第八 薏苡附子散類

薏苡附子散……………二二一

薏苡附子敗醬散……………二二六

葦 莖 湯.....

八

二八

第九 瀉心湯類

瀉 心 湯.....

二二

大黃黃連瀉心湯.....

二四

附子瀉心湯.....

二六

黃連阿膠湯.....

二八

葛根黃連黃芩湯.....

三二

第十 白頭翁湯類

白 頭 翁 湯.....

三三

白頭翁加甘草阿膠湯.....

三六

第十一 梔子湯類

梔 子 豉 湯.....

三八

梔子甘草豉湯.....

四二

梔子生薑豉湯.....

四三

枳實梔子豉湯.....

四四

梔子乾薑湯.....

四七

茵陳蒿湯又茵陳湯.....

四八

大黃消石湯.....

五〇

梔子藥皮湯.....

五三

梔子厚朴湯.....

五四

第十二 大陷胸丸類

大 陷 胸 丸.....

五五

葶藶大棗瀉肺湯.....

五六

已椒蘆黃丸.....

六〇

第十三 大陷胸湯類

大 陷 胸 湯.....

六三

大黃甘遂湯.....

六六

甘遂半夏湯.....

六七

第十四 腎氣丸類

腎氣丸又八味腎氣丸……………二七〇
括萎瞿麥丸……………二七四

第十五 防已湯類

木防已湯……………二七六
木防已去石膏加茯苓芒消湯……………二七六
防已茯苓湯……………二七九
防已黃耆湯……………二八一

第十六 抵當湯類

抵當湯……………二八三
下瘀血湯……………二八七
大黃蟄蟲丸……………二八九

第十七 芎歸膠艾湯類

芎歸膠艾湯……………二九二
溫經湯……………二九五
當歸芍藥散……………二九七
黃土湯……………二九九

第十八 承氣湯類

大承氣湯……………三〇二
厚朴三物湯……………三〇八
小承氣湯……………三一〇
調胃承氣湯……………三一三
桃核承氣湯……………三七七
大黃甘草湯……………三二〇
厚朴七物湯……………三二二
大黃牡丹皮湯……………三三三

排膿散	三二六
四逆散	三二六

第十九 赤石脂禹餘糧湯類

赤石脂禹餘糧湯	三三〇
桃花湯	三三三

第二十四 四逆湯類

四逆湯	三四五
通脈四逆湯	三四〇
通脈四逆加豬膽汁湯	三四二
四逆加人參湯	三四四
茯苓四逆湯	三四六
白通湯	三四八
白通加豬膽汁湯	三五一
乾薑附子湯	三五四

甘草乾薑湯	三五六
-------	-----

第二十一 類族不詳の方

瓜蒂散	三五九
十棗湯	三六三
酸棗湯	三六六
三物黃芩湯	三六八
牡蠣澤瀉散	三七一

[乙] 兼用方

第一 巴豆劑

備急圓一名大呂圓	三七五
紫圓	三七七
同銘方	三七七
疥癬摺藥	三七九

第二 輕粉劑

前七寶丸……………三八〇
 後七寶丸……………三八一
 續七寶丸……………三八二
 梅肉散……………三八三
 伯州散……………三八四
 腋臭摺藥……………三八六

第三 大黃劑

蕪黃散……………三八七
 硝石大圓……………三八八
 甘連大黃丸一名林鐘丸……………三八九
 鐵砂大黃丸……………三八九

第四 甘遂劑

平水丸一名蕪賓丸……………三九一
 同銘方……………三九一
 控涎丹一名姑洗丸……………三九一
 如神丸……………三九二
 同銘方……………三九三
 桃花大黃湯……………三九四
 黃連解毒湯……………三九四
 鷓鴣菜湯……………三九五
 石膏黃連甘草湯……………三九六

附錄 掌善醫院方函雜方

藿香湯……………三九七
 白桃花湯……………三九八
 消滯丸……………三九九
 烏頭丸……………三九九
 回生散……………四〇〇

實驗漢方醫學叢書

奧田謙藏著



方

此編に收むる藥方は、傷寒論及び金匱要略中のものにして、總數凡そ三百首中より、今其百五十有五首を選ぶ。

第一 桂枝湯類

此部門に於て説述する藥方は、桂枝湯及び其去加方、之より出でたる諸方、並に附方、桂枝湯の變方、附方等なるも、就中桂枝湯は衆方の權輿にして、之を他方に比するに、最も變化に富めるが故に、能く之を攻究し、以て其方意に精通せざる可らず。

第一 桂枝湯類

桂枝湯 ケイシタウ 一名陽旦湯 ヤウタンタウ (傷寒論及金匱要略方)

桂枝 芍藥 生薑 大棗各三・〇 甘草二・〇

右五味を一包と爲し、水一合四勺を以て、煮て六勺を取り、冷温宜しきを得て一回に服用す(通常一日二、三回)。

『服シ已ツテ、須臾ニ熱稀粥一升餘(現今の一合餘)ヲ飲リ、以テ藥力ヲ助ク。(下略)。』
若し發汗を促すの要あるときは、熱粥を啜り、更に被衾を覆ひ、以て藥力を助け、微汗の續出するを程度とす。

此方、桂枝を以て君藥と爲す。故に之を桂枝湯と名く。

又、陽旦は桂枝の別名なりと。

藥能

凡そ方劑は、之を組成する諸藥、互に相合同協力し、以て其效用を全うするものにして、必ずしも藥品各個の性能にのみ因らずと雖も、若し之を措て顧みざるときは、竟に其方意を窺ふを得ず。故に先づ各藥品の性能を明かにするの要あり。

桂枝(ケイシ)の性能

藥徵に云く

『衝逆ヲ主治スル也。旁ヲ奔豚(一種の神經症)、頭痛、發熱、惡風、汗出デ、身痛ムヲ治ス』と。

又、古方藥議に云く

『味辛温、關節ヲ利シ、筋脈ヲ温メ、煩ヲ止メ、汗ヲ出シ、月閉ヲ通ジ、奔豚ヲ泄シ、諸藥ノ先聘通使ヲ爲ス』と。

芍藥(シヤクヤク)の性能

藥徵に云く

『結實シテ拘攣スルヲ主治スル也。旁ヲ腹痛、頭痛、身體不仁(一種の麻痺)、疼痛、腹滿、咳逆、下利、腫脹ヲ治ス』と。

又、古方藥議に云く

『味苦平、血痺ヲ除キ、堅積ヲ破リ、痛ヲ止メ、中ヲ緩メ、惡血ヲ散ジ、臟府ノ擁氣ヲ通宣シ、女人一切ノ疾、並ニ産前産後ノ諸疾ヲ主ドル』と。

生薑(シヤウキヤウ)の性能

藥徵續篇に云く

『嘔ヲ主治ス。故ニ兼テ乾嘔、噫(噯氣)、噦逆(吃逆)ヲ治ス』と。

又、古方藥議に云く

『味辛温、嘔吐ヲ止メ、痰ヲ去リ、氣ヲ下シ、煩悶ヲ散ジ、胃氣ヲ開ク』と。

大棗（タイサウ）の性能
藥徴に云く

「擘引強急ヲ主治スル也。旁ヲ咳嗽、奔豚、煩躁、身疼、脇痛、腹中ノ痛ヲ治ス」と。
又、古方藥議に云く

「味甘平、中ヲ安ンジ、脾ヲ養ヒ、胃氣ヲ平カニシ、百藥ヲ和シ、心下懸（懸痛の謂）ヲ療シ、嗽ヲ止ム」と。
甘草（カンザウ）の性能
藥徴に云く

「急迫ヲ主治スル也。故ニ裏急、急痛、擘急ヲ治シ、而シテ旁ヲ厥冷、煩躁、衝逆等、諸般ノ急迫ノ毒ヲ治スル也」と。

又、古方藥議に云く

「味甘平、毒ヲ解シ、中ヲ溫メ、氣ヲ下シ、渴ヲ止メ、經脈ヲ通ジ、咽痛ヲ去ル」と。

本方證

桂枝湯の證として、傷寒論に擧ぐる主なるもの、要を摘めば

(一)脈浮にして汗自から出で、齋々として惡寒し、漸々として發熱し、鼻鳴し、乾嘔する證。（太陽病上篇）。(二)頭痛、發熱し、汗出で、惡風する證。（同上）。(三)太陽病、之を下して後、其氣上衝する證。（同上）。(四)外證未だ解せず、脈浮弱なる證。（太陽病中篇）。(五)頭痛して熱

有り、小便清める證。（同上）。(六)下利の後、身疼痛し、清便（即ち大便）自から調ふ證。（同上）。

(七)脈遲にして汗出づること多く、微しく惡寒する證。（陽明病篇）。(八)太陰病、脈浮なる證。（太陰病篇）。

又、金匱要略に於けるものは

(一)下利し、腹脹滿し、身體疼痛する證。（嘔吐噦下利病篇）。(二)産後中風、數十日解せず、頭微しく痛み、惡寒し、時々熱有り、心下悶え、乾嘔し汗出づる證。（婦人産後病篇）
等なり。

本方の作用

此方は、桂枝以下の五味より成り、而して桂枝、芍藥、生薑、大棗は其量多く、甘草は少量なり。即ち此方は、以上の五味互に相協同し、以て其效用を全うするものなり。

故に方極附言に云く

「上衝、頭痛、發熱シ、汗出デ、惡風シ、及ビ拘攣スル者ヲ治ス」と。

此說、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

腹證

腹診配劑錄に云く

「凡ソ桂枝湯類ノ腹狀ハ、大抵臍下に悸有ルモ、微ニシテ知リ難ク、悸無キ者モ、間々亦之レ有リ。特ニ

桂枝加桂湯（次出）ハ、其悸、手ニ隨フテ應ズ。總テ表證ノ腹狀ハ、力有ルガ如クニシテ緩也。此モ亦知ラズンバアル可ラズ」と。

凡そ腹證は、單り本方のみならず、爾餘の諸方に於ても、亦往々完備せざるものありと雖も、若し之を診知せば、投劑上に於ける的確なる目標と爲すことを得。

應用

- (一)、感冒、或は熱性病の初起にして、頭痛、發熱、微惡寒し、自汗出で、脈浮虛にして數なる症。若し脈浮緊にして汗無き症は、此方の禁忌とす。
- (二)、發熱し、微しく腹滿あり、汗出で、渴し、食を欲せず、惡寒あり、日を経るも尙ほ解せざる症。
- (三)、諸般の熱性病、頭痛、逆上して煩悶し、稍や便秘の傾向あり、少しく腹滿を覺え、食慾減せずして唯だ身體を露出するを厭ふ症。
- (四)、發熱し、汗出で、腹微滿し、或は腹痛し、或は心煩し、其脈浮なる症。
- (五)、頭痛して自汗あり、渴するも、舌苔なく、時々發熱あり、身體重く、其脈浮弱なる症。
- (六)、發熱し、汗出で、心下部痞塞し、食を欲せず、其脈浮なる症。
- (七)、發汗の後、寒熱無く、全身に疼痛、拘急を覺え、食慾に著變なき症。
- (八)、寒熱已に去り、其脈浮にして力無く、唯だ逆上感あり、結膜充血し、耳鳴し、食慾及び二便に著變なき症。

- (九)、吐瀉の後、發熱して自汗出で、身體疼痛を覺ゆる症。
 - (十)、腸「カタル」等の初起にして、浮脈を呈し、軽度の發汗を促すべき要ある症。
 - (十一)、腰神經痛、及び其類症。
 - (十二)、「ロイマチス」性疾患等。
 - (十三)、産後に於ける下痢性疾患等。
- 此他尙ほ種々の疾患に、本方を活用すべき場合少なからず。
傷寒附翼に云く

『凡ソ頭痛、發熱シ、惡風、惡寒シ、其脈浮ニシテ弱、汗自カラ出ヅル者ハ、中風（感冒の類を謂ふ）、傷寒（腸「チフス」及び其類症の謂）、雜病（爾餘の諸病を指す）ヲ問ハズ、咸ナ此ヲ用フルヲ得。惟ダ脈弱、自汗ヲ以テ主ト爲スノミ』と。

此說、本方運用上の参考と爲すべし。

桂枝加桂湯 ケイシカケイタウ (傷寒論及金匱要略方)

桂枝四・〇 芍藥 大棗 生薑各二・四 甘草一・六

右五味を一包と爲し、水一合四勺を以て、煮て六勺を取り、一回に溫服す（通常一日三回）。

此方は、桂枝湯の去加方にして、即ち其原方に、桂枝を増量せるものなり。

本方證

桂枝加桂湯の證として、傷寒論に擧ぐる所の要を摘めば
○氣、少腹（下腹部）より上つて心に衝く證。（太陽病中篇）。
金匱要略に於けるものも、亦之に同じ。（奔豚病篇）。

本方の作用

此方は、桂枝以下の五味より成り、而して桂枝は其量最も多く、芍藥、大棗、生薑之に次ぎ、甘草は最も少量なり。

即ち此方は、恰も桂枝湯に加ふるに、更に桂枝を以てせるものゝ如し。

故に方極附言に云く

『桂枝湯證ニシテ、上衝劇シキ者ヲ治ス』と。

此説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

應用

(一)、神經性頭痛等にして、其發作に際しては、頭痛忍ぶ可らず、或は頭部に汗出で、或は嘔吐を發し、或は煩躁、悶亂し、然かも脈候に著變なき症。

(二)、發汗の後、熱性症候なく、身體重くして頭眩し、二便稍や難、逆上感甚だしくして、睡眠不安の狀あり、其脈浮虛にして大なる症。

(三)、發汗の後、寒熱なく、脈浮にして心悸亢進あり。下肢寒冷にして頭部熱する症。

(四)、偏頭痛、及び其類症。

(五)、「ヒステリー」等にして、特に頭痛、或は逆上感甚しき症。

(六)、艾灸の後發熱し、脈浮大にして弱なる症等。

類聚方集覽に云く

『或ハ天陰リテ雨フラント欲スル毎ニ、頭痛スル者モ、亦當ニ之ヲ服スベシ。能ク其患ヲ免ル、也』と。

此説、本方運用上の参考と爲すべし。

桂枝加附子湯 ケイシカブシタウ (傷寒論方)

桂枝 芍藥 大棗 生薑各二・四 甘草一・六 附子一・二(今、先づ〇・三より始む)

右六味を一包と爲し、水一合四勺を以て、煮て六勺を取り、一回に溫服す(通常一日三回)。

注意 元來藥品の分量は、任意に増減し得べきものに非すと雖も、附子は恐るべき劇藥なるが故に、初學に在りては、先づ少量を投じて其應否を見、然る後に附子の證を確認し、以て其大量に到るを安全とす。以下附子の投與は皆此に倣ふべし。

此方は、桂枝湯の去加方にして、即ち其原方に、附子を加味せるものなり。

藥能

附子(ブシ)の性能

藥徴に云く

『水を逐フコトヲ主ドル也。故ニ能ク惡寒、身體、四肢、及ビ骨節ノ疼痛、或ハ沈重、或ハ不仁、或ハ厥冷ヲ治シ、而シテ旁ラ腹痛、失精、下利ヲ治ス』と。

又、古方藥議に云く

『味辛溫、中ヲ溫メ、寒ヲ逐ヒ、虛ヲ補ヒ、壅ヲ散ジ、肌骨ヲ堅メ、厥逆ヲ治シ、百藥ノ長ト爲ス』と。

本方證

桂枝加附子湯の證として、傷寒論に擧ぐる所の要を摘めば

○發汗し、遂に漏れて止まず、其人惡風(陽虛の結果)し、小便難く、四肢微急し、以て屈伸し難き證。(太陽病上篇)

なり。

本方の作用

此方は、桂枝以下の六味より成り、而して桂枝、芍藥、大棗、生薑は其量最も多く、甘草之に次ぎ、附子は最も少量なり。

即ち此方は、恰も桂枝湯に加ふるに、更に附子を以てせるものゝ如し。

故に方極附言に云く

『桂枝湯證ニシテ、惡寒シ、及ビ肢節微痛シ、以テ屈伸シ難キ者ヲ治ス』と。

又、醫聖方格に云く

『病人、汗漏レテ止マズ、其人惡風シ、四肢微急シ、以テ屈伸シ難ク、或ハ小便難キ者ハ、桂枝加附子湯之ヲ主ドル』と。

此二説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

腹證

腹診配劑錄に云く

『心煩シテ腹ニ力無シ。凡ソ附子ノ腹狀ハ、之ヲ按ジテ力無シ。然レドモ桂枝劑中ニ附子有ル者ハ、皆陽證中ノ客寒也。胡ナ少陰病ノ腹狀ノ腐瓢ヲ探ルガ如クナランヤ』と。

應用

- (一)、大汗出で、寒熱去らず、身體微痛し、尿不利、其脈浮にして弱なる症。
- (二)、微熱ありて自汗出で、尿利減少し、手足脱するが如き感あり、其脈浮にして力なき症。
- (三)、發汗して病解せず、手足拘急し、歩行するを得ざる症。
- (四)、關節「ロイマチス」、及び其類症。
- (五)、諸種の神經痛等。

類聚方廣義に云く

『此方ニ朮ヲ加ヘテ、桂枝加朮附子湯ト名ク。中風偏枯（半身不隨の類）、痿躄、痛風（關節「ロイマチス」の類）、小便利不利、或は頻數ナル者ヲ治ス。又微瘡、結毒、筋骨疼痛シ、諸瘍疽、淤膿盡キズ、新肉生ゼズ、遷延シテ愈エザル者ヲ治ス。應鐘、伯州、七寶、十幹、梅肉ノ類（以上丸散方名）、宜シキニ隨フテ之ヲ兼用ス』と。此説、本方運用上の参考と爲すべし。

桂枝加黃耆湯 ケイシカワウギタウ（金匱要略方）

桂枝 芍藥 大棗 生薑各二・四 甘草 黃耆各一・六

右六味を一包と爲し、水一合六勺を以て、煮て六勺を取り、一回に温服す（通常一日三回）。

此方は、桂枝湯の去加方にして、即ち其原方に、黃耆を加味せるものなり。

藥能

黃耆（ワウギ）の性能

藥徴に云く

『肌表ノ水ヲ主治スル也。故ニ能ク黃汗、盜汗、皮水ヲ治シ、又旁ラ身體ノ腫、或ハ不仁ノ者ヲ治ス』と。

又、古方藥議に云く

『味甘、微温、膿ヲ排シ、痛ヲ止メ、肉ヲ長ジ、血ヲ補ヒ、渴、腹痛ヲ止メ、虚勞、自汗ヲ治シ、肌熱及ビ諸經ノ痛ヲ治ス』と。

本方證

桂枝加黃耆湯の證として、金匱要略に擧ぐる所の要を摘めば

(一) 黃汗の病、兩脛自から冷え、又腰より以上必ず汗出で、下に汗無く、腰髀弛痛し、物有りて皮中に在る狀の如く、劇しき者は食すること能はず、身疼重、煩躁し、小便利の證。(水氣病篇)。(二) 諸種の黃病、但だ其小便を利すべき證。(黃疸病篇)なり。

本方の作用

此方は、桂枝以下の六味より成り、而して桂枝、芍藥、大棗、生薑は其量多く、甘草、黃耆は少量なり。即ち此方は、恰も桂枝湯に加ふるに、更に黃耆を以てせるもの、如し。

故に方極附言に云く

『桂枝湯證ニシテ、自汗、或ハ盜汗シ、若クハ黃汗スル者ヲ治ス』と。

此説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

應用

(一)、顔面、手足に軽度の浮腫を現はし、或は自汗、盜汗等ありて、脈浮虚なる症。
(二)、諸種の黃疸にして、尿量減少し、或は身體疼重、倦怠等を覺え、脈浮なる症。
類聚方集覽に云く

「黃病、小便ヲ利スルニ宜シキ者ハ、茵陳五苓散ノ類ヲ用フ。當ニ汗ヲ以テ之ヲ解スベキ者ハ、麻黃醇酒湯ノ類ヲ用フ。自汗、盜汗有リテ身重キ者ハ、此方ヲ用フ」と。

又、類聚方廣義に云く

「發黃、黃汗ノ二症、其發汗ス可キ者ハ、此方ヲ用ヒ、溫覆シテ以テ汗ヲ發ス可シ」と。

此二説、宜しく本方運用上の参考と爲すべし。

桂枝加葛根湯 ケイシカカツコンタウ (傷寒論方)

桂枝 芍藥 大棗 生薑各二・四 甘草一・六 葛根三・二

右六味を一包と爲し、水二合を以て、煮て六勺を取り、一回に溫服す(通常一日三回)。

此方、原本に在りては、麻黃有り。今、類聚方の改むる所に従ふ。

此方は、桂枝湯の去加方にして、即ち其原方に、葛根を加味せるものなり。

藥能

葛根(カツコン)の性能

藥徵に云く

「項背強ルヲ主治スル也。旁ラ喘シテ汗出ヅルヲ治ス」と。

又、古方藥議に云く

「味甘平、大熱ヲ主ドリ、肌ヲ解シ、腠理ヲ開キ、津液ヲ生ジ、筋脈ヲ舒ブ」と。

本方證

桂枝加葛根湯の證として、傷寒論に擧ぐる所の要を摘めば

○項背強ること凡々、反つて汗出で、惡風する證。(太陽病上篇)

なり。

本方の作用

此方は、桂枝以下の六味より成り、而して葛根は其量最も多く、桂枝、芍藥、大棗、生薑之に次ぎ、甘草は最も少量なり。

即ち此方は、恰も桂枝湯に加ふるに、更に葛根を以てせるもの、如し。

故に方極附言に云く

「桂枝湯證ニシテ項背強急スル者ヲ治ス」と。

此説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

應用

(一)、感冒の初起等にして、項背強急し、惡寒、發熱し、自汗出づる症。

(二)、熱性病の初起等。

(三)、肩背痛、頭首の旋廻困難にして、脈浮緩なる症。

(四)、麻疹、及び爾他發疹病の初起等。

濟聖總錄に云く

『四時ノ傷寒(熱性病)、初メテ覺ユル者ハ、宜シク之ヲ服スベシ』と。

又、類聚方集覽に云く

『驚癇及ビ破傷風、角弓反張スル者ハ、即チ項背強急凡凡ノ狀也。此方ニ宜シ』と。

又、類聚方廣義に云く

『痘瘡初起、輕症ノ者ハ此方ニ宜シ。起脹貫膿ノ際ハ桔梗、黃耆等ヲ加ヘ、收靨以後ハ大黃ヲ加ヘ、以テ餘熱ヲ解シ、殘毒ヲ驅ルトキハ、則チ眼患、痘癰等ノ厄有ルコト無シ。麻疹ノ初起、輕症ノ者モ亦之ヲ主ドル』と。

此等の諸説、宜しく本方運用上の參考と爲すべし。

葛根湯 カツコンタウ (傷寒論及金匱要略方)

葛根二・八 麻黃 生薑 大棗各二・一 桂枝 芍藥 甘草各一・四

右七味を一包と爲し、水二合を以て、煮て六勺を取り、一回に溫服す(通常一日三回)。

『覆フテ微似汗ヲ取ル。(下略)』

此方、金匱要略に在りては、芍藥の量多し。今、傷寒論に従ふ。

此方は、桂枝加葛根湯の去加方にして、即ち其原方に、桂枝、芍藥を減量し、麻黃を加味せるものなり。然るに成方の上より之を見れば、葛根は此方の君藥なり。故に之を葛根湯と稱す。

藥能

麻黃(マワウ)の性能

藥徵に云く

『喘咳、水氣ヲ主治スル也。旁ラ惡風、惡寒、無汗、身疼、骨節痛、一身黃腫ヲ治ス』と。

又、古方藥議に云く

『味苦溫、表ヲ發シ、汗ヲ出シ、邪熱ヲ去リ、欬逆上氣ヲ止メ、寒熱ヲ除ク。傷寒ヲ療シ、肌ヲ解スルコト第一ナリ』と。

本方證

葛根湯の證として、傷寒論に擧ぐる所の要を摘めば

(一)項背強ること凡凡、汗無くして惡風する證。(太陽病中篇)。(二)太陽と陽明との合病にして、自下

利する證。(同上)。

又、金匱要略に於けるものは

○汗無くして、小便反つて少なく、氣、胸に上衝し、口噤みて語ることを得ざる證。(瘧濕腸病篇)なり。

本方の作用

此方は、葛根以下の七味より成り、而して葛根は其量最も多く、麻黄、生薑、大棗之に次ぎ、桂枝、芍薬、甘草は最も少量なり。

即ち此方は、恰も桂枝加葛根湯中の桂枝、芍薬を減量し、更に之に加ふるに、麻黄を以てせるもの、如し。故に方極附言に云く

『項背強急シ、發熱、惡風シ、或ハ喘シ、或ハ身疼ム者ヲ治ス』と。

又、醫聖方格に云く

『陽病、項背強ルコト凡ル、發熱シ、汗無ク、惡風スルハ、葛根湯之ヲ主ドル』と。

此一説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

應用

(一)、感冒の初起、項背強急、惡寒、發熱し、汗出でざる症には、先づ此方を與へて發汗せしむるを良策とす。

(二)、下痢の初起等にして、惡寒、發熱し、脈浮數なる症。

(三)、肩背痛の諸症にして、脈浮數を現はす者。

(四)、輕症假性腦膜炎、或は破傷風の類にして、其初起、浮數の脈を現はす症。

(五)、麻疹等。

(六)、種痘後の發熱。

(七)、諸種の皮膚病、殊に濕疹及び白禿瘡等。

(八)、齒痛、及び齒齦腫痛等には、證に由り石膏を加ふ。

(九)、癩癧等には、證に由り反鼻を加ふ。

(十)、諸種の化膿性炎症には、證に由り桔梗、石膏を加ふ。

類聚方廣義に云く

『此方ハ、項背強急ヲ主治スル也。故ニ能ク驚癇、破傷風、産後ノ感冒、卒瘏、痘瘡ノ初起等、角弓反張シ、上竄、搖擗シ、身體強直スル者ヲ治ス。宜シク症ニ隨ヒテ熊膽、紫圓、參連湯、瀉心湯等ヲ兼用スベシ』と。

此説、本方運用上の参考と爲すべし。

葛根加半夏湯 カツコンカハンゲタウ (傷寒論方)

葛根 半夏各二・四 桂枝 芍薬 甘草各一・二 麻黄 大棗 生薑各一・八

右八味を一包と爲し、水二合を以て、煮て六勺を取り、一回に溫服す(通常一日三回)。

此方、宋板傷寒論に在りては、生薑の量稍や少なし。今、類聚方に従ふ。

此方は、葛根湯の去加方にして、即ち其原方に、半夏を加味せるものなり。

藥能

半夏（ハンゲ）の性能

藥徴に云く

「痰飲、嘔吐ヲ主治スル也。旁ラ心痛、逆滿、咽中ノ痛、咳、悸、腹中雷鳴ヲ治ス」と。

又、古方藥議に云く

「味辛平、氣ヲ下シ、胃ヲ開キ、痰涎ヲ消シ、嘔吐ヲ止メ、欬逆、喉咽ノ腫痛ヲ主ドル」と。

本方證

葛根加半夏湯の證として、傷寒論に擧ぐる所は、

○太陽と陽明との合病にして、下利せず、但だ嘔する證。（太陽病中篇）

なり。

本方の作用

此方は、葛根以下の八味より成り、而して葛根、半夏は其量最も多く、麻黄、大棗、生薑之に次ぎ、桂枝、芍藥、甘草は最も少量なり。

即ち此方は、恰も葛根湯に加ふるに、更に半夏を以てせるものゝ如し。

故に方極附言に云く

「葛根湯證ニシテ、嘔スル者ヲ治ス」と。

此説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

應用

傷寒論には、下利せず、但だ嘔する證を擧げたるも、下痢性疾患にして、嘔吐を兼ね、惡寒、發熱、脈浮數なる症に於ても、亦此方を運用することを得。

證治要訣に云く

「葛根加半夏湯ハ、太陽ト陽明トノ合病、身熱シ、頭疼ミ、項強リ、煩熱シ、鼻乾キ、目疼ンデ嘔スルヲ治ス」と。

桂枝加芍藥湯 ケイシカシヤクヤクタウ（傷寒論方）

桂枝 大棗 生薑各二・四 芍藥四・八 甘草一・六

右五味を一包と爲し、水一合四勺を以て、煮て六勺を取り、一回に温服す（通常一日三回）。

此方は、桂枝湯の去加方にして、即ち其原方に、芍藥を増量せるものなり。

本方證

桂枝加芍藥湯の證として、傷寒論に擧ぐる所の要を摘めば

○本と太陽病、之を下し、因て腹滿し、時に痛む證。（太陰病篇）

なり。

本方の作用

此方は、桂枝以下の五味より成り、而して芍薬は其量最も多く、桂枝、大棗、生薑之に次ぎ、甘草は最も少量なり。

即ち此方は、恰も桂枝湯に加ふるに、更に芍薬を以てせるもの、如し。

故に方極附言に云く

『桂枝湯證ニシテ、拘攣劇シキ者ヲ治ス』と。

又、醫聖方格に云く

『病人、攣急シテ時ニ痛ム者ハ、桂枝加芍薬湯之ヲ主ドル』と。

此二説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

應用

(一)、或は發汗し、或は下して後、熱候去り、腹柔軟なるも、虚服し、或は疼痛を發し、便通に著變なき症。

(二)、發汗、下後、微熱尙ほ去らず、腹柔軟にして虚服し、之を按ずれば則ち痛み、便通に著變なき症。

(三)、消化不良に因する腹痛等。

(四)、熱性下痢等。

(五)、腰痛を發する諸症。

(六)、痔漏等。

類聚方廣義に云く

『此方ニ附子ヲ加ヘテ、桂枝加芍薬附子湯ト名ク。桂枝加芍薬湯ノ症ニシテ、惡寒スル者ヲ治ス。又腰脚攣急シ、冷痛、惡寒スル者ヲ治ス』と。

此説、本方運用上の参考と爲すべし。

桂枝加大黄湯 ケイシカダイワウタウ (傷寒論方)

桂枝 大棗 生薑各二・四 芍薬四・八 甘草一・六 大黄〇・八

右六味を一包と爲し、水一合四勺を以て、煮て六勺を取り、一回に温服す(通常一日三回)。

此方、宋板に在りては大黄の量稍や多し。今、成本に従ふ。

此方は、桂枝加芍薬湯の去加方にして、即ち其原方に、大黄を加味せるものなり。

吉益東洞氏は、此方を桂枝加芍薬大黄湯と改稱す。

藥能

大黄(ダイワウ)の性能

藥徴に云く

『結毒ヲ通利スルヲ主ドル也。故ニ能ク胸滿、腹滿、腹痛、及ビ便閉、小便不利ヲ治シ、旁ヲ發黃、瘀血、

腫脹ヲ治ス」と。

又、古方藥議に云く

『味苦寒、腸胃ヲ蕩滌シ、陳ヲ推シ、新ヲ致シ、大小便ヲ利シ、瘀血ヲ下シ、癥瘕ヲ破リ、實熱ヲ瀉ス』と。

本方證

桂枝加大黃湯の證として、傷寒論に擧ぐる所の要を摘めば

○本と太陽病、之を下し、因て腹滿し、實痛する證。(太陰病篇)なり。

本方の作用

此方は、桂枝以下の六味より成り、而して芍藥は其量最も多く、桂枝、大棗、生薑之に次ぎ、甘草また之に次ぎ、大黃は最も少量なり。

即ち此方は、恰も桂枝加芍藥湯に加ふるに、更に大黃を以てせるもの、如し。

故に方極附言に云く

『桂枝加芍藥湯證ニシテ、腹中大實痛スル者ヲ治ス』と。

又、醫聖方格に云く

『腹中攣急シ、大實痛スル者ハ、桂枝加大黃湯之ヲ主ドル』と。

此二説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

腹證

腹診配劑錄に云く

『桂枝加芍藥湯ノ如クニシテ、之ヲ按ズレバ力有リ。其痛モ亦桂枝加芍藥湯ヨリモ劇シ』と。

應用

(一)、發汗の後、五六日を経て尙ほ微惡寒し、脈少しく浮にして、腹滿あり、稍や下痢して裏急後重の状態ある症。

(二)、脈緩にして滑、時々發熱し、下腹部拘痛し、便通頻繁にして澁痢する症。

(三)、熱性下痢、或は赤痢等にして、下痢すること一日に十數回、腹痛甚だしく、脈浮數にして弱なる症。

(四)、腸疝痛等にして、腹滿感ある症。

(五)、感冒に食物停滯を兼ねる等の症。

類聚方集覽に云く

『小兒、宿食化セズシテ、腹痛スル者ヲ治ス。若シ嘔スル者ハ、大黃ヲ倍ス。凡ソ此方ヲ用フルニハ、宜シク大黃ヲ倍加スベシ』と。

又、類聚方廣義に云く

『此方に附子ヲ加ヘテ、桂枝加芍藥附子大黃湯ト名ク。疝家、發熱、惡寒シ、腹中拘攣シ、痛、腰脚ニ引

キ、或ハ陰卵焮腫シ、二便不利ノ者ヲ治ス。又、乾脚氣、筋攣、骨痛シ、或ハ十指冷痺シ、大便難キ者ヲ治ス」と。

此二説、本方運用上の参考と爲すべし。

小建中湯 セウケンチュウタウ (傷寒論及金匱要略方)

桂枝 生薑 大棗各一・八 甘草一・二 芍藥三・六 膠飴一六・〇

右六味、水一合四勺を以て、先づ五味を煮て六勺を取り、後、膠飴を入れ、更に微火にて溶解せしめ、之を一回に温服す(通常一日三回)。

「嘔家ハ建中湯ヲ用フ可ラズ。甜キヲ以テノ故也。」

此方、成氏傷寒論註解に在りては、甘草の分量稍や多く、金匱要略に在りては、生薑の分量稍や少なし。今、尾臺榕堂氏の改むる所に従ふ。

此方、能く中氣を建立す。故に之を建中湯と名くと。

又、小と稱するは、其大建中湯に比して、作用緩和なるを以てなり。

此方は、桂枝加芍藥湯の去加方にして、即ち其原方に、膠飴を加味せるものなり。然るに成方の上より之を見れば、膠飴は本方の君藥なり。

藥能

膠飴(カウイ)の性能

藥微續篇に云く

「膠飴ノ功ハ、蓋シ甘草及ビ蜜ニ似タリ。故ニ能ク諸ロノ急ヲ緩ム」と。

又、古方藥議に云く

「味甘温、虚乏ヲ補ヒ、氣力ヲ益シ、痰ヲ消シ、嗽ヲ止メ、五臟ヲ潤ホス」と。

本方證

小建中湯の證として、傷寒論に擧ぐる主なるもの、要を摘めば

(一)腹中急痛の證。(太陽病中篇)。(二)心中悸して煩する證。(同上)。

又、金匱要略に於けるものは

(一)裏急し、悸して衄し、腹中痛み、夢に失精し、四肢痠痛し、手足煩熱し、咽乾き、口燥く證。(血痺虚勞病篇)。(二)婦人、腹中痛む證。(婦人雜病篇)

等なり。

本方の作用

此方は、桂枝以下の六味より成り、而して膠飴は其量最も多く、芍藥之に次ぎ、桂枝、生薑、大棗また之に次ぎ、甘草は最も少量なり。

即ち此方は、恰も桂枝加芍藥湯に加ふるに、更に膠飴を以てせるもの、如し。

故に方極附言に云く

「桂枝加芍藥湯證ニシテ、腹中、及び腹皮急痛スル者ヲ治ス」と。
此説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

腹證

腹診配劑錄に云く

「胸中煩悸シ、心下ヨリ臍下ニ至ルマデ、鼓皮ヲ撫ヅルガ如ク、棒二本ノ横ハレルガ如シ。此レ則チ拘急也」と。

應用

- (一)、腹部虚脹し、腹筋の拘攣或は疼痛を發する症。
 - (二)、神經性心悸亢進等にして、時々衄血し、腹部或は手足拘急し、手掌、足蹠に煩熱を覺ゆる症。
 - (三)、諸種の貧血、或は萎黃病の類にして、尿利頻繁、腹痛、拘急等を發する症。
 - (四)、急慢の下痢等にして、腹部軟弱なるも、腹筋攣急し、脈濇、或は浮大にして虚なる症。
 - (五)、初生兒の「ヘルニア」等。
- 傷寒六書に云く
「汗ヲ發シ、又復ツテ之ヲ下シ、惡寒、發熱（虚熱）シ、休止スル時無キ者ハ、小建中湯ニ宜シ」と。
此説、本方運用上の参考と爲すべし。

黄耆建中湯 ワウギケンチユウタウ (金匱要略方)

桂枝 生薑 大棗各一・八 甘草一・二 芍藥三・六 黄耆一・八 膠飴一六・〇
右七味、水一合四勺を以て、先づ六味を煮て六勺を取り、後、膠飴を入れ、更に微火にて溶解せしめ、一回に温服す（通常一日三回）。

此方、原本に在りては、黄耆の分量稍や少なし。今、尾臺榕堂氏の改むる所に従ふ。

此方は、小建中湯の去加方にして、即ち其原方に、黄耆を加味せるものなり。

本方證

黄耆建中湯の證として、金匱要略に擧ぐる所は
○虚勞、裏急、諸ろの不足證。（血痺虚勞病篇）
なり。

本方の作用

此方は、桂枝以下の七味より成り、而して膠飴は其量最も多く、芍藥之に次ぎ、桂枝、生薑、大棗、黄耆また之に次ぎ、甘草は最も少量なり。
即ち此方は、恰も小建中湯に加ふるに、更に黄耆を以てせるものゝ如し。
故に方極附言に云く

『小建中湯證ニシテ、自汗、或ハ盜汗アル者ヲ治ス』と。
又、醫聖方格に云く

『諸病、裏急シ、自汗、盜汗シ、面體ニ色少ナク、身重ク、皮膚、骨肉、或ハ腰背拘急スル者ハ、黃耆建中湯之ヲ主ドル』と。

此二説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

應用

- (一)、諸種の貧血等にして、自汗、或は盜汗等ある症。
 - (二)、産後の脚氣等にして、骨立羸瘦し、常に身體、四肢に冷感ある症。
 - (三)、慢性下痢等にして、衰弱殊に甚しく、時々腹痛し、食思無く、脈細弱にして、或は微汗出づる症。
 - (四)、痔漏、或は諸種の腫瘍膿潰して後、所謂虚熱を發し、自汗、盜汗等ある症には、此方に當歸を加ふ。
- 類聚方廣義に云く

『此方ニ當歸ヲ加ヘテ、耆歸建中湯ト名ク。諸瘍膿潰ノ後、荏苒トシテ愈エズ、虚羸、煩熱シ、自汗、盜汗シ、稀膿止マズ、新肉長ゼザル者ヲ治ス。若シ惡寒シ、下利シ、四肢冷ユル者ハ、更ニ附子ヲ加フ。又、痘瘡、淡白ニシテ灌膿セズ、及ビ灌膿ノ際、平塌、灰白ニシテ、或ハ内陷、外剝シ、下利、微冷シ、聲啞シテ脈微ナル者ヲ治ス。伯州散ヲ兼用ス。若シ下利セズ、通身灼熱シ、寒戰、咬牙シ、胸腹脹滿シ、痰喘、口渴シ、短氣、煩躁シ、脈數急ナル者ハ、死生反掌ニ在リ。調胃承氣湯、大承氣湯、走馬湯、紫圓

ノ類ヲ撰ビ用ヒ、以テ酷毒ヲ一舉ニ殲ストキハ、則チ庶幾クハ一生ヲ百死ニ回ス可シ』と。
此説、本方運用上の参考と爲すべし。

桂枝加龍骨牡蠣湯 ケイシカリユウコツボレイタウ (金匱要略方)

桂枝 芍藥 大棗 生薑 龍骨 牡蠣各一・八 甘草一・二

右七味を一包と爲し、水一合四勺を以て、煮て六勺を取り、一回に服用す(通常一日三回)。

此方は、桂枝湯の去加方にして、即ち其原方に、龍骨、牡蠣を加味せるものなり。

藥能

龍骨(リュウコツ)の性能

藥徵に云く

『臍下ノ動(動悸)ヲ主治スル也。旁ラ煩驚、失精ヲ治ス』と。

又、古方藥議に云く

『味甘平、小兒ノ熱氣驚癇、心腹煩滿ヲ主ドリ、夢寐洩精、小便洩利ヲ療ス』と。

牡蠣(ボレイ)の性能

藥徵に云く

『胸腹ノ動ヲ主治スル也。旁ラ驚狂、煩躁ヲ治ス』と。

又、古方藥議に云く

「味鹹平、傷寒ノ寒熱、溫瘧洒洒、驚恚、怒氣ヲ主ドリ、盜汗ヲ止メ、洩精ヲ療シ、心脇下ノ痞熱ヲ治ス」と。

本方證

桂枝加龍骨牡蠣湯の證として、金匱要略に擧ぐる所の要を摘めば

○小腹弦急し、陰頭寒え、目眩し、髮落ち、失精する證。(血痺虛勞病篇)なり。

吉益東洞氏曰く

「按ズルニ、當ニ胸腹動ノ證有ルベシ」と。

本方の作用

此方は、桂枝以下の七味より成り、而して桂枝、芍藥、大棗、生薑、龍骨、牡蠣は其量多く、甘草は少量なり。

即ち此方は、恰も桂枝湯に加ふるに、更に龍骨、牡蠣を以てせるものゝ如し。

故に方極附言に云く

「桂枝湯證ニシテ、胸腹、及ビ臍下ニ動(動悸)有ル者ヲ治ス」と。

又、醫聖方格に云く

「病人、頭痛、身疼シ、或ハ小腹弦急シ、休作時有り、而シテ汗出デ、男子ハ失精シ、女子ハ夢交シ、喜バ盜汗スル者ハ、桂枝加龍骨牡蠣湯之ヲ主ドル」と。

此二説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

應用

(一)、神經衰弱性不眠症等。

(二)、遺精。

(三)、神經性心悸亢進等。

(四)、常に神經過敏にして、逆上し易く、驚怖し易く、又發汗し易き等の症。

(五)、火傷の後、或は艾灸後の煩躁、發熱等。

(六)、禿髮症、體質虛弱にして、常に逆上感ある等の者。

類聚方廣義に云く

「婦人、心氣鬱結シ、胸腹に動甚シク、寒熱交モ作り、經行常ニ期ヲ愆リ、多夢、驚惕シ、鬼交漏精シ、身體漸ヤク羸瘦ニ就キ、其狀恰モ勞瘵ニ似タリ。孀婦、室女、情慾妄動シテ遂ゲザル者ニ、多ク此症有り。此方ニ宜シ」と。

此説、本方運用上の参考と爲すべし。

桂枝加芍藥生薑人參湯

ケイシカシヤクヤク

シヤウキヤウニンジンタウ (傷寒論方)

桂枝

大棗

人參各二・四

芍藥

生薑各三・二

甘草一・六

右六味を一包と爲し、水一合四勺を以て、煮て六勺を取り、一回に温服す (通常一日三回)。

此方、原本に在りては、加味及び藥量を方名に示す。今、類聚方の簡稱に従ふ。

此方は、桂枝湯の去加方にして、即ち其原方に、芍藥、生薑を増量し、人參を加味せるものなり。

藥能

人參 (ニンジン) の性能

藥能に云く

『心下ノ痞堅、痞鞭、支結ヲ主治スル也。旁ラズ食、嘔吐、喜唾 (屢ば唾す)、心痛、腹痛、煩悸ヲ治ス』と。

又、古方藥品考に云く

『氣味甘ク、微シク苦ク、温潤ニシテ餘味有リ。故ニ能ク津液ヲ生ジ、渴ヲ潤ホシ、陽ヲ益シ、虚羸ヲ温補スルノ功有リ』と。

本方證

桂枝加芍藥生薑人參湯の證として、傷寒論に擧ぐる所は

○發汗の後、身疼痛し、脈沈遅なる證。(太陽病中篇) なり。

吉益東洞氏曰く

『按ズルニ、當ニ心下ノ痞鞭、或ハ拘急、或ハ嘔ノ證有ルベシ』と。

本方の作用

此方は、桂枝以下の六味より成り、而して芍藥、生薑は其量最も多く、桂枝、大棗、人參之に次ぎ、甘草は最も少量なり。

即ち此方は、元來桂枝湯の加味方なるも、また桂枝加芍藥湯に生薑を増量し、更に人參を加味せりと解するを得。

故に方極附言に云く

『桂枝加芍藥湯證ニシテ、心下痞鞭シ、及ビ嘔スル者ヲ治ス』と。

此說、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

應用

(一)、發汗の後、腹微滿して痛み、或は乾嘔を發し、或は身體痛み、或は尙ほ少しく汗出づる症。

(二)、腹痛し、或は乾嘔し、四肢拘急し、微汗出づる症。

- (三)、發汗の後、頭痛して尙ほ微熱あり、四肢疼重、倦怠を覺ゆる症。
 - (四)、腹痛、四肢拘攣し、心下痞塞の感ありて食思無き症。
 - (五)、諸種の嘔吐、心下痞鞭し、脈沈遅なる症。
- 類聚方廣義に云く
 『痙家、寒熱交モ作リ、心下痞鞭シ、胸腹攣痛シテ嘔スル者ヲ治ス』と。
 此説、本方運用上の参考と爲すべし。

桂枝加厚朴杏子湯 ケイシカコウボクキヤウシタウ (傷寒論方)

桂枝 芍藥 大棗 生薑各二・四 甘草 厚朴 杏仁各一・六

右七味を一包と爲し、水一合四勺を以て、煮て六勺を取り、一回に温服す(通常一日三回)。

此方は、桂枝湯の去加方にして、即ち其原方に、厚朴、杏子(即ち杏仁)を加味せるものなり。

藥能

厚朴(コウボク)の性能

藥徴に云く

『胸腹脹滿ヲ主治スル也。旁ヲ腹痛ヲ治ス』と。

又、古方藥議に云く

『味苦温、痰ヲ消シ、氣ヲ下シ、結水ヲ去リ、宿血ヲ破リ、水穀ヲ消化シ、大ニ胃氣ヲ温メ、腹痛、脹滿、喘欬ヲ療ス』と。

杏仁(キヤウニン)の性能

藥徴に云く

『胸間ノ停水ヲ主治スル也。故ニ喘咳ヲ治シ、而シテ旁ヲ短氣、結胸、心痛、形體ノ浮腫ヲ治ス』と。

又、古方藥議に云く

『味甘温、氣ヲ下シ、肌ヲ解シ、結ヲ散ジ、燥ヲ潤ホシ、欬逆上氣ヲ主ドリ、狗毒ヲ殺ス』と。

本方證

桂枝加厚朴杏子湯の證として、傷寒論に擧ぐる所の要を摘めば

- (一)喘家(即ち喘の宿疾ある者)の桂枝湯證。(太陽病上篇)。(二)微喘ありて、表未だ解せざる證。(太陽病中篇)
- なり。

本方の作用

此方は、桂枝以下の七味より成り、而して桂枝、芍藥、大棗、生薑は其量多く、甘草、厚朴、杏仁は少量なり。

即ち此方は、恰も桂枝湯に加ふるに、更に厚朴、杏仁を以てせるもの、如し。

故に方極に云く

『桂枝湯證ニシテ、胸滿シ、微喘スル者ヲ治ス』と。

此說、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

應用

(一)、感冒性疾患にして、自汗出で、或は惡寒し、喘咳し、微煩して脈浮數なる症。

(二)、下痢の後、腹中虛脹して喘咳を發し、微汗ありて脈數なる症。

(三)、老人に於ける輕症氣管枝炎等。

(四)、喘息初起の症等。

類聚方廣義に云く

『本ト喘症有ル、之ヲ喘家ト謂フ。喘家、桂枝湯ノ症ヲ見ハス者、此方ヲ以テ汗ヲ發スルトキハ則チ愈ユ。若シ喘、邪ニ因テ其勢急ニ、邪、喘ニ乘ジテ其威盛ナル者ハ、此方ノ得テ治スル所ニ非ザル也。宜シク它方ヲ參考シ、以テ治ヲ施スベシ。拘拘タル可ラズ』と。

此說、本方運用上の參考と爲すべし。

桂枝去芍藥湯 ケイシキヨシヤクヤクタウ (傷寒論方)

桂枝 大棗 生薑各三・六 甘草二・四

右四味を一包と爲し、水一合四勺を以て、煮て六勺を取り、一回に溫服す(通常一日三回)。

此方は、桂枝湯の去加方にして、即ち其原方中、芍藥を去れるものなり。

本方證

桂枝去芍藥湯の證として、傷寒論に擧ぐる所は

○太陽病、之を下して後、脈促にして胸滿(實滿に非ず)する證。(太陽病上篇)なり。

本方の作用

此方は、桂枝以下の四味より成り、而して桂枝、大棗、生薑は其量多く、甘草は少量なり。

即ち此方は、恰も桂枝湯の方中に於て、芍藥一味を去れるもの、如し。

故に方極附言に云く

『桂枝湯證ニシテ、拘攣セザル者ヲ治ス』と。

又、醫聖方格に云く

『病人、脈促、上衝シテ胸滿シ、頭ニ汗出ヅル者ハ、桂枝去芍藥湯之ヲ主ドル』と。

此二說、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

腹證

腹診配劑錄に云く

第一 桂枝湯類

「胸滿シテ、腹中ニ苦シム所無シ。唯ダ其人、胸滿シ、心氣安カラズト謂フ」と。

應用

(一)、發汗し、或は下して後、表證尙ほ解せず、上逆を感じ、胸中滿悶し、其脈數なる症。
(二)、表證既に去れるも、胸中鬱滿して苦惱し、其脈尙ほ數なる症。
此方は、實地上に應用せらるべき場合比較的少なきも、之より出でたる諸方を解するには必要缺く可らず。

桂枝去芍藥加蜀漆龍骨牡蠣湯

ケイシキヨシヤクヤクカシヨクシツリユウコツボ

レイタウ (傷寒論及金匱要略方)

桂枝 生薑 大棗 蜀漆各一・八 甘草一・二 牡蠣三・〇 龍骨二・四

右七味を一包と爲し、水二合四勺を以て、煮て六勺を取り、一回に溫服す(通常一日三回)。

此方、原本に在りては、桂枝去芍藥加蜀漆龍骨牡蠣救逆湯と名く。今、類聚方の簡稱に従ふ。

此方は、桂枝去芍藥湯の去加方にして、即ち其原方に、蜀漆、龍骨、牡蠣を加味せるものなり。

藥能

蜀漆(シヨクシツ)の性能

藥徵續篇に云く

「胸腹、及ビ臍下ノ動劇シキ者ヲ主治ス。故ニ兼テ驚狂、火逆、瘧疾ヲ治ス」と。

又、古方藥議に云く

「味辛平、瘧、及ビ欬逆、寒熱、腹中ノ癥堅、痞結、積聚、邪氣ヲ主ドリ、胸中ノ邪、結氣ヲ療シテ、之ヲ吐出ス」と。

本方證

桂枝去芍藥加蜀漆龍骨牡蠣湯の證として、傷寒論に擧ぐる所の要を摘めば

○亡陽して、驚狂し、起臥安からざる證。(太陽病中篇)。

又、金匱要略に於けるものは

○火邪の證。(驚悸吐血下血胸滿瘀血病篇)

なり。

本方の作用

此方は、桂枝以下の七味より成り、而して牡蠣は其量最も多く、龍骨之に次ぎ、桂枝、生薑、大棗、蜀漆また之に次ぎ、甘草は最も少量なり。

即ち此方は、恰も桂枝湯に加ふるに、更に蜀漆、龍骨、牡蠣を以てせるもの、如し。

故に方極附言に云く

「桂枝去芍藥湯證ニシテ、胸腹、及ビ臍下ノ動劇シキ者ヲ治ス」と。

此説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

應用

- (一)、頭面に逆上感有り、心中煩悶し、安眠するを得ず、口乾くも飲料を欲せず、脚部微冷にして、其脈浮大なる症。
- (二)、自汗出で、脈洪大、心悸亢進を覚え、逆上し、二便共に減少し、食慾著しく減せざる症。
- (三)、密室に閉居し、或は火力強き炬燵等にて逆上し、頭重、眩暈等を發する症。
- (四)、湯火傷、或は艾灸後の發熱等。

桂枝去芍藥加皂莢湯 ケイシキヨシヤクヤクカサウケフタウ (金匱要略方)

桂枝 生薑 大棗各三・〇 甘草 皂莢各二・〇

右五味を一包と爲し、水一合四勺を以て、煮て六勺を取り、一回に温服す(通常一日三回)。

此方、原本に在りては、大棗の分量稍や少なし。今、吉益東洞氏の改むる所に従ふ。

此方は、桂枝去芍藥湯の去加方にして、即ち其原方に、大棗を減量し、皂莢を加味せるものなり。

藥能

皂莢(サウケフ)の性能

古方藥品考に云く

『其味辛辣ニシテ温散ナリ。以テ能ク欬逆上氣、肺痿、涎沫ヲ治ス』と。

又、古方藥議に云く

『味辛温、九竅ヲ利シ、欬嗽ヲ除キ、堅癥ヲ破リ、關節ヲ通ジ、咽喉ノ痺塞、中風ノ口噤ヲ治ス』と。

本方證

桂枝去芍藥加皂莢湯の證として、金匱要略に擧ぐる所は

○肺痿、涎沫を吐する證。(肺痿肺癰欬嗽上氣病篇附方)

なり。

本方の作用

此方は、桂枝以下の五味より成り、而して桂枝、生薑、大棗は其量多く、甘草、皂莢は少量なり。即ち此方は、恰も桂枝去芍藥湯に加ふるに、更に皂莢を以てせるもの、如し。

故に方極に云く

『桂枝去芍藥湯證ニシテ、濁唾、涎沫ヲ吐スル者ヲ治ス』と。

此説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

應用

- (一)、腐敗性氣管枝炎等にして、發熱甚しからず、且つ未だ衰弱加はらざる症。
- (二)、氣管枝炎等。

類聚方廣義に云く

「咳スル者ハ、大率ネ上氣、胸滿ス。桂枝去芍藥湯ニテ、以テ上氣、胸滿ヲ治シ、更ニ皂莢ヲ加ヘテ、以テ涎沫ヲ驅ル也」と。

此説、本方運用上の参考と爲す可し。

茯苓桂枝白朮甘草湯 ブクリヤウケイシビヤクチユツカンザウタウ

又苓桂朮甘湯 リヤウケイヂユツカントウ (傷寒論及金匱要略方)

茯苓四・八 桂枝三・六 白朮 甘草各二・四

右四味を一包と爲し、水一合二勺を以て、煮て六勺を取り、一回に温服す(通常一日三回)。

此方は、桂枝去芍藥湯の附方と見做すべきものなり。

藥能

茯苓(ブクリヤウ)の性能

藥徵に云く

「悸、及ビ肉瞶筋惕(一種の筋肉攣縮の意)ヲ主治スル也。旁ラ小便不利、頭眩、煩躁ヲ治ス」と。

又、古方藥議に云く

「味甘平、胸脇ノ逆氣、恐悸、心下ノ結痛、煩滿ヲ主ドリ、小便ヲ利シ、消渴ヲ止メ、胃ヲ開キ、瀉ヲ止

ム」と。

朮(ヂユツ)の性能

藥徵に云く

「水ヲ利スルコトヲ主ドル也。故ニ能ク小便ノ自利、不利ヲ治シ、旁ラ身ノ煩疼、痰飲、失精、眩冒、下利、喜唾ヲ治ス」と。

又、古方藥議に云く

「味苦温、風寒、濕痺ヲ主ドリ、胃ヲ開キ、痰涎ヲ去リ、下泄ヲ止メ、小便ヲ利シ、心下急滿ヲ除キ、腰腹ノ冷痛ヲ治ス」と。

本方證

苓桂朮甘湯の證として、傷寒論に擧ぐる所の要を摘めば

○若くは吐し、若くは下して後、心下に逆滿し、氣、胸に上衝し、起てば則ち頭眩し、身、振振として動搖する證。(太陽病中篇)。

又、金匱要略に於けるものは

(一)心下に痰飲有り、胸脇支滿し、目眩めく證。(痰飲欬嗽病篇)。(二)短氣して、微飲有る證。(同上)なり。

本方の作用

此方は、茯苓以下の四味より成り、而して茯苓は其量最も多く、桂枝之に次ぎ、朮、甘草は少量なり。即ち此方は、以上の四味互に相協同し、以て其効用を全うするものなり。故に方極附言に云く

『心下悸シ、上衝シ、起テバ則チ頭眩シ、小便不利ノ者ヲ治ス』と。

此説、能く本方の効用を約言せりと謂ふべし。

應用

- (一)、頭痛、逆上し、結膜充血して耳鳴し、心下部に膨滿を覺え、尿利減少する症。
- (二)、發熱ありて脈數、頭痛、眩暈し、起坐すること能はず、尿利極度に減少し、心悸亢進を自覺する症。
- (三)、神經衰弱等にして、殊に頭痛、眩暈を發し易き症。
- (四)、神經性頭痛等。
- (五)、神經性心悸亢進。
- (六)、振顫を發する諸症。
- (七)、輕症脚氣等。
- (八)、輕症胃「アトニー」及び其類症。
- (九)、重聽等。

(十)、結膜炎には、本方に車前子を加ふ。

(十一)、雀目には、鶏肝を乾燥して粉末と爲し、之を本方に兼用す。

類聚方集覽に云く

『能ク上衝、急迫スル者ヲ療ス。病、小便ヨリ去ルナリ。』

腎氣丸(後に出づ)ハ小腹ノ水氣ヲ主ドル。此方(本方)ハ心下ニ飲有ル者ヲ主ドル』と。

此説、本方運用上の參考と爲す可し。

甘草乾薑茯苓朮湯 カンザウカンキヤウブクリヤウビヤクヂユツタウ

又苓薑朮甘湯 リヤウキヤウヂユツカンタウ (金匱要略方)

甘草 白朮各二・〇 乾薑 茯苓各四・〇

右四味を一包と爲し、水一合二勺を以て、煮て六勺を取り、一回に溫服す(通常一日三回)。

『腰中即チ溫マル。』

此方は、苓桂朮甘湯の去加方にして、即ち其原方に、桂枝を去り、乾薑を加味せるものなり。

藥能

乾薑(カンキヤウ)の性能

藥徴に云く

第一桂枝湯類

「結滯ノ水毒ヲ主治スル也。旁ラ嘔吐、咳、下利、厥冷、煩躁、腹痛、胸痛、腰痛ヲ治ス」と。
又、古方藥議に云く

「味辛溫、中ヲ溫メ、血ヲ止メ、吐瀉シ、腹臍冷エ、心下寒痞シ、腰腎中疼冷シ、夜、小便多キヲ主ドル。凡ソ病人、虛シテ冷ユルハ、宜シク之ヲ加ヘ用フベシ」と。

本方證

苓薑朮甘湯の證として、金匱要略に擧ぐる所の要を摘めば

○身體重く、腰中冷えて水中に坐するが如く、腰以下冷痛する證。(五臟風寒積聚病篇)なり。

本方の作用

此方は、甘草以下の四味より成り、而して乾薑、茯苓は其量多く、甘草、朮は少量なり。即ち此方は、以上の四味互に相協同し、以て其效用を全うするものなり。

故に方極附言に云く

「心下悸シ、小便自利シ、身體重ク、腰中冷エテ水中ニ坐スルガ如ク、若クハ形、水狀ノ如ク、腰重キコト五千錢ヲ帶ブルガ如キ者ヲ治ス」と。

此説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

應用

(一)、腰神經痛、及び其類症。

(二)、婦人の生殖器疾患等にして、常に腰痛及び下肢寒冷を覺ゆる症。

(三)、夜尿症等。

類聚方廣義に云く

「此方ニ杏仁ヲ加ヘテ腎著湯ト名ク。妊婦浮腫シ、小便自利シ、腰髀冷痛シ、喘咳スル者ヲ治ス。

老人、平日小便失禁シ、腰腿沈重、冷痛スル者ヲ治ス。又男女ノ遺尿、十四五歳ニ至ルモ猶ホ已マザル者

ハ、最モ難治ト爲ス。此方ニ反鼻ヲ加フレバ能ク效ヲ奏ス。宜シク症ニ隨ヒテ附子ヲ加フベシ」と。

此説、本方運用上の參考と爲すべし。

茯苓桂枝五味甘草湯 プクリヤウケイシゴミカンザウタウ

又苓桂五味甘草湯 リヤウケイゴミカンザウタウ (金匱要略方)

茯苓 桂枝各三・二 甘草二・四 五味子四・〇

右四味を一包と爲し、水一合六勺を以て、煮て六勺を取り、一回に溫服す(通常一日三回)。

此方は、苓桂朮甘湯の附方と見做すべきものなり。

藥能

五味子(ゴミシ)の性能

第一 桂枝湯類

藥徴に云く

『咳シテ冒スル者ヲ主治スル也』と。

又、古方藥議に云く

『味酸温、欬逆上氣ヲ主ドリ、渴ヲ止メ、煩熱ヲ除ク』と。

本方證

苓桂五味甘草湯の證として、金匱要略に擧ぐる所の要を摘めば

○多く唾し、口燥き、手足厥逆し、氣、小腹より胸咽に上衝し、手足痺し、小便難く、時に復た冒する

證。(痰飲欬嗽病篇)

なり。

本方の作用

此方は、茯苓以下の四味より成り、而して五味子は其量最も多く、茯苓、桂枝之に次ぎ、甘草は最も少量なり。

即ち此方は、以上の四味互に相協同し、以て其效用を全うするものなり。

故に方極に云く

『心下悸シ、上衝シ、咳シテ急迫スル者ヲ治ス』と。

此説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

應用

(一)、老人の慢性氣管枝炎等にして、熱性症候無き者。

(二)、輕症肺氣腫等。

苓甘五味薑辛湯 リヤウカンゴミキヤウシンタウ (金匱要略方)

茯苓二・四 甘草 乾薑 細辛各一・八 五味子三・〇

右五味を一包と爲し、水一合六勺を以て、煮て六勺を取り、一回に温服す(通常一日三回)。

此方は、苓桂五味甘草湯の去加方にして、即ち其原方に、桂枝を去り、乾薑、細辛を加味せるものなり。

藥能

細辛(サイシン)の性能

藥徴に云く

『宿飲、停水ヲ主治スル也。故ニ水氣心下ニ在リテ咳滿シ、或ハ上逆シ、或ハ脇痛スルヲ治ス』と。

又、古方藥議に云く

『味辛温、欬逆ヲ主ドリ、中ヲ温メ、氣ヲ下シ、痰ヲ破リ、水道ヲ利シ、胸中ヲ開キ、汗出デズ、血行ラ

ザルヲ治ス』と

本方證

第一 桂枝湯類

苓甘五味薑辛湯の證として、金匱要略に擧ぐる所は

○衝氣即ち低れて、反つて更に欬し、胸滿する證。(痰飲欬嗽病篇)なり。

本方の作用

此方は、茯苓以下の五味より成り、而して五味子は其量最も多く、茯苓之に次ぎ、甘草、乾薑、細辛は最も少量なり。

即ち此方は、以上の五味互に相協同し、以て其效用を全うするものなり。

故に類聚方廣義に云く

『苓桂五味甘草湯證ニシテ、上衝セズ、痰飲滿ツル者ヲ治ス』と。

此説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

應用

(一)、慢性氣管枝炎等にして、熱性症候無く、咳嗽發作時に際し、或は乾嘔し、或は痰沫を吐出する症。
(二)、肺氣腫等にして、咳嗽發作時、特に胸滿を感じる症。

桂苓味甘去桂加薑辛夏湯 ケイリヤウミカンキヨケイカキヤウシンゲタウ
又苓甘薑味辛夏湯 リヤウカンキヤウミシンゲタウ (金匱要略方)

茯苓二・四 甘草 細辛 乾薑各一・二 五味子三・〇 半夏三・六

右六味を一包と爲し、水一合六勺を以て、煮て六勺を取り、一回に溫服す(通常一日三回)。

此方は、苓桂五味甘草湯の去加方にして、即ち其原方に、桂枝を去り、甘草を減量し、細辛、乾薑、半夏を加味せるものなり。

本方證

苓甘薑味辛夏湯の證として、金匱要略に擧ぐる所の要を摘めば

○咳滿即ち止みて、衝氣復た發し、支飲ありて胃し、嘔する證。(痰飲欬嗽病篇)なり。

本方の作用

此方は、茯苓以下の六味より成り、而して半夏は其量最も多く、五味子之に次ぎ、茯苓また之に次ぎ、甘草、細辛、乾薑は最も少量なり。

即ち此方は、以上の六味互に相協同し、以て其效用を全うするものなり。

故に類聚方廣義に云く

『苓甘五味薑辛湯證ニシテ、嘔スル者ヲ治ス』と。

此説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

應用

第一 桂枝湯類

輕症慢性氣管枝炎等。

茯苓甘薑味辛夏仁湯 ブクリヤウカンキヤウミシンゲニントウ

又苓甘薑味辛夏仁湯 リヤウカンキヤウミシンゲニントウ (金匱要略方)

茯苓一・六 甘草 乾薑 細辛各一・二 五味子二・〇 半夏 杏仁各二・四

右七味を一包と爲し、水二合を以て、煮て六勺を取り、一回に温服す(通常一日三回)。

此方は、苓甘薑味辛夏湯の去加方にして、即ち其原方に、甘草、乾薑、細辛を増量し、杏仁を加味せるものなり。

本方證

苓甘薑味辛夏仁湯の證として、金匱要略に擧ぐる所の要を摘めば

〇水(胃内停水)去りて嘔止み、其人、形(外形)腫る、證。(痰飲欬嗽病篇)なり。

本方の作用

此方は、茯苓以下の七味より成り、而して半夏、杏仁は其量最も多く、五味子之に次ぎ、茯苓また之に次ぎ、甘草、乾薑、細辛は最も少量なり。

即ち此方は、以上の七味互に相協同し、以て其效用を全うするものなり。

故に類聚方廣義に云く

『苓甘薑味辛夏湯證ニシテ、微腫スル者ヲ治ス』と。

此説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

應用

(一)、慢性氣管枝炎、及び其類症。

(二)、輕症肺氣腫等。

類聚方廣義に云く

『痰飲家、平日咳嗽ニ苦シム者ハ、此方、半夏ニ代フルニ括蕒實ヲ以テシ、白蜜ニテ膏ト爲シテ用フレバ甚ダ效有リ』と。

此説、本方運用上の参考と爲すべし。

茯苓甘薑味辛夏仁黃湯 ブクカンキヤウミシンゲニンワウタウ

又苓甘薑味辛夏仁黃湯 リヤウカンキヤウミシンゲニンワウタウ (金匱要略方)

茯苓一・六 甘草 乾薑 細辛 大黃各一・二 五味子二・〇 半夏 杏仁各二・四

右八味を一包と爲し、水二合を以て、煮て六勺を取り、一回に温服す(通常一日三回)。

此方は、苓甘薑味辛夏仁湯の去加方にして、即ち其原方に、大黃を加味せるものなり。

本方證

苓甘薑味辛夏仁黃湯の證として、金匱要略に擧ぐる所の要を摘めば
○面熱して醉へるが如き證。(痰飲欬嗽病篇)
なり。

吉益東洞氏曰く

『按ズルニ、以上ノ五方ハ、當ニ驚悸、肉瞶筋惕等ノ證有ルベシ』と。

本方の作用

此方は、茯苓以下の八味より成り、而して半夏、杏仁は其量最も多く、五味子之に次ぎ、茯苓また之に次ぎ、甘草、乾薑、細辛、大黃は最も少量なり。
即ち此方は、以上の八味互に相協同し、以て其效用を全うするものなり。
故に類聚方廣義に云く

『苓甘薑味辛夏仁湯證ニシテ、大便微シク結スル者ヲ治ス』と。

此説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

應用

- (一)、慢性氣管枝炎等にして、咳嗽發作時、殊に逆上感ある症。
- (二)、肺氣腫等にして、常に便秘の傾向ある症。

(三)、腎臟炎等。

以上の五方は、其作用略ぼ相類似し、皆輕症の氣管枝疾患等に活用し得べしと雖も、其惡性症、殊に發熱等を伴へるものには、濫りに投與するを得ざるなり。故に類聚方廣義、苓桂五味甘草湯條に之を戒めて云く、『以下ノ五方(以上の五方を指す)ハ、發熱、惡風、頭痛、乾嘔等ノ外候無ク、但ダ内飲ノ咳嗽、嘔逆、鬱冒、浮腫等ヲ發スル者ヲ主治ス。若シ咳家ノ稠涎、膠痰、血絲、腐臭、蒸熱、口燥等ノ症有ル者ハ、五方ノ得テ治スル所ニ非ザル也』と。
此説、宜しく参考と爲すべし。

小青龍湯 セウセイリユウタウ (傷寒論及金匱要略方)

麻黃 芍藥 乾薑 甘草 桂枝 細辛各一・二 五味子二・〇 半夏二・四

右八味を一包と爲し、水二合を以て、煮て六勺を取り、一回に溫服す(通常一日三回)。

『加減ノ法、(下略)』

此方、金匱要略に在りては、桂枝の量稍や少なし。今、傷寒論に従ふ。

青龍は則ち四神の一にして、之を方名と爲せるは、青色の麻黃あるに因ると稱せらる。

又、小と名くるは、其大青龍湯に比して作用緩和なるを以てなり。

此方は、苓甘薑味辛夏仁湯の去加方にして、即ち其原方に、茯苓、杏仁を去り、麻黃、桂枝、芍藥を加味

せるものなり。

本方證

小青龍湯の證として、傷寒論に擧ぐる主なるもの、要を摘めば

(一)表、解せず、心下に水氣(停水)有り、乾嘔し、發熱して咳し、小便利せず、小腹滿ち、或は喘する證。(太陽病中篇)。(二)心下に水氣有り、咳して微喘し、發熱して渴せざる證。(同上)。

又、金匱要略に於けるものは

(一)欬逆倚息し、臥すことを得ざる證。(痰飲欬嗽病篇附方)。(二)婦人、涎沫を吐する證。(婦人雜病篇)等なり。

本方の作用

此方は、麻黄以下の八味より成り、而して半夏は其量最も多く、五味子之に次ぎ、麻黄、芍薬、乾薑、甘草、桂枝、細辛は最も少量なり。

即ち此方は、以上の八味互に相協同し、以て其效用を全うするものなり。

故に方極附言に云く

『咳、喘、上衝シ、頭痛、發熱、惡風シ、或ハ乾嘔スル者ヲ治ス』と。

此説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

應用

(一)、熱候あり、心下部滿ち、尿利著しく減少し、咳して嘔し、脈數なる症。

(二)、胃内に停水あり、頭重く、身體疼痛し、惡寒あり、脈浮細なる症。

(三)、喘咳し、心下滿ち、時々發熱し、其脈稍や浮なる症。

(四)、脈疾促にして頭重く、喘咳して熱し、尿不利にして下痢し、或は裏急後重する症。

(五)、咳逆し、微喘し、心下部痞滿し、尿不利にして脈數、或は乾嘔し、或は眩暈を發する症。

(六)、氣管枝炎、及び其類症。

(七)、氣管枝喘息、及び其類症。

(八)、若し咳嗽頻發し、呼吸促進し、逆上感甚だしく、脈浮大にして力ある症の如きは、此方に石膏を加ふ。

麻黄附子細辛湯 マワウブシサイシントウ (傷寒論方)

麻黄 細辛各四・八 附子二・四 (注意を要す)

右三味を一包と爲し、水二合を以て、煮て六勺を取り、一回に温服す(通常一日三回)

此方、宋板に在りては、麻黄細辛附子湯と名く。今、類聚方に従ふ。

此方は、小青龍湯の附方と見做すべきものなり。

本方證

麻黃附子細辛湯の證として、傷寒論に擧ぐる所は

○少陰病、始めて之を得、反つて發熱し、脈沈なる證。(少陰病篇)なり。

茲に所謂發熱とは、陽證の發熱に非ずして、實は陰證の初起に於ける一時的假熱なり。故に反つて發熱しと云ひ、又脈候に於ても、陽證の浮を呈せずして、陰證の沈を現はせるなり。

吉益東洞氏曰く

『按ズルニ、惡寒ノ證無ンバアル可ラズ』と。

本方の作用

此方は、麻黃以下の三味より成り、而して麻黃、細辛は其量多く、附子は少量なり。即ち此方は、以上の三味互に相協同し、以て其效用を全うするものなり。故に醫聖方格に云く

『陰病、踞臥シ、舌和シ、心下ニ停飲有リテ欬シ、或ハ浮腫スル者ハ、麻黃附子細辛湯之ヲ主ドル』と。此說、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

應用

(一)、脈弱にして數、口舌濕潤し、咳喘して煩悶し、腹皮微急し、尿利著しく減少し、或は時に虛熱を發する症。

(二)、微喘ありて身體重く、時に虛熱を發し、或は頻りに惡寒を覺え、脈細なる症。

(三)、「ロイマチス」性疾患にして、熱候無く、脈沈微なるも數を現はし、舌苔なく、身體疹重、手足に寒冷を覺ゆる等の症。

(四)、諸般の頭痛、足部冷えて、逆上し、脈沈細等の症。

(五)、老人に於ける氣管枝炎等にして、熱性症候を伴はざる症。

麻黃附子甘草湯 マワウブシカンザウタウ (傷寒論方)

麻黃 甘草各四・八 附子二・四 (注意を要す)

右三味を一包と爲し、水二合四勺を以て、煮て六勺を取り、一回に温服す(通常一日三回)。

金匱要略に出づる麻黃附子湯は、其藥味、本方と同一にして、唯だ分量に少異あり。

此方は、麻黃附子細辛湯の去加方にして、即ち其原方に、細辛を去り、甘草を加味せるものなり。

本方證

麻黃附子甘草湯の證として、傷寒論に擧ぐる所の要を摘めば

○少陰病、之を得て二三日、未だ裏證(吐痢、厥冷等の虛寒證)無き證。(少陰病篇)なり。

吉益東洞氏曰く

『按ズルニ、當ニ惡寒ノ證有ルベシ』と。

本方の作用

此方は、麻黄以下の三味より成り、而して麻黄、甘草は其量多く、附子は少量なり。即ち此方は、以上の三味互に相協同し、以て其效用を全うするものなり。

故に醫聖方格に云く

『陰病、惡寒シ、身體微冷シ、但ダ寐^{イネ}ント欲シ、脈沈細ニシテ虚腫スル者ハ、麻黄附子甘草湯之ヲ主ドル』と。

此説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

應用

(一)、脈微、呼吸促迫し、身體疼痛し、手足冷え、惡寒し、或は虚熱を發する症。

(二)、脈沈にして微、心煩し、手足寒え、身體重く、時に虚熱を發する症。

(三)、呼吸促迫し、心煩して眠るを得ず、腹痛し、時々虚熱を發し、或は惡寒し、或は身體痛み、其脈沈にして細を帶ぶる症。

(四)、少しく下痢し、腹痛し、身體痛み、心煩し、其脈沈にして濇なる症。

其他は概ね麻黄附子細辛湯に同じ。

射干麻黄湯 ヤカンマワウタウ (金匱要略方)

射干一・二 麻黄 生薑各一・六 細辛 紫菀 款冬花各一・二 五味子二・〇 大棗

〇・八 半夏二・四

右九味を一包と爲し、水二合四勺を以て、煮て六勺を取り、一回に温服す(通常一日三回)。此方は、小青龍湯の附方と見做すべきものなり。

藥能

射干(ヤカン)の性能

古方藥品考に云く

『味苦ク、辛クシテ毒有リ。故ニ能ク結氣、欬逆ヲ散ジ、喉痺、咽痛ヲ解ス』と。

又、古方藥議に云く

『味苦平、欬逆上氣、喉痺、咽痛ヲ主ドリ、胸中ノ熱氣ヲ散ジ、痰ヲ消シ、癥結ヲ破ル』と。

紫菀(シヤン)の性能

藥性提要に云く

『辛ニシテ温、肺ヲ潤ホシ、熱ヲ下シ、專ラ血痰、欬吐ヲ治ス』と。

又、古方藥品考に云く

『味微苦ニシテ性降瀉ナリ。故ニ能ク肺氣ヲ下シ、欬逆、結邪ヲ治ス』と。
款冬花（クワンドウクワ）の性能
藥性提要に云く

『辛ニシテ溫、痰ヲ消シ、熱ヲ瀉ス。嗽ヲ止ムルノ要藥ナリ』と。
又、古方藥品考に云く

『味極メテ苦ク、性順降ナリ。故ニ喘欬、逆氣ヲ鎮瀉スルノ能有リ』と。

本方證

射干麻黃湯の證として、金匱要略に擧ぐる所は

○欬して上氣し、喉中水鶏の聲（河鹿の鳴聲）ある證。（肺痿肺癰欬上氣病篇）
なり。

茲に喉中水鶏の聲とは、其喘鳴を形容して謂ふ。

本方の作用

此方は、射干以下の九味より成り、而して半夏は其量最も多く、五味子之に次ぎ、麻黃、生薑また之に次ぎ、射干、細辛、紫菀、款冬花また之に次ぎ、大棗は最も少量なり。

即ち此方は、以上の九味互に相協同し、以て其效用を全うするものなり。

故に醫聖方格に云く

『欬シテ上氣シ、涎沫ヲ吐シ、喉中水鶏ノ聲アリテ、心下ニ停飲有リ、目ノ下微腫スル者ハ、射干麻黃湯之ヲ主ドル』と。

此說、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

應用

(一)、氣管枝炎等にして、熱性症候著しからざる症。

(二)、氣管枝喘息、及び其類症。

(三)、肺氣腫等。

類聚方廣義に云く

『久咳止マズ、或ハ産後ノ喘咳、頸項ニ痰歴ヲ生ジ、累累トシテ貫珠ノ如キ者ヲ治ス。細辛、五味子ヲ去リテ射干ヲ倍シ、皂角子ヲ加フレバ效有リ。南呂丸ヲ兼用ス』と。

此說、本方運用上の參考と爲すべし。

茯苓杏仁甘草湯 ブクリヤウキヤウニンカンザウタウ (金匱要略方)

茯苓 六・〇 杏仁四・〇 甘草二・〇

右三味を一包と爲し、水一合二勺を以て、煮て六勺を取り、一回に溫服す（通常一日三回）。

『差^イエズンバ更ニ服ス。』

此方は、荅甘薑味辛夏湯の附方と見做すべきものなり。

本方證

茯苓杏仁甘草湯の證として、金匱要略に擧ぐる所の要を摘めば

○胸痺、胸中氣塞がり、短氣（呼吸短促）する證。（胸痺心痛短氣病篇）なり。

茲に胸痺とは、胸間の閉塞、疼痛感ある證を指して謂ふ。

本方の作用

此方は、茯苓以下の三味より成り、而して茯苓は其量最も多く、杏仁之に次ぎ、甘草は最も少量なり。即ち此方は、以上の三味互に相協同し、以て其效用を全うするものなり。

故に方極附言に云く

『心下悸シテ、胸中痺スル者ヲ治ス』と。

又、醫聖方格に云く

『胸中氣塞ガリ、短氣シ、喘息スルハ、茯苓杏仁甘草湯之ヲ主ドル』と。

此二説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

應用

(一)、心臟性喘息等にして、脈沈微なる症。

(二)、輕症狭心症、及び其類症。

(三)、心臟神經症等。

(四)、輕症心臟瓣膜病等。

(五)、肺氣腫、及び其類症。

類聚方廣義に云く

『嬰兒、喘咳シテ乳食ヲ吐シ、虛里（左乳下即ち心臟部）跳動シ、小便利セズ、腹ニ它異無キ者ハ、此方ニ半夏ヲ加ヘテ效有リ』と。

此説、本方運用上の参考と爲すべし。

五苓散 **ゴレイサン**（傷寒論及金匱要略方）

澤瀉三・二 猪苓 茯苓 白朮各二・四 桂枝一・六

右五味、混和、細末と爲し、白湯を以て一回二乃至四・〇を服用す。

『多ク煖水ヲ飲ミ、汗出ヅレバ愈ユ。』

或は水一合五勺を以て、煮て六勺を取り、一回に服用するも亦可なり（通常一日三回）。

苓と靈とは古字通用す。此方の五味は皆淡白にして、能く利水の效有り。是れ立方の神靈なるものなり。故に之を五苓と名くと（醫門闡觀所説）。

此方は、苓桂朮甘湯の附方と見做すべきものなり。

藥能

澤瀉(タクシヤ)の性能

藥徴に云く

『小便不利、冒眩ヲ主治スル也。旁ヲ渴ヲ治ス』と、

又、古方藥議に云く

『味甘寒、痞滿、消渴、淋瀝、頭眩ヲ除キ、膀胱ノ熱ヲ利シ、尤モ水ヲ行ラスニ長ゼリ』と。

猪苓(チヨレイ)の性能

藥徴に云く

『渴シテ小便利セザルヲ主治スル也』と。

又、古方藥議に云く

『味甘平、水道ヲ利シ、傷寒、溫疫ノ大熱ヲ解シ、腫、脹滿ヲ主ドリ、渴ヲ治シ、濕ヲ除ク』と。

本方證

五苓散の證として、傷寒論に擧ぐる主なるもの、要を摘めば

- (一)脈浮にして小便利せず、微熱、消渴(渴飲多くして、尿利減少するもの)の證。(太陽病中篇)。(二)發汗の後、脈浮數にして煩渴する證。(同上)。(三)汗出で、渴する證。(同上)。(四)表裏の證有り、水

逆(水を飲まんと欲し、水入れば則ち吐するもの)を發する證。(同上)。(五)心下の痞解せず、渴して口燥煩し、小便利せざる證。(太陽病下篇)。(六)霍亂(吐瀉病)、頭痛、發熱し、身疼痛し、熱多くして水を飲まんと欲する證。(霍亂病篇)。

又、金匱要略に於けるものは

○臍下に悸有り、涎沫を吐して癩眩し、水飲停蓄ある證。(痰飲欬嗽病篇)等なり。

本方の作用

此方は、澤瀉以下の五味より成り、而して澤瀉は其量最も多く、猪苓、茯苓、朮之に次ぎ、桂枝は最も少量なり。

即ち此方は、以上の五味互に相協同し、以て其效用を全うするものなり。

故に方極附言に云く

『消渴、小便不利、或ハ渴シテ水ヲ飲マント欲シ、水入レバ則チ吐スル者ヲ治ス』と。

此説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

腹證

腹診配劑録に云く

『心下ニ物有ルガ如クシテ、之ヲ按ズレバ力無ク、即チ散ズ。又腹中ニ悸有リ』と。

應用

- (一)、吐瀉、腹痛し、精神恍惚、四肢倦怠し、煩渴を發し、其脈數なる症。
- (二)、熱候あり、其脈浮數、大渴し、嘔吐累日にして飲食するを得ざる症。
- (三)、吐瀉の後、發熱し、尿利なく、心下部痞塞し、發汗淋漓たる症。
- (四)、發汗、吐下の後、頭痛し、逆上し、渴飲止まず、大便異常なく、尿利秘澁する症。
- (五)、頭痛發熱し、胸腹微痛し、汗出で、乾嘔し、食物入れば直ちに吐し、其脈洪數なる症。
- (六)、日射病及び熱射病等にして、發熱、尿閉、煩渴、脈浮等の諸症ある者。
- (七)、急性胃腸「カタル」等にして、發熱、尿量減少、煩渴の諸症ある者。
- (八)、腎臟炎等。
- (九)、糖尿病、及び尿崩症等。
- (十)、小兒、吐乳止まず、尿不利を發する症。
- (十一)、小兒の陰囊水腫等。

類聚方集覽に云く

「瘧疾ヲ治ス。服スルコト桂枝湯ノ如シ。然レドモ彼ハ粥ヲ啜リ、此ハ煖水ヲ飲ム。是ヲ異レリト爲ス耳」と。
又、類聚方廣義に云く

「霍亂、吐下ノ後、厥冷、煩躁シ、渴飲止マズシテ水、藥共ニ吐スル者有リ。嚴ニ湯水、菓物ヲ禁ジ、水ヲ

欲スル毎ニ五苓散ヲ與フ。但ダ一貼ヲ二三回ニ服スルヲ佳ト爲ス。三貼ニ過ギズシテ嘔吐、煩渴必ズ止ム。吐渴共ニ止メバ、則チ必ズ厥復シテ熱發シ、身體情痛ス。仍ホ五苓散ヲ用フルトキハ、則チ漿漿トシテ汗出デ、諸症脫然トシテ愈エン。是レ五苓散、小半夏湯ノ別也。

此方ノ眼患ヲ治スルコト、苓桂朮甘湯ト略ボ似タリ。而シテ彼ハ心下ノ悸、心下逆滿、胸脇支滿、上衝等ノ症ヲ以テ目的ト爲シ、此ハ發熱、消渴、目ニ涙多ク、小便不利ヲ以テ目的ト爲ス、二方俱ニ小便ヲ利スルヲ以テ其效ト爲ス也。應鐘、紫圓(共ニ方名)等ヲ兼用ス。

小兒、陰頭水腫、及ビ陰囊赤腫シテ小便短澀ナル者ヲ治ス、奇效有リ」と。

此等の諸説、本方運用上の参考と爲すべし。

茵陳五苓散 インチンゴレイサン (金匱要略方)

茵陳蒿末四・〇 五苓散(細末)二・〇

右二物、能く混和し、白湯を以て一回二乃至四・〇を服用す(通常一日三回)。

此方は、五苓散の去加方にして、即ち其原方に、茵陳蒿を加味せるものなり。

藥能

茵陳蒿(インチンカウ)の性能

藥徵に云く

第一桂枝湯類

『發黃ヲ主治スル也』と。

又、古方藥議に云く

『味苦平、熱結、黃疸、小便不利ヲ主ドリ、伏瘕ヲ去ル』と。

本方證

茵陳五苓散の證として、金匱要略に擧ぐる所は

○黃疸の證。(黃疸病篇)

なり。

吉益東洞氏曰く

『按ズルニ、當ニ小便不利、或ハ渴スルノ證有ルベシ』と。

本方の作用

此方は、茵陳蒿及び五苓散より成り、而して茵陳蒿は其量多く、五苓散は少量なり。

即ち此方は、恰も茵陳蒿に加ふるに、更に五苓散を以てせるもの、如し。

故に方極附言に云く

『發黃(黃疸)ニシテ、五苓散證有ル者ヲ治ス』と。

又、醫聖方格に云く

『黃疸病、發熱シ汗出デ、渴シテ水ヲ飲マント欲シ、小便難クシテ腹虛ナル者ハ、茵陳五苓散之ヲ主ド

ル』と。

此二説、能く本方の效用を約言せりと謂ふ可し。

應用

(一)、黃疸様諸症にして、熱性症候甚しからず、腹部軟弱、尿量減少等ある症。

(二)、初生兒の黃疸等。

猪苓湯 チヨレイタウ (傷寒論及金匱要略方)

猪苓 茯苓 阿膠 滑石 澤瀉各二・四

右五味、水一合二勺を以て、先づ四味を煮て六勺を取り、後、阿膠を入れ、溶解せしめて、一回に服用す

(通常一日三回)。

此方は、五苓散の附方と見做すべきものなり。

藥能

阿膠(アケウ)の性能

藥徵續篇に云く

『諸血證ヲ主治ス。故ニ兼テ心煩シテ眠ルヲ得ザル者ヲ治ス』と。

又、古方藥議に云く

「味甘平、内崩、下血、腰腹痛、四肢ノ酸疼、虚勞羸瘦、咳嗽ヲ主ドリ、血ヲ和シ、陰ヲ滋ナヒ、風ヲ除キ、燥ヲ潤ホシ、痰ヲ化シ、小便ヲ利シ、大腸ヲ調フ」と。
滑石（クワツセキ）の性能
藥徴に云く

「小便不利ヲ主治スル也、旁ラ渴ヲ治ス」と。
又、古方藥議に云く

「味甘寒、小便ヲ利シ、渴ヲ止メ、煩熱、心躁ヲ除キ、腸胃中ノ積聚、寒熱ヲ蕩カシ、能ク五淋ヲ療ス」と。

本方證

猪苓湯の證として、傷寒論に擧ぐる主なるもの、要を摘めば

(一)脈浮、發熱し、渴して水を飲まんと欲し、小便利せざる證。(陽明病篇)。(二)下利すること六七日、咳、嘔、渴あり、心煩して眠ることを得ざる證。(少陰病篇)。

又、金匱要略に於けるものは

○脈浮、發熱し、渴して水を飲まんと欲し、小便利せざる證。(消渴小便利淋病篇。此證傷寒論に同じ)等なり。

吉益東洞氏曰く

「按ズルニ、當ニ膿血ヲ便スルノ證有ルベシ」と。

本方の作用

此方は、猪苓以下の五味より成り、而して其分量は皆同一なり。

即ち此方は、以上の五味互に相協同し、以て其效用を全うするものなり。

故に方極附言に云く

『小便利セズ、及ビ淋瀝シ、或ハ渴シテ水ヲ飲マント欲スル者ヲ治ス』と。

此説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

應用

(一)、脈浮、汗出で、胸部に鬱塞の感あり、精神恍惚として眠らず、尙ほ食慾に著變なき症。

(二)、心煩あり、尿利減少し、腰脚部重く、下痢數行にして渴する症。

(三)、舌苔白くして滑、下利頻發し、尿利減少し、或は濃厚にして脂肪の如く、其脈浮にして力ある症。

(四)、下痢累日、下肢に水腫を發し、尿利澁滯し、心中懊懣して眠るを得ざる症。

(五)、腸「カタル」等にて水瀉し、渴及び心煩等甚しき症。

(六)、膀胱炎、及び膀胱結石、並に其類症。

(七)、急性及び慢性淋疾等。

(八)、血尿には、證に由り木通及び車前子を加ふ。

(九)、尿閉には、證に由り大黃を加ふ。

類聚方廣義に云く

『淋疾、点滴シテ通ゼズ、陰頭腫痛シ、少腹膨脹シテ痛ヲ爲ス者ヲ治ス。若シ莖中痛ミ、膿血出ヅル者ハ、滑石礬甘散（方名）ヲ兼用ス。

妊婦、七八月已後、牝戸（陰門の別稱）焮熱、腫痛シ、臥起スルコト能ハズ、小便淋瀝スル者有リ。三稜針ヲ以テ輕輕ニ腫處ヲ刺シ、淤水ヲ放出シ、而ル後ニ此方ヲ用フレバ、腫痛立ドコロニ消シ、小便快利ス。若シ一身悉ク腫レ、前症ヲ發スル者ハ、越婢加朮湯ニ宜シ』と。

此説、本方運用上の参考と爲すべし。

茯苓澤瀉湯 ブクリヤウタクシヤタウ（金匱要略方）

茯苓四・八 澤瀉二・四 甘草一・二 桂枝一・二 白朮一・八 生薑二・四

右六味を一包と爲し、水一合四勺を以て、煮て六勺を取り、一回に温服す（通常一日三回）。

此方は、苓桂朮甘湯の附方と見做すべきものなり。

本方證

茯苓澤瀉湯の證として、金匱要略に擧ぐる所は

○胃反（食入りて復た吐出する證）、吐して渴し、水を飲まんと欲する證。（嘔吐臑下利病篇）なり。

本方の作用

此方は、茯苓以下の六味より成り、而して茯苓は其量最も多く、澤瀉、生薑之に次ぎ、朮また之に次ぎ、甘草、桂枝は最も少量なり。

即ち此方は、以上の六味互に相協同し、以て其效用を全うするものなり。

故に方極附言に云く

『心下悸シ、小便利セズ、上衝、嘔吐シ、渴シテ水ヲ飲マント欲スル者ヲ治ス』と。

又、醫聖方格に云く

『嘔吐止マズ、復タ吐シテ渴シ、水ヲ飲マント欲シ、其人發熱シ、頭汗出デ、眩悸シ、小便疎通（尿通稀疎）ノ者ハ、茯苓澤瀉湯之ヲ主ドル』と。

此二説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

應用

- (一)、胃擴張等にして、殊に渴を覺え、尿量極度に減少する症。
 - (二)、胃弛緩症、及び其類症。
 - (三)、胃下垂症等にして、殊に噯氣、胃部壓迫感、嘔吐、頭痛等の諸症候著しき症。
 - (四)、小兒、吐乳止まず、尿利なき症等。
- 類聚方廣義に云く

「胃反ハ固ヨリ難治ノ症ニシテ、此方ノ能ク治スル所ニ非ザル也。斯ノ方ハ、特ニ其吐後渴シテ水ヲ飲マント欲シ、心下悸シ、小便不利ノ者ヲ治スル耳。大抵胃反ヲ患フル者ハ、其人心下或は臍上ニ癥結（塊）有リテ胃府ヲ壓迫シ、或ハ大筋ヲ挾ミテ上下ニ亘リ、胃府消化ノ機ヲ妨礙スルヲ以テ也。故ニ癥結ヲ削平スルニ非ズンバ、決シテ全治スルヲ得ザル也（下略）」と。
是れ恐くは、高度に進行せる胃痛の治に就きて云へるものならんも、また以て本方運用上の参考と爲すに足らん。

桂枝人參湯 ケイシニンジンタウ (傷寒論方)

桂枝 甘草各三・二 白朮 人參 乾薑各二・四

右五味を一包と爲し、水一合八勺を以て、煮て六勺を取り、一回に服用す（通常一日三回）。

此方は、桂枝去芍藥湯の附方と見做すべきものなり。

本方證

桂枝人參湯の證として、傷寒論に擧ぐる所の要を摘めば

○協熱して利し、利下止まず、心下痞鞭し、表裏解せざる證。（太陽病下篇）
なり。

本方の作用

此方は、桂枝以下の五味より成り、而して桂枝、甘草は其量多く、朮、人參、乾薑は少量なり。

即ち此方は、以上の五味互に相協同し、以て其效用を全うするものなり。

故に醫聖方格に云く

「病人、利下止マズ、心下痞鞭し、心腹、時ニ痛ミ、頭ニ汗出デ、心下悸シ、平臥スルコト能ハズ、小便少ナク、或ハ手足冷ユル者ハ、桂枝人參湯之ヲ主ドル」と。

此説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

應用

- (一)、發汗し、或は下し、頭痛、發熱し、心下痞鞭して痛み、下痢頻々、腹中雷鳴し、其脈浮にして弱なる症。
- (二)、發汗の後、脱汗止まず、少しく惡寒し、下痢頻々、或は嘔吐を發して胸滿を覺え、其脈數なる症。
- (三)、少しく熱候有りて、下痢頻發し、心下鞭くして痛み、或は嘔氣ありて食を欲せず、其脈數にして弱なる症。

(四)、腸胃「カタル」等にして、或は吐し、或は下し、或は腹痛し、惡寒なくして脈數弱なる症。

類聚方廣義に云く

「頭痛、發熱シ、汗出デ、惡風シ、支體倦怠シ、心下支撐シ、水瀉傾クルガ如キ者ハ、夏秋ノ間ニ多ク之レ有リ。此方ニ宜シ」と。

此説、本方運用上の参考と爲すべし。

人參湯 ニンジンタウ 又理中丸 リチユウグワン (傷寒論及金匱要略方)

人參 甘草 白朮 乾薑各三・〇

右四味を一包と爲し、水一合六勺を以て、煮て六勺を取り、一回に溫腹す(通常一日三回)。或は丸劑と爲して服用するも、亦可なり。

『加減ノ法。(下略)』

此方は、桂枝人參湯の去加法にして、即ち其原方中、甘草を減量し、桂枝を去れるものなり。

本方證

理中丸の證として、傷寒論に擧ぐる主なるもの、要を摘めば

(一) 霍亂(吐瀉病)、頭痛、發熱、身疼痛し、寒多くして水を飲まんと欲せざる證。(霍亂病篇)。(二) 大病差えて後、喜ば睡し、久しく了了たらざる證。(陰陽易差後勞復病篇)。

又、人參湯の證として、金匱要略に擧ぐる所は

○胸痺、心中痞し、留氣結ばれて胸に在り、胸滿し、脇下より心に逆搶する證。(胸痺心痛短氣病篇)なり。

本方の作用

此方は、人參以下の四味より成り、而して其分量は皆同一なり。

即ち此方は、以上の四味互に相協同し、以て其效用を全うするものなり。

故に類聚方廣義に云く

『心下痞鞭シ、小便利セズ、或ハ急痛シ、或ハ胸中痺スル者ヲ治ス』と。

此說、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

應用

- (一)、發汗の後、脈尙ほ少しく浮にして、下痢、腹痛し、堪へ難き症。
- (二)、腹痛、下痢し、或は上衝、吐逆し、或は身體に微痛等を覺ゆる症。
- (三)、食物停滯の感ありて胃部虛滿し、熱候なくして時々粘液を吐出する症。
- (四)、頭痛して微熱あり、汗出で、身體倦怠を覺え、尿利少なくて下痢し易き症。
- (五)、吐瀉、腹痛し、微熱ありて身體疲倦し、口乾燥するも水飲を欲せず、脈數にして濇なる症。
- (六)、小兒の吐乳症等。

類聚方廣義に云く

『産後續イテ下利ヲ得、乾嘔シテ食セズ、心下痞鞭シ、腹痛シ、小便利ノ者、諸病久シク愈エズ、心下痞鞭シ、乾嘔シテ食セズ、時時腹痛シ、大便濡瀉シ、微腫等ノ症ヲ見ハス者、老人寒暑ノ候毎ニ下利シ、腹中冷痛シ、瀝瀝トシテ聲有リ、小便不禁ニシテ、心下痞鞭シ、乾嘔スル者ハ、俱ニ難治ト爲ス。此方ニ宜シ。若シ惡寒シ、或ハ四肢冷ユル者ハ、附子ヲ加フ』と。

此説、本方運用上の参考と爲すべし。

桂枝去桂加茯苓白朮湯 ケイシキヨケイカブクリヤウビヤクチユツタウ (傷寒論)

方)

芍藥 大棗 生薑 茯苓 白朮各二・四 甘草一・六

右六味を一包と爲し、水一合四勺を以て、煮て六勺を取り、一回に温服す(通常一日三回)。

此方は、桂枝湯の去加方にして、即ち其原方に、桂枝を去り、茯苓、朮を加味せるものなり。

本方證

桂枝去桂加茯苓白朮湯の證として、傷寒論に擧ぐる所の要を摘めば

○頭項強痛し、翁々として發熱し、汗無く、心下滿ちて微痛し、小便利せざる證。(太陽病上篇)なり。

本方の作用

此方は、芍藥以下の六味より成り、而して芍藥、大棗、生薑、茯苓、朮は其量多く、甘草は少量なり。

即ち此方は、恰も桂枝湯中の桂枝を去り、更に之に加ふるに、茯苓、朮を以てせるものゝ如し。

故に方極附言に云く

『桂枝湯證ニシテ、心下悸シ、小便利セズ、上衝セザル者ヲ治ス』と。

又、醫聖方格に云く

『病人、腰脚冷痛シ、時ニ攣急シ、小便少ナク、或ハ肉脛筋惕スル者ハ、桂枝去桂加茯苓朮湯(本方を略稱す)之ヲ主ドル』と。

此二説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

應用

(一)、汗下の後、表熱尙ほ未だ全く去らず、胸部煩滿を覺え、尿不利、腹部時々微痛する症。

(二)、下痢の後、日を経て尙ほ微熱あり、腹部に膨滿を覺え、尿利澁滯し、脈微、沈にして數なる症。

(三)、「ヒステリー」等にして、時々痙攣を發し、或は腰痛堪へ難く、胸滿感あるも心下を按ずるに軟、尿利甚しく澁滯する症。

眞武湯 シンブタウ (傷寒論方)

茯苓 芍藥 生薑各三・六 白朮二・四 附子一・二 (注意)

右五味を一包と爲し、水一合六勺を以て、煮て六勺を取り、一回に温服す(通常一日三回)。

『後加減ノ法。(下略)。』

眞武は北方陰精の宿、職専ら水を司どるの神なり。之を以て湯に名くるは、義を主水に取ると。

又一説に曰く、此方本と玄武湯と名く。蓋し方中の附子は、其色黒きを以て、之を四神中の玄武に擬する

なりと。

此方は、桂枝去桂加茯苓白朮湯の去加方にして、即ち其原方に、朮を減量し、甘草、大棗を去り、附子を加味せるものなり。

本方證

眞武湯の證として、傷寒論に擧ぐる所の要を摘めば

(一)太陽病、發汗し、汗出で、解せず、仍ほ發熱(虛熱)し、心下悸し、頭眩し、身瞤動し、振振として地に倒れんと欲する證。(太陽病中篇)。(二)少陰病、腹痛し、小便利せず、四肢沈重、疼痛し、自下利し、或は欬し、或は嘔する證。(少陰病篇)なり。

本方の作用

此方は、茯苓以下の五味より成り、而して茯苓、芍藥、生薑は其量最も多く、朮之に次ぎ、附子は最も少量なり。

即ち此方は、恰も桂枝去桂加茯苓白朮湯中の朮を減量し、甘草、大棗を去り、更に之に加ふるに、附子を以てせるものゝ如し。

故に方極附言に云く

『心下悸シ、身瞤動シ、振振トシテ地ニ擗^ヅレント欲シ、小便利セズ、或ハ嘔シ、若クハ下利シ、若クハ腹

痛スル者ヲ治ス』と。

又、醫聖方格に云く

『陰病、腹痛シ、小便清少ニシテ、四肢沈重疼痛シ、自下利シ、其人或ハ欬シ、或ハ嘔スル者ハ、眞武湯之ヲ主ドル』と。

此二説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

腹證

腹診配劑錄に云く

『此レ亦腹ニ力無ク、心下悸シテ身瞤動ス』と。

應用

- (一)、眩暈症、發熱なくして惡寒を覺え、腹部微滿し、神思鬱塞して食慾なく、身體疼痛を感ずる等の者。
- (二)、下痢性疾患にして、或は喘し、或は乾嘔し、腹部及び腰部痛み、身體倦怠する症。
- (三)、慢性胃腸「カタル」等にして、常に手足に寒冷を覺ゆる症。
- (四)、下痢日に數行、身體疼痛を覺え、尿利澁滯し、脈沈微の症。
- (五)、下痢久しく癒えず、或は身體に微腫あり、常に寒冷を覺ゆる症。
- (六)、諸般の水腫にして、身體衰憊し、手足に著しく寒冷を覺え、脈微弱なる症。
- (七)、種々の麻痺性疾患にして、手足時々振顫し、脈沈なる症。

傷寒緒論に云く

『眠ルコトヲ得ザルハ、皆陽盛ンナリト爲ス。切ニ溫劑ヲ禁ズ。惟ダ汗吐下ノ後、虛煩シ、脈浮弱ナル者ハ、津液内ニ竭クルニ因ル。則チ當ニ權ニ從ヒ、眞武湯ヲ用ヒテ之ヲ溫ムベシ』と。
又、類聚方廣義に云く

『痿痺病、腹拘攣シ、脚冷エテ不仁、小便利セズ、或ハ不禁ノ者ヲ治ス。
腰疼、腹痛、惡寒シテ、下利日ニ數行、夜間最モ甚シキ者ハ、之ヲ痲痺ト稱ス。此方ニ宜シ。又久痢、浮腫ヲ見ハシ、或ハ咳シ、或ハ嘔スル者モ、亦良シ。
産後ノ下利、腸鳴リ、腹痛シ、小便利セズ、支體酸軟、或ハ麻痺シ、水氣有リテ惡寒、發熱（虛熱）シ、咳嗽止マズ、漸ヤク勞狀ト成ル者ハ、尤モ難治ト爲ス。此方ニ宜シ』と。
此等の諸説、宜しく本方運用上の参考と爲すべし。

附子湯 プシタウ (傷寒論及金匱要略方)

附子一・六(注意) 茯苓 芍藥各二・四 人參一・六 白朮三・二

右五味を一包と爲し、水一合六勺を以て、煮て六勺を取り、一回に温服す(通常一日三回)。

此方は、眞武湯の去加方にして、即ち其原方に、附子、朮を増量し、生薑を去り、人參を加味せるものなり。

本方證

附子湯の證として、傷寒論に擧ぐる所の要を摘めば

(一)少陰病、口中和し、其背惡寒する證。(少陰病篇)。(二)少陰病、身體痛み、手足寒え、骨節痛み、脈沈なる證。(同上)。

又、金匱要略に於けるものは

○懷妊六七月、腹痛、惡寒し、小腹扇の如き證。(婦人妊娠病篇)なり。

吉益東洞氏云く

『按ズルニ、當ニ小便利、心下ノ悸、或は痞鞭ノ證有ルベシ』と。

本方の作用

此方は、附子以下の五味より成り、而して朮は其量最も多く、茯苓、芍藥之に次ぎ、附子、人參は最も少量なり。

即ち此方は、恰も眞武湯中の生薑を去り、附子、朮を増量し、更に之を加ふるに、人參を以てせるもの、如し。

故に方極に云く

『身體攣痛シ、小便利セズ、心下痞鞭シ、若クハ腹痛スル者ヲ治ス』と。

此説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

應用

- (一)、肩背痛み、臍傍攣急し、尿利澁滯し、脈沈緊なる症。
 - (二)、身體勞倦し、胸腹部拘急し、發汗の傾向ありて煩し、尿澁滯、脈緊數の症。
 - (三)、下痢性疾患にして、身體疼痛し、自汗ありて微惡寒し、脈微弱なる症。
 - (四)、腹痛、下痢止まず、身體痛み、微惡寒し、脈沈なる症。
 - (五)、諸種の神經痛、及び「ロイマチス」性疾患等にして、熱性症候なき症。
- 類聚方廣義に云く
- 「水病、遍身腫滿シ、小便利セズ、心下痞硬シ、下利、腹痛シ、身體痛ミ、或ハ麻痺シ、或ハ惡風寒スル者ハ此方ニ宜シ」と。
- 此説、本方運用上の参考と爲す可し。

當歸四逆湯 タウキシギヤクタウ (傷寒論方)

當歸 桂枝 芍藥 細辛 大棗各一・八 甘草 通草各一・二
 右七味を一包と爲し、水一合六勺を以て、煮て六勺を取り、一回に溫服す(通常一日三回)。
 此方、成本に在りては、細辛の量稍や少なし。今、宋板に従ふ。

此方は、桂枝湯の去加方して、即ち其原方に、生薑を去り、細辛、通草、當歸を加味せるものなり。

藥能

- 當歸(タウキ)の性能
- 古方藥品考に云く
- 「味甘、辛、氣大溫ニシテ芳發ナリ。故ニ經脈ヲ溫達シ、氣血ヲ調和スルノ能有リ」と。
- 又、古方藥議に云く
- 「味甘溫、欬逆上氣、婦人ノ漏下、心腹ノ諸痛ヲ主ドリ、腸胃、筋骨、皮膚ヲ潤ホシ、中ヲ溫メ、痛ヲ止ム」と。
- 通草(ツウサウ)の性能
- 古方藥品考に云く
- 「味苦クシテ降、故ニ能ク九竅ヲ開キ、尿道ヲ通利シ、以テ淋瀝、小便不利等ヲ治ス」と。
- 又、古方藥議に云く
- 「味辛平、九竅、血脈、關節ヲ通利シ、小便ヲ利シ、水腫浮大ヲ主ドリ、煩熱ヲ除ク」と。

本方證

當歸四逆湯の證として、傷寒論に擧ぐる所の要を摘めば

(一)、手足厥寒、脈細にして絶せんと欲する證。(厥陰病篇)。(二)、脈浮革にして、腸鳴る證。(辨不

可下病篇)
なり。

本方の作用

此方は、當歸以下の七味より成り、而して當歸、桂枝、芍薬、細辛、大棗は其量多く、甘草、通草は少量なり。

即ち此方は、恰も桂枝湯中の生薑を去り、更に之に加ふるに、細辛、通草、當歸を以てせるものゝ如し。故に醫聖方格に云く

『脱血家（脈分脱失者を汎稱す）、心下ニ停飲有リテ頭痛シ、或ハ身痛ム者ハ、當歸四逆湯之ヲ主ドル』と。

此説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

應用

(一)、四肢疼重にして、言語、動作懶惰なるも、食慾、二便には尙ほ著しき變常なく、脈數にして弱なる症。

(二)、尿利澁滯し、時に微熱を發するも、手足に寒冷を覺え、食慾に著變なき症。

(三)、胃部少しく膨滿を感じ、尿利澁滯し、氣鬱して、脈稍や數なる症。

(四)、氣鬱、心煩し、或は腹痛し、尿利頻數にして四肢に麻痺感あり、脈沈細なる症。

(五)、遺精の傾向ある症。

(六)、下血には、症に由り人參を加ふ。

類聚方廣義に云く

『疝家、發熱、惡寒シ、脇腹攣痛シ、腰脚拘急シ、手足寒エ、小便不利ノ者ヲ治ス。消塊丸ヲ兼用ス。

婦人ノ血氣痛ニシテ、腰腹拘攣スル者ヲ治ス。

經水不調、腹中攣急シ、四肢酸痛シ、或ハ一身習習トシテ蟲ノ行クガ如ク、日ニ頭痛スル者ヲ治ス』と。

此説、本方運用上の参考と爲すべし。

當歸四逆加吳茱萸生薑湯 タウキシギヤクカゴシユユシヤウキヤウタウ (傷寒論方)

當歸 桂枝 芍薬 細辛 大棗各一・二 甘草 通草各〇・八 吳茱萸四・〇 生薑

三・二

右九味を一包と爲し、水七勺、清酒七勺を以て、煮て六勺を取り、一回に温服す(通常一日三回)。

或は酒氣を厭ふ者は、當歸四逆湯に倣ひて、水煮温服するも亦可なり。

此方は、當歸四逆湯の去加方にして、即ち其原方に、吳茱萸、生薑、清酒を加味せるものなり。

藥能

吳茱萸(ゴシユユ)の性能

第一 桂枝湯類

藥徵に云く

『嘔シテ胸滿スルヲ主治スル也』と。

又、古方藥議に云く

『味辛溫、中ヲ溫ムルヲ主ドリ、氣ヲ下シ、痛ヲ止メ、鬱ヲ開キ、滯ヲ化シ、嘔逆、藏冷ヲ除キ、吞酸、痰涎、頭痛ヲ治ス』と。

清酒（セイシユ）の性能

古方藥品考に云く

『其味甘ク、辛ク、性大熱、寒ニ値テ獨リ氷ラズ。故ニ陽氣ヲ助ケ、血脈ヲ通ジ、百藥ヲ行ラスノ能有リ』と。

又、古方藥議に云く

『味甘辛、血脈ヲ通ジ、腸胃ヲ厚フシ、皮膚ヲ潤ホシ、濕氣ヲ散ジ、風ヲ除キ、氣ヲ下シ、藥勢ヲ行ラシ、百邪、惡毒ノ氣ヲ殺ス』と。

本方證

當歸四逆加吳茱萸生薑湯の證として、傷寒論に擧ぐる所は

○手足厥寒、脈細にして絶せんと欲し、内に久寒有る證。（厥陰病篇）なり。

本方の作用

此方は、當歸以下の九味より成り、而して吳茱萸は其量最も多く、生薑之に次ぎ、當歸、桂枝、芍藥、細辛、大棗また之に次ぎ、甘草、通草は最も少量にして、更に之に加ふるに、清酒の若干量を以てす。

即ち此方は、恰も當歸四逆湯に加ふるに、更に吳茱萸、生薑、清酒を以てせるもの、如し。

故に尾臺榕堂氏云く

『當歸四逆湯症ニシテ、胸滿、嘔吐シ、腹痛劇シキ者ヲ治ス』と。

此説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

應用

(一)、身體怠惰にして、精神鬱塞し、脈小にして、尿不利、胸滿、動悸等を感じる症。

(二)、手足寒冷にして、腹筋拘急し、尿不利、脈細にして嘔せんと欲する症。

(三)、手足寒冷、言語に懶く、腹部拘痛し、尿利頻數にして、脈細沈なる症。

(四)、婦人、臍腹部冷痛し、脈沈細なる症。

(五)、慢性下痢等にして、脈沈細の症。

(六)、婦人の經閉等にして、身體倦怠、四肢厥冷し、脈微弱なる症。

(七)、凍傷には、證により附子を加ふ。

類聚方廣義に云く

『産婦、惡露綿延トシテ止マズ、身熱、頭痛シ、腹中冷痛シ、嘔シテ微利シ、腰部酸麻シ、或ハ微腫スル者ヲ治ス』と。

此説、本方運用上の参考と爲すべし。

茯苓桂枝甘草大棗湯 ブクリヤウケイシカンザウタイサウタウ (傷寒論及金匱要略方)

茯苓四・八 甘草一・八 大棗二・二 桂枝二・四

右四味を一包と爲し、水二合を以て、煮て六勺を取り、一回に温服す(通常一日三回)。

『甘爛水ヲ作ルノ法。(下略)』

此方、金匱要略に在りては、甘草の分量稍や少なし。今、傷寒論に従ふ。

又、原方は、薬味を煮るに甘爛水を用ふ。

今、類聚方の改むる所に従ふ。

此方、類聚方に在りては、苓桂甘棗湯と名く。

此方は、桂枝湯の變方と見做すべきものなり。

本方證

茯苓桂枝甘草大棗湯の證として、傷寒論に擧ぐる所の要を摘めば

○發汗の後、臍下悸する證。(太陽病中篇)。

金匱要略に於けるものも、亦之に同じ。(奔豚氣病篇)。

吉益東洞氏曰く

『按ズルニ、當ニ腹拘急ノ證有ルベシ』と。

本方の作用

此方は、茯苓以下の四味より成り、而して茯苓は其量最も多く、桂枝之に次ぎ、大棗また之に次ぎ、甘草は最も少量なり。

即ち此方は、以上の四味互に相協同し、以て其效用を全うするものなり。

故に方極に云く

『臍下悸シテ、撃急シ、上衝スル者ヲ治ス』と。

又、醫聖方格に云く

『病人、臍下悸シ、奔豚ト作ラント欲スル者ハ、若シ發スレバ則チ平臥シ難ク、頭に汗出デ、小便難クシテ或ハ頭眩ス。茯苓桂枝甘草大棗湯之ヲ主ドル』と。

此二説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

應用

(一)、神經性心悸亢進等にして、時々眩暈し、下腹部拘急し、尿不利、脈浮數なる症。

(二)、心悸亢進あり、腹滿を感じ、尿利澁滯し、脈沈にして數なる症。

(三)、「ヒステリー」性痙攣發作等。

(四)、假性癲癇様症候發作。

(五)、神經衰弱に因る不眠症等。

類聚方集覽に云く

『積聚、久久トシテ愈エズ、顔色蒼然、種々苦惱シ、或ハ勞瘵ニ似タル者ハ、味噌ヲ加ヘテ煎服ス。人家常用ノ味噌也』と。

此説、本方運用上の參考と爲すべし。

茯苓甘草湯 ブクリヤウカンザウタウ (傷寒論方)

茯苓 桂枝各三・二 生薑四・八 甘草一・六

右四味を一包と爲し、水一合二勺を以て、煮て六勺を取り、一回に溫服す(通常一日三回)。

此方は、桂枝湯の變方と見做すべきものなり。

本方證

茯苓甘草湯の證として、傷寒論に擧ぐる所の要を摘めば

(一)傷寒、汗出で、渴せざる證。(太陽病中篇)。(二)傷寒、厥して心下悸する證。(厥陰病篇)なり。

吉益東洞氏曰く

『按ズルニ、當ニ衝逆、嘔吐ノ證有ルベシ』と。

本方の作用

此方は、茯苓以下の四味より成り、而して生薑は其量最も多く、茯苓、桂枝之に次ぎ、甘草は最も少量なり。

即ち此方は、以上の四味互に相協同し、以て其效用を全うするものなり。

故に方極附言に云く

『心下悸シ、上衝シテ嘔スル者ヲ治ス』と。

此説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

應用

(一)、發汗の後、熱候尙ほ去らず、自汗出で、止まず、利尿減少し、心悸亢進し、四肢微厥し、其脈瀚なる症。

(二)、發汗の後、脱汗止まず、顔面赤色にして醉狀の如く、心下部膨滿し、指頭冷え、身體重く、利尿無く、其脈浮にして瀚を帶ぶる症。

(三)、熱性病、汗出で、利尿減少し、胸滿感ありて逆上し、脈浮虚にして數なる症。

(四)、脈浮なるも熱性症候著しからず、動悸ありて身體懶く、自汗出で、鬱々として煩悶する症。

(五)、不眠症等にして、時々神経性心悸亢進を發する症。
 (六)、神経性心悸亢進には、證に由り龍骨、牡蠣を加ふ。
 類聚方集覽に云く

『按ズルニ、厥トハ逆也。衝逆スル者ハ必ズ頭ニ汗出ヅ。若シ頭ニ汗出ヅルコト多ク、嘔、悸ヲ兼ヌル者ハ、此方之ヲ主ドル』と。

此説、本方運用上の参考と爲すべし。

芍藥甘草湯 シヤクヤクカンザウタウ (傷寒論方)

芍藥 甘草各四・八

右二味を一包と爲し、水一合二勺を以て、煮て六勺を取り、一回に温服す(通常一日二回)。

此方、原本に在りては、白芍藥に作る。今、類聚方の改むる所に従ふ。

此方は、桂枝湯の變方と見做すべきものなり。

本方證

芍藥甘草湯の證として、傷寒論に擧ぐる所の要を摘めば

○脚攣急の證。(太陽病上篇)

なり。

本方の作用

此方は、芍藥、甘草の二味より成り、而して其分量は同一なり。

即ち此方は、以上の二味互に相協同し、以て其效用を全うするものなり。

故に方極に云く

『拘攣シ、急迫スル者ヲ治ス』と。

此説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

應用

- (一)、小兒の腹痛諸症。
 - (二)、腰背膝脚拘急し、或は微痛し、或は歩行し難き等の症。
 - (三)、子宮内膜炎性腹痛等には、證に因り膠飴を加味す(家方)。
- 醫學心悟に云く

『芍藥甘草湯ハ、腹痛ヲ止ムルコト神ノ如シ。脈遅ナルハ寒ト爲ス、乾薑ヲ加フ。脈洪ナルハ熱ト爲ス、黄連ヲ加フ』と。

又、類聚方廣義に云く

『腹中攣急シテ痛ム者ヲ治ス。小兒、夜啼止マズ、腹中攣急甚シキ者モ、亦奇效有リ』と。

此二説、本方運用上の参考と爲すべし。

芍藥甘草附子湯 シャクヤクカンザウブシタウ (傷寒論方)

芍藥 甘草各四・八 附子一・六 (注意)

右三味を一包と爲し、水二合を以て、煮て六勺を取り、一回に温服す (通常一日二、三回)。

此方は、芍藥甘草湯の去加方にして、即ち其原方に、附子を加味せるものなり。

本方證

芍藥甘草附子湯の證として、傷寒論に擧ぐる所の要を摘めば

○發汗して、病解せず、反つて惡寒 (陽虛) する證。(太陽病中篇) なり。

本方の作用

此方は、芍藥以下の三味より成り、而して芍藥、甘草は其量多く、附子は少量なり。

即ち此方は、恰も芍藥甘草湯に加ふるに、更に附子を以てせるものゝ如し。

故に方極に云く

『芍藥甘草湯證ニシテ、惡寒スル者ヲ治ス』と。

又、醫聖方格に云く

『陰病、惡寒シテ攣急スル者ハ、芍藥甘草附子湯之ヲ主ドル』と。

此二説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

應用

(一)、發汗の後、身體倦怠し、手足に寒冷を覺え、脈微弱なる症。

(二)、發熱なく、但だ惡寒を覺え、腹痛し、汗出で、心煩する症。

(三)、汗出で、疲勞し、腹筋攣急し、或は痛み、脈微にして沈なる症。

(四)、坐骨神經痛、及び其類症。

(五)、脚氣等。

類聚方廣義に云く

『此方ニ大黃ヲ加ヘテ、芍藥甘草附子大黃湯ト名ク。寒疝、腹中拘急シ、惡寒甚シク、腰脚攣痛シ、辜丸^{バウシユ} 鞣腫シ、二便通ゼザル者ヲ治ス。奇效有リ』と。

此説、本方運用上の参考と爲すべし。

黄芩湯 ワウゴントウ (傷寒論方)

黄芩 大棗各三・六 甘草 芍藥各二・四

右四味を一包と爲し、水二合を以て、煮て六勺を取り、一回に温服す (通常一日三回)。

此方は、桂枝湯の變方と見做すべきものなり。

藥能

黃芩（ワウゴン）の性能

藥徵に云く

『心下ノ痞ヲ主治スル也。旁ラ胸脇滿、嘔吐、下痢ヲ治ス』と。

又、古方藥議に云く

『味苦半、諸熱、黃疸、洩利ヲ主ドリ、小腸ヲ利シ、擁氣ヲ破ル』と。

本方證

黃芩湯の證として、傷寒論に擧ぐる所は

○太陽と少陽との合病にして、自下利する證。（太陽病下篇）なり。

吉益東洞氏曰く

『按ズルニ、當ニ心下ノ痞、腹拘急ノ證有ルベシ』と。

本法の作用

此方は、黃芩以下の四味より成り、而して黃芩、大棗は其量多く、甘草、芍藥は少量なり。即ち此方は、以上の四味互に相協同し、以て其效用を全うするものなり。故に方極附言に云く

『下利シテ心下痞シ、腹中拘急スル者ヲ治ス』と。

此說、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

應用

(一)、熱性病、數日を経過すと雖も、頭痛、煩渴尙ほ未だ止まず、既にして脈勢稍や虛弱に赴かんとする症。

(二)、下痢性疾患等にして、初起に發汗し、或は之を下して後、大勢挫折するも、下痢尙ほ未だ止まざる症。

(三)、熱性下痢等。

(四)、赤痢等にありては、其初起に大黃を加ふ。

類聚方廣義に云く

『痢疾、發熱、腹痛シ、心下痞シ、裏急後重シ、膿血ヲ便スル者ヲ治ス。大黃ヲ加フ。若シ嘔スル者ハ、加半夏生薑湯（次出）中ニ大黃ヲ加フ』と。

此說、宜しく參考と爲すべし。

黃芩加半夏生薑湯　ワウゴンカハンゲシヤウキヤウタウ　（傷寒論及金匱要略方）

黃芩　大棗　生薑各一・八　甘草　芍藥各一・二　半夏三・六

第一桂枝湯類

右六味を一包と爲し、水二合を以て、煮て六勺を取り、一回に温服す（通常一日三回）。
此方、宋板、金匱要略共に藥量に少異有り。今、成本に従ふ。
此方は、黄芩湯の去加方にして、即ち其原方に、半夏、生薑を加味せるものなり。

本方證

黄芩加半夏生薑湯の證として、傷寒論に擧ぐる所は

○太陽と少陽との合病にして、自下利し、嘔する證。（太陽病下篇）。

又、金匱要略に於けるものは

○乾嘔して利する證。（嘔吐臟下利病篇）
なり。

本方の作用

此方は、黄芩以下の六味より成り、而して半夏は其量最も多く、黄芩、大棗、生薑之に次ぎ、甘草、芍藥は最も少量なり。

即ち此方は、恰も黄芩湯に加ふるに、更に半夏、生薑を以てせるもの、如し。

故に方極附言に云く

『黄芩湯證ニシテ、嘔逆スル者ヲ治ス』と。

此説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

應用

(一)、熱性下痢等にして、乾嘔甚しく、食物を攝取すること能はず、脈數にして弱なる症。

(二)、腹痛し、下痢すること日に數行、嘔吐して煩悶する症。

(三)、赤痢等。

甘草小麥大棗湯

カンザウセウバクタイサウタウ

又甘麥大棗湯

カンバクタイ

サウタウ (金匱要略方)

甘草一・八 小麥九・六 大棗一・六

右三味を一包と爲し、水一合二勺を以て、煮て六勺を取り、一回に温服す（通常一日三回）。

『亦脾氣ヲ補フ。』

此方は、桂枝湯の變方と見做すべきものなり。

藥能

小麥（セウバク）の性能

古方藥品考に云く

『其味甘涼ニシテ滑降ナリ。故ニ乾燥を止め、小便ヲ利スル也』と。

又、古方藥議に云く

第一 桂枝湯類

「味甘寒、熱ヲ除クコトヲ主ドリ、燥渴、咽乾ヲ止メ、小便ヲ利シ、心氣ヲ養フ」と。

本方證

甘麥大棗湯の證として、金匱要略に擧ぐる所の要を摘めば

○婦人の藏躁、喜ば^{しほし}悲傷して哭せんと欲し、數ば^{しほし}欠伸する證。(婦人雜病篇)なり。

本方の作用

此方は、甘草以下の三味より成り、而して小麥は其量最も多く、甘草之に次ぎ、大棗は最も少量なり。即ち此方は、以上の三味互に相協同し、以て其效用を全うするものなり。

故に方極に云く

『急迫シテ、驚狂スル者ヲ治ス』と。

此説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

應用

(一)、「ヒステリー」、及び其類症。

(二)、神經衰弱に因する強度の不眠症等。

(三)、小兒の夜啼症等。

類聚方廣義に云く、

「藏ハ子宮也。此方ノ藏躁ヲ治スルハ、能ク急迫ヲ緩ムルヲ以テ也。婦婦、室女、平素憂鬱、無聊ニシテ、夜夜眠ラザル等ノ人ハ、多ク此症ヲ發ス。發スルトキハ則チ惡寒、發熱シ、戰慄、錯語シ、心神恍惚シ、居ニ席ニ安ンゼズ、酸泣已マズ。此方ヲ服スレバ立ドコロニ效アリ。又癩症、狂症、前症ニ髣髴スル者モ、亦奇驗有リ」と。
此説、本方運用上の参考と爲すべし。

炙甘草湯 シヤカンザウタウ 一名復脈湯 フクミヤクタウ (傷寒論及金匱要略方)

甘草一・二 生薑 桂枝各〇・八 人參 阿膠各〇・六 生地黃四・〇 麥門冬二・八

麻子仁一・八 大棗〇・八

右九味、清酒一合四勺、水一合六勺を以て、先づ八味を煮て六勺を取り、後、阿膠を入れ、溶解せしめ、一回に温服す(通常一日三回)。

此方、宋板、金匱要略共に大棗の量稍や多し。今、成本に従ふ。

此方は、桂枝湯の變方と見做すべきものなり。

藥能

生地黃(シャウヂワウ)の性能

藥性提要に云く

第一 桂枝湯類

『甘、苦ニシテ大寒、火ヲ瀉シ、諸ロノ血逆ヲ平ラグ』と。

又、古方藥品考に云く

『味甘ク、滋潤ニシテ涼降、故ニ能ク渴ヲ滋ホシ、虚ヲ補ヒ、諸熱ヲ解シ、瘀血ヲ消ス』と。

麥門冬（バクモンドウ）の性能

藥性提要に云く

『甘、微苦ニシテ寒、心ヲ清フシ、肺ヲ潤ホシ、煩ヲ除キ、嗽ヲ止ム』と。

又、古方藥品考に云く

『味淡甘、質滋潤ニシテ涼降、故ニ能ク胃中ヲ補ヒ、逆氣、上衝ヲ降瀉ス』と。

麻子仁（マシニン）の性能

藥性提要に云く

『甘ニシテ平、脾ヲ緩メ、燥ヲ潤ホシ、腸ヲ滑カニス』と。

又、古方藥品考に云く

『脂多クシテ、味淡甘、性潤滑、故ニ脾胃ヲ益シ、腸中ヲ潤ホシ、便秘ヲ滑通スルノ能有リ』と。

本方證

炙甘草湯の證として、傷寒論に擧ぐる所の要を摘めば

○脈結代し、心動悸する證。（太陽病下篇）

又、金匱要略に於けるものは

（一）虚勞不足、汗出で、悶え、脈結し、心悸する證。（血痺虚勞病篇附方）。（二）肺痿、涎唾多く、心中温温液液たる證。（肺痿肺癰欬嗽上氣病篇附方）なり。

本方の作用

此方は、甘草以下の九味より成り、而して生地黃は其量最も多く、麥門冬之に次ぎ、麻子仁また之に次ぎ、甘草また之に次ぎ、生薑、桂枝、大棗また之に次ぎ、人參、阿膠は最も少量にして、更に之に加ふるに、清酒の若干量を以てす。

即ち此方は、以上の諸藥互に相協同し、以て其效用を全うするものなり。

故に醫聖方格に云く

『病人、欬逆、上衝シ、粘痰ニ血ヲ帶ビ、舌上胎無クシテ乾燥シ、心動悸シ、或ハ咽痛シ、或ハ脈結代シ、或ハ心下痞シテ嘔セント欲シ、或ハ疲勞スル者ハ、炙甘草湯之ヲ主ドル』と。

此説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

應用

（一）、心悸亢進ありて便通不整、脈濇なる證。

（二）、心悸亢進あり、便秘して上逆し、脈搏時に結滯する症。

(三)、脈濡、心悸し、皮膚乾燥し、腹部微急し、虛寒の候なき症。
(四)、肺結核、及び其類症にして、著しき熱發を伴はざる症。
類聚方廣義に云く

「骨蒸勞嗽、擡肩喘急シ、多夢、不寢、自汗、盜汗シ、痰中血絲アリ、寒熱交^{コモゴ}モ發シ、兩頰紅赤ニシテ、巨里ノ動甚シク、惡心、潰潰トシテ吐セント欲スル者ハ、此方ニ宜シ。(下略)」と。

此說、本方運用上の參考と爲すべし。

桂枝茯苓丸 ケイシブクリヤウグワン (金匱要略方)

桂枝 茯苓 牡丹 桃仁 芍藥各等分

右五味、細末にし、煉蜜を以て丸と爲し、白湯を以て一回四・〇を服用す。

此方は、桂枝湯の附方と見做すべきものなり。

藥能

牡丹(ポタン)の性能

古方藥品考に云く

「其氣味辛ク、微シク苦ク、寒降ニシテ芳散、故ニ其能、血ヲ活シ、煩熱、血熱ヲ清涼ニス」と。

又、古方藥議に云く

「味辛寒、癥堅、瘀血ヲ除キ、癰瘡ヲ療シ、月經ヲ通ジ、撲損ヲ消シ、腰痛ヲ治シ、煩熱ヲ除ク」と。

桃仁(タウニン)の性能

藥徵續篇に云く

「瘀血、少腹滿痛ヲ主治ス。故ニ兼テ腸癰、及ビ婦人ノ經水不利ヲ治ス」と。

又、古方藥議に云く

「味苦平、瘀血、血閉癢ヲ主ドリ、欬逆上氣、疼痛ヲ止メ、大便ヲ通潤ス」と。

蜂蜜(ホウミツ)の性能

古方藥品考に云く

「其味甘美ニシテ滋潤、故ニ能ク燥渴ヲ止メ、胃中ヲ益シ、虛弱ヲ補ヒ、而シテ攻撃ノ藥ヲ調和ス。其功

甘草ニ勝レリ」と。

又、古方藥議に云く

「味甘平、痛ヲ止メ、毒ヲ解シ、衆病ヲ除キ、百藥ヲ和シ、嗽ヲ止メ、痢ヲ治シ、能ク腸ヲ滑カニス」と。

本方證

桂枝茯苓丸の證として、金匱要略に擧ぐる所の要を摘めば

○癥瘕(主として瘀血に因す)。妊娠を害する證。(婦人妊娠病篇)なり。

吉益東洞氏曰く

『按ズルニ、當ニ衝逆、心下悸ノ證有ルベシ。又曰ク、是レ唯ダ婦人ノ病ノミヲ治スルノ方ニアラザル也』と。

本方の作用

此方は、桂枝以下の五味より成り、而して其分量は皆同一にして、更に之に加ふるに、蜂蜜の若干量を以てす。

即ち此方は、以上の諸藥互に相協同し、以て其效用を全うするものなり。

故に方極附言に云く

『拘攣、上衝シ、心下悸シ、及ビ下血シ、或ハ胎動シ、若クハ經水ニ變有ル者ヲ治ス』と。

此說、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

腹證

腹診配劑錄に云く

『臍下ニ塊有リテ悸シ、若クハ痛ム』と。

應用

- (一)、月經閉止の諸症。
- (二)、月經不順に因する諸症。

(三)、妊娠時の下血等。

(四)、産後の諸症(例へば頭痛、眩暈、腰痛、腹痛等)。

(五)、男子に於ける痔疾患等。

(六)、輕症蟲樣突起炎(俗に所謂盲腸炎)等。

以上の諸症には、皆證に由り大黃或は生薑、甘草を加ふ。

類聚方廣義に云く

『産後、惡露盡キザレバ則チ諸患錯出シ、其窮、搦フ可ラザルニ至ラン。故ニ其治ハ瘀血ヲ逐フヲ以テ至要ト爲ス。此方ニ宜シ。又妊娠臨盆ニ之ヲ用フレバ、催生ニ尤モ效有リ。』

經水不調、時時頭痛シ、腹中拘攣シ、或ハ手足瘡痺スル者、或ハ經期ニ至ル毎ニ頭重、眩暈シ、腹中、腰脚疼痛スル者、産後已ニ數十日ヲ過ギテ它異症無ク、但ダ時時臍ヲ遠リテ刺痛シ、或ハ痛、腰腿ニ延ク者、經閉、上衝、頭痛シ、眼中ニ翳ヲ生ジ、赤脈縱横、疼痛、羞明シ、腹中拘攣スル者ヲ治ス。又妊婦、顛仆シテ子、腹中ニ死シ、下血止マズ、少腹攣痛スル者ニ之ヲ用フレバ胎即チ下ル。又血淋、腸風、下血ニ撰用スレバ皆效有リ。以上ノ諸症ニハ、大黃ヲ加ヘテ煎服スルヲ佳ト爲ス』と。

此說、本方運用上の参考と爲すべし。

第二 麻 黃 湯 類

此部門に於て説述する藥方は、麻黃湯及び其去加方、麻黃湯の變方、及び之より出でたる諸方、麻黃湯の附方、並に麻黃湯と他方との合方等なり。

麻黃湯 マワウタウ (傷寒論方)

麻黃 杏仁各三・六 桂枝二・四 甘草一・二

右四味を一包と爲し、水二合を以て、煮て六勺を取り、一回に温服す(通常一日二、三回)。

『覆フテ微似汗ヲ取ル。(下略)』

此方、麻黃を以て君藥と爲す。故に之を麻黃湯と名く。

本方證

麻黃湯の證として、傷寒論に擧ぐる主なるもの、要を摘めば

- (一)頭痛、發熱し、身疼腰痛し、骨節疼痛し、惡風し、汗無くして喘する證。(太陽病中篇)。(二)太陽と陽明との合病、喘して胸滿する證。(同上)。(三)脈浮緊にして汗を發せず、因て衄を致す證。(同上)。
 - (四)陽明病、脈浮、汗無くして喘する證。(陽明病篇)
- 等なり。

本方の作用

此方は、麻黃以下の四味より成り、而して麻黃、杏仁は其量最も多く、桂枝之に次ぎ、甘草は最も少量なり。

り。

即ち此方は、以上の四味互に相協同し、以て其效用を全うするものなり。

故に方極に云く

『喘シテ汗無ク、頭痛、發熱、惡寒シ、身體疼ム者ヲ治ス』と。

此説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

應用

- (一)、熱性病の初起にして、頭痛、發熱、惡寒し、身體疼痛し、脈浮緊にして發汗せざる症。
- (二)、感冒等にして、發熱、惡寒し、脈緊にして數、喘咳を發する症。
- (三)、頭痛、發熱、微惡寒し、喘咳ありて胸滿を覺ゆる症。
- (四)、熱性病の初起にして、衄血を發する症。
- (五)、熱性病の初起にして、發斑、或は發疹する症。
- (六)、氣管枝喘息等。

類聚方廣議に云く

『初生兒、時時發熱シ、鼻塞リテ通ゼズ、乳ヲ哺ムコト能ハザル者有リ。此方ヲ用フレバ即チ愈ユ。痘瘡、見點ノ期ニシテ、身熱灼クガ如ク、表鬱シテ發シ難ク、及び大熱、煩躁シテ喘シ、起脹セザル者ヲ治ス。』

麻疹、脈浮數ニシテ、發熱、身疼、腰痛シ、喘咳シ、表壅リテ出齊セザル者ヲ治ス。
哮喘（喘息）、痰潮シテ聲音出デズ、擡肩滾肚^{ダイケンゴンド}シ、臥スコトヲ得ズ、惡寒、發熱シ、冷汗油ノ如キ者ヲ治ス。生薑半夏湯ヲ合シテ、之ヲ用フレバ立ロニ效アリ』と。
此説、本方運用上の参考と爲すべし。

麻黄加朮湯 マワウカヂユツタウ (金匱要略方)

麻黄 杏仁各三・〇 桂枝 甘草各二・〇 白朮四・〇
右五味を一包と爲し、水二合を以て、煮て六勺を取り、一回に温服す（通常一日二、三回）。
『覆フテ微似汗ヲ取ル。』

此方は、麻黄湯の去加方にして、即ち其原方に、甘草を増量し、朮を加味せるものなり。

本方證

麻黄加朮湯の證として、金匱要略に擧ぐる所の要を摘めば
○濕家（濕邪を有する者との義）、身煩疼する證。（瘧濕喝病篇）
なり。

本方の作用

此方は、麻黄以下の五味より成り、而して朮は其量最も多く、麻黄、杏仁之に次ぎ、桂枝、甘草は最も少

量なり。

即ち此方は、恰も麻黄湯中の甘草を増量し、更に之に加ふるに、朮を以てせるものゝ如し。
故に方極附言に云く

『麻黄湯證ニシテ、小便不利ノ者ヲ治ス』と。
又、醫聖方格に云く

『病人、發熱シテ汗無ク、一身盡ク疼ミ、身色熏黄ニシテ喘シ、小便少キ者ハ、麻黄加朮湯之ヲ主ドル』
と。

此二説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

應用

- (一)、關節「ロイマチス」等にして、脈浮なる症。
 - (二)、筋肉「ロイマチス」及び其類症。
 - (三)、急性腎炎、及び其類症。
 - (四)、炭酸瓦斯中毒等。
- 類聚方廣義に云く

『麻黄湯症ニシテ、一身浮腫シ、小便不利ノ者ヲ治ス。症ニ隨ヒテ附子ヲ加フ。
婦人、稟性薄弱ニシテ、妊娠スル毎ニ、水腫シ、墮胎スル者、其人、越婢加朮附湯、木防己湯等ヲ用フル

トキハ、則チ直チニ墮胎スル者有リ。此方ニ宜シ。又葵子茯苓散ヲ合スルモ、亦良シ。山行シテ瘴霧ヲ冒シ、或ハ窟穴、井中ニ入り、或ハ麴室、混堂、諸濕氣、熱氣鬱悶スルノ處ニテ暈倒氣絶スル者ハ、俱ニ大劑連服セシム可シ、即チ蘇ル」と。
此説、本方運用上の参考と爲すべし。

麻黄杏仁甘草石膏湯 マワウキヤウニンカンザウセキカウタウ (傷寒論方)

麻黄三・二 杏仁 甘草各一・六 石膏六・四

右四味を一包と爲し、水一合四勺を以て、煮て六勺を取り、一回に温服す(通常一日二、三回)。
此方は、麻黄湯の變方と見做すべきものなり。

藥能

石膏(セキカウ)の性能
藥徴に云く

『煩渴ヲ主治スル也。旁ラ譫語、煩躁、身熱ヲ治ス』と。

又、古方藥議に云く

『味辛寒、中風寒熱、口乾舌焦ヲ主ドリ、大渴引飲、中著、潮熱、牙痛ヲ止ム。發斑、發疹ノ要品ト爲ス』と。

本方證

麻黄杏仁甘草石膏湯の證として、傷寒論に擧ぐる所の要を摘めば

(一)發汗の後、汗出で、喘し、大熱(大表の熱)無き證。(太陽病中篇)。(二)下して後、汗出で、喘し、大熱無き證。(太陽病下篇)なり。

本方の作用

此方は、麻黄以下の四味より成り、而して石膏は其量最も多く、麻黄之に次ぎ、杏仁、甘草は最も少量なり。

即ち此方は、以上の四味互に相協同し、以て其效用を全うするものなり。

故に醫聖方格に云く

『陽病、汗出デ、渴シテ喘シ、大熱無キ者ハ、麻黄杏仁甘草石膏湯之ヲ主ドル』と。

此説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

應用

- (一)、熱性病、汗出で、喘咳し、上逆し、惡寒なく、便通に著變なき症。
- (二)、發熱甚しく、喘咳、煩悶し、發汗の傾向ありて脈數なる症。
- (三)、壯熱ありて尿利澀滯し、渴して汗出で、咳嗽、咯痰に苦しむ症。

- (四)、喘して發熱し、發汗淋漓、口舌乾燥するも、舌苔著しからず、脈浮數なる症。
 - (五)、發汗の後、壯熱あり、汗出で、尿利澁滯し、喘咳、呼吸促迫し、脈數なる症。
 - (六)、感冒後の氣管枝炎等。
 - (七)、肺炎、及び其類症。
 - (八)、輕症「チフテリア」、及び其類症。
- 類聚方廣義に云く

『喘咳止マズ、面目浮腫シ、咽乾、口渴シ、或ハ胸痛スル者ヲ治ス。南呂丸、姑洗丸ヲ兼用ス。哮喘、胸中火ノ如ク、氣逆シ、涎潮シ、大息、呻吟シ、聲、鋸ヲ拽クガ如ク、鼻、清涕ヲ流シ、心下鞣塞シ、巨里ノ動、奔馬ノ如キ者ハ、此方ニ宜シ。當ニ痰融ケ、聲出ヅルノ後ヲ須チ、陷胸丸、紫圓ノ類ヲ以テ之ヲ疏導スベシ。肺癰、發熱、喘咳シ、脈浮數ニシテ、臭痰膿血アリ、渴シテ水ヲ飲マント欲スル者ハ、宜シク桔梗ヲ加フベシ。時ニ白散ヲ以テ之ヲ攻ム』と。

此說、本方運用上の參考と爲すべし。

越婢湯 エツピタウ (金匱要略方)

麻黄三・六 石膏四・八 生薑一・八 大棗二・四 甘草一・二

右五味を一包と爲し、水一合二勺を以て、煮て六勺を取り、一回に温服す(通常一日三回)。

『惡風スル者ハ、(下略)』

此方、本と越國の婢より出づ。故に之を方名と爲すと云ふ。

此方は、麻黄杏仁甘草石膏湯の去加方にして、即ち其原方に、麻黄を増量し、杏仁を去り、生薑、大棗を加味せるものなり。

本方證

越婢湯の證として、金匱要略に擧ぐる所の要を摘めば

○風水、惡風し、一身悉く腫れ、脈浮、自汗出づる證。(水氣病篇)なり。

本方の作用

此方は、麻黄以下の五味より成り、而して石膏は其量最も多く、麻黄之に次ぎ、大棗また之に次ぎ、生薑また之に次ぎ、甘草は最も少量なり。

即ち此方は、恰も麻黄杏仁甘草石膏湯の麻黄を増量し、杏仁を去り、更に之に加ふるに、生薑、大棗を以てせるもの、如し。

故に方極附言に云く

『喘シテ渴シ、水ヲ飲マント欲シ、或ハ惡風寒スル者ヲ治ス』と。

又、醫聖方格に云く

『陽病、一身悉ク腫レ、脈浮ニシテ渴シ、續イテ自汗出デ、或は惡風スル者ハ、大熱無キモ亦越婢湯之ヲ主ドル』と。

此二説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

應用

(一)、脚氣等にして、兩脚水腫シ、脈浮にして渴し、尿利減少し、或は喘咳を發する等の症。

(二)、皮膚病性腎炎、及び其類症。

(三)、下肢の關節炎等。

(四)、「フルンケル」の初起。

(五)、丹毒等には、證に由り犀角を加ふ。

越婢加朮湯 エツピカヂユツタウ (金匱要略方)

麻黄二・四 石膏三・二 大棗一・六 甘草〇・八 生薑一・二 白朮一・六

右六味を一包と爲し、水一合二勺を以て、煮て六勺を取り、一回に温服す(通常一日三回)。

『惡風ニハ、(下略)』。

此方は、越婢湯の去加方にして、即ち其原方に、朮を加味せるものなり。

本方證

越婢加朮湯の證として、金匱要略に擧ぐる主なるものゝ要を摘めば

(一)一身面目黃腫し、其脈沈にして、小便利せざる證。(水氣病篇)。(二)厲風氣(即ち脚氣の類症)、

脚弱の證。(中風歷節病篇附方)

等なり。

本方の作用

此方は、麻黄以下の六味より成り、而して石膏は其量最も多く、麻黄之に次ぎ、大棗、朮また之に次ぎ、生薑また之に次ぎ、甘草は最も少量なり。

即ち此方は、恰も越婢湯に加ふるに、更に朮を以てせるものゝ如し。

故に方極附言に云く

『越婢湯證ニシテ、小便利ノ者ヲ治ス』と。

又、醫聖方格に云く

『一身面目黃腫シ、小便少ナク、渴シテ汗出デ、其人大便秘ク、舌黄ナルハ、越婢加朮湯之ヲ主ドル』と。

此二説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

應用

(一)、水腫性脚氣等にして、陽證に屬する者。

(二)、關節「ロイマチス」等にして、陽證に屬する者。

(三)、急性腎炎、及び其類症。

(四)、皮膚病性腎炎等。

(五)、諸種の皮膚病、殊に疥癬等。

類聚方廣義に云く

『眼珠膨脹、熱痛シ、臉胞腫脹シ、及ビ爛臉風、痒痛、羞明シ、涙多キ者ヲ治ス。應鐘散ヲ兼用シ、時に梅肉散或ハ紫圓ヲ以テ之ヲ攻ム。』

此方ニ附子ヲ加ヘテ、越婢加朮附湯ト名ク。水腫、身熱、惡寒シ、骨節疼重シ、或ハ瘧痺シ、渴シテ小便不利ノ者ヲ治ス。薤スベシツツ實丸、仲呂丸等ヲ兼用ス。心下鞭滿シ、或ハ塊有リ、大便通ゼザル者ハ、陷胸丸、大承氣湯等ヲ兼用ス。又諸瘍久シキヲ經テ、流注狀ヲ爲ス者、及ビ破傷濕ト稱スル者ヲ治ス。又疥癬内攻シ、一身洪腫シ、短氣、喘鳴シ、咽乾口渴シ、二便通ゼズ、巨里ノ動、怒濤ノ如キ者ヲ治ス。更ニ反鼻ヲ加フレバ效尤モ勝ル。當ニ仲呂丸、紫圓、走馬湯等ヲ以テ之ヲ下スベシ。又風濕、痛風(「ロイマチス」の類)、身熱、惡寒シ、走注、腫起シ、或ハ熱痛シ、或ハ冷痛シ、小便利セズシテ渴スル者ヲ治ス。薤實丸ヲ兼用ス。

痿躄ノ症、腰脚麻痺シ、水氣有リ、或ハ熱痛シ、或ハ冷痛スル者ヲ治ス』と。此說、本方運用上の參考と爲すべし。

越婢加半夏湯 エツピカハンゲタウ (金匱要略方)

麻黄二・四 石膏三・二 生薑一・二 甘草〇・八 大棗一・六 半夏二・四

右六味を一包と爲し、水一合二勺を以て、煮て六勺を取り、一回に温服す(通常一日三回)。

此方は、越婢湯の去加方にして、即ち其原方に、半夏を加味せるものなり。

本方證

越婢加半夏湯の證として、金匱要略に擧ぐる所の要を摘めば

○欬して上氣し、其人喘し、目、脱する狀の如く、脈浮大なる證。(肺痿肺癰欬嗽上氣病篇)なり。

本方の作用

此方は、麻黄以下の六味より成り、而して石膏は其量最も多く、麻黄、半夏之に次ぎ、大棗また之に次ぎ、生薑また之に次ぎ、甘草は最も少量なり。

即ち此方は、恰も越婢湯に加ふるに、更に半夏を以てせるものゝ如し。

故に方極附言に云く

『越婢湯證ニシテ、嘔逆スル者ヲ治ス』と。

又、醫聖方格に云く

「欬シテ嘔逆シ、發熱シ、汗出デ、煩渴シ、其人微喘シ、目、脫スル狀ノ如ク、大ニ浮腫シ、脈浮大ナル者ハ、越婢加半夏湯之ヲ主ドル」と。

此二説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

應用

- (一)、喘息、日を経て癒えず、脈浮大にして力ある等の症。
- (二)、「チフテリア」及び其類症。

大青龍湯 **ダイセイリユウタウ** (傷寒論及金匱要略方)

麻黃三・六 桂枝 甘草 杏仁各一・二 生薑 大棗各一・八 石膏四・八

右七味を一包と爲し、水一合八勺を以て、煮て六勺を取り、一回に温服す(通常一日二、三回)。

『微似汗ヲ取ル。汗出ヅルコト多キ者ハ、(下略)』

此方、宋板に在りては、大棗の量稍や少なし。今、成本に従ふ。

此方は、越婢湯と桂枝湯との合方にして、其桂枝湯に於ては桂枝を減量し、芍藥を去り、其越婢湯に於ては生薑、大棗、甘草の重複藥を除けるものなり。

本方證

大青龍湯の證として、傷寒論に擧ぐる所の要を摘めば

(一)脈浮緊にして、發熱、惡寒し、身疼痛し、汗出せずして煩躁する證。(太陽病中篇)。(二)脈浮緩にして、身疼まず、但だ重く、乍たちまちに輕き時有り、少陰の證無き證。(同上)。

又、金匱要略に於けるものは

○溢飲の證。(痰飲欬嗽病篇)

なり。

本方の作用

此方は、麻黃以下の七味より成り、而して石膏は其量最も多く、麻黃之に次ぎ、生薑、大棗また之に次ぎ、桂枝、甘草、杏仁は最も少量なり。

即ち此方は、以上の七味互に相協同し、以て其效用を全うするものなり。

故に方極附言に云く

『喘シ、及ビ欬シテ上衝シ、渴シテ水ヲ飲マント欲シ、或ハ身疼ミ、惡風寒スル者ヲ治ス』と。

又、醫聖方格に云く

『陽病、脈浮緊ニシテ、發熱、惡寒シ、身疼痛シ、汗出デズ、渴シテ煩躁スル者ハ、大青龍湯之を主ドル』と。

此二説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

應用

- (一)、熱性病、惡風して身疼み、下痢頻々、腹部熱灼し、煩渴して汗無き症。
- (二)、熱性病、倦臥し、四肢懶惰にして、時々寒熱あり、食欲減退し、脈促なる症。
- (三)、惡寒ありて汗出せず、口舌乾燥し、四肢沈重、疼痛する症。
- (四)、咳嗽頻發し、口舌乾燥し、渴して水を欲する症。
- (五)、麻疹、及び痘瘡等にして、疹子陷没の兆ある症。

類聚方廣義に云く

「麻疹、脈浮緊ニシテ、寒熱、頭眩シ、身體疼痛シ、喘咳、咽痛シ、汗出デズシテ煩躁スル者ヲ治ス。眼目疼痛シ、風涙止マズ、赤脈怒張シ、雲翳四圍シ、或ハ眉稜骨疼痛シ、或ハ頭疼、耳痛スル者ヲ治ス。又爛險風、涕淚稠粘シ、瘙癢甚シキ者ヲ治ス。俱ニ芣苢（即ち車前）ヲ加フレバ佳ナリ。兼テ黃連解毒湯加枯礬ヲ以テ、頻頻洗蒸シ、毎夜臥スニ臨ミ、應鐘散ヲ服シ、五日、十日毎ニ紫圓五分、一錢ヲ與ヘテ之ヲ下ス可シ。

小兒ノ赤遊丹毒、大熱、煩渴シ、驚惕シ、或ハ痰喘壅盛スル者ヲ治ス。紫圓、或ハ龍葵丸ヲ兼用ス。急驚風、痰涎沸涌シ、直視、口噤スル者ハ、當ニ先ヅ熊膽、紫圓、走馬等ヲ撰ビテ吐下ヲ取ルベシ。後、大熱、煩躁シ、喘鳴、搐搦止マザル者ハ、宜シク此方ヲ以テ發汗スベシ」と。
此說、本方運用上の参考と爲すべし。

麻黄杏仁薏苡甘草湯 マワウキヤウニンヨクイカンザウタウ (金匱要略方)

麻黄三・二 甘草一・六 薏苡仁六・四 杏仁一・六

右四味を一包と爲し、水一合五勺を以て、煮て六勺を取り、一回に温服す（通常一日二、三回）。

「微汗有リ。風ヲ避ク。」

此方、原本に在りては、其用法稍や煩雜なり。今、吉益東洞氏の改むる所に従ふ。

此方は、麻黄杏仁甘草石膏湯の去加方にして、即ち其原方に、石膏を去り、薏苡仁を加味せるものなり。

藥能

薏苡仁（ヨクイニン）の性能

藥徴に云く

「浮腫ヲ主治スル也」と。

又、古方藥議に云く

「味甘寒、筋脈ノ拘攣、風濕痺ヲ主ドリ、氣ヲ下シ、腸胃ヲ利シ、水腫ヲ消シ、熱ヲ清フシ、肺痿、肺氣ノ膿血ヲ吐スルヲ主ドル」と。

本方證

麻黄杏仁薏苡甘草湯の證として、金匱要略に擧ぐる所の要を摘めば

○一身盡く疼み、發熱、日晡所（午後四時の頃）に劇しき證。（瘧濕喝病篇）なり。

吉益東洞氏曰く

『按ズルニ、當ニ喘滿ノ證有ルベシ』と。

本方の作用

此方は、麻黄以下の四味より成り、而して薏苡仁は其量最も多く、麻黄之に次ぎ、甘草、杏仁は最も少量なり。

即ち此方は、恰も麻黄杏仁甘草石膏湯中の石膏を去り、之に代ふるに、薏苡仁を以てせるもの、如し。

故に方極附言に云く

『麻黄杏仁甘草石膏湯證ニシテ、浮腫シ、煩渴セザル者ヲ治ス』と。

此説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

應用

(一)、急性關節「ロイマチス」、及び其類症。

(二)、諸種の神經痛、及び其類症。

(三)、疣贅等。

醫聖方格に云く

『病者、一身黄腫シテ喘咳シ、其人舌和シテ渴セザル者ハ、麻黄杏仁薏苡甘草湯ヲ與フ可シ』と。

又、類聚方廣義に云く

『妊婦、浮腫シ、喘咳、息迫シ、或ハ身體麻痺シ、或ハ疼痛スル者ヲ治ス。

肺癰、初起惡寒、息迫シ、咳嗽止マズ、面目浮腫シ、濁唾臭痰アリ、胸痛スル者ヲ治ス。其精氣未ダ脱セ

ザルニ迨ビ、白散ヲ交モ用ヒ、邪穢ヲ蕩洗スルトキハ、則チ平ニ復ス可シ。

風濕、痛風（關節「ロイマチス」の類）、發熱、劇痛シ、關節腫起スル者ニ、尤、附ヲ加フレバ奇效有リ』

と。

此二説、本方運用上の参考と爲すべし。

麻黄連軹赤小豆湯 マワウレンセウシヤクセウツタウ（傷寒論方）

麻黄 連軹（即ち連翹根） 生薑 杏仁各〇・八 赤小豆八・〇 大棗一・二 甘草〇

四 生梓白皮（今、桑白皮を以て之に代ふ）二・〇

右八味を一包と爲し、水二合を以て、煮て六勺を取り、一回に温服す（通常一日三回）。

『半日ニ服シ盡ス。』

此方、原本に在りては、潦水を以て藥味を煮る。今、類聚方廣義の改むる所に従ふ。

此方は、麻黄湯の附方と見做すべきものなり。

藥能

連軹(レンセウ)の性能

藥性提要に云く

『微寒ニシテ苦、諸經ノ血凝リ、氣聚ルヲ散ジ、濕熱ヲ瀉シ、腫ヲ消シ、膿ヲ排ス』と。

又、古方藥議に云く

『味苦平、癰腫、結熱、小便不通ヲ主ドリ、諸經ノ血結ボレ、氣聚ルヲ散ジ、腫ヲ消シ、痛ヲ止ム』と。

赤小豆(シヤクセウヅ)の性能

藥性提要に云く

『甘ニシテ酸、小腸ヲ通ジ、小便ヲ利シ、水ヲ行ラシ、血ヲ散ズ』と。

又、古方藥議に云く

『味甘酸、水ヲ下スコトヲ主ドリ、癰腫ノ膿血ヲ排シ、小便ヲ利シ、脹滿ヲ下シ、關節ノ煩熱ヲ去リ、熱毒ヲ解ス』と。

桑白皮(サウハクヒ)の性能

藥性提要に云く

『甘、辛ニシテ寒、肺火ヲ瀉シ、氣ヲ下シ、水ヲ行ラシ、嗽ヲ止ム』と。

又、古方藥品考に云く

『其味淡薄ナリ。故ニ能ク肺氣ヲ降瀉シ、水道ヲ利シ、以テ欬嗽ヲ止ムル也』と。

本方證

麻黃連軹赤小豆湯の證として、傷寒論に擧ぐる所の要を摘めば

○**癰熱裏**に在りて、發黃する證。(陽明病篇)

なり。

本方の作用

此方は、麻黃以下の八味より成り、而して赤小豆は其量最も多く、生梓白皮(桑白皮)之に次ぎ、大棗ま

た之に次ぎ、麻黃、連軹、生薑、杏仁また之に次ぎ、甘草は最も少量なり。

即ち此方は、以上の八味互に相協同し、以て其效用を全うするものなり。

故に醫聖方格に云く

『瘡家、身熱シテ浮腫シ、或ハ黃ヲ發シ、或ハ喘シ、或ハ身痒ク、之ヲ抓ケバ乍チ腫起スル者ハ、麻黃連軹赤小豆湯之ヲ主ドル』と。

此説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

應用

(一)、黃疸を發し、腹滿し、微下痢し、尿利減少し、尙ほ食慾減退せざる症。

(二)、諸種の黃疸にして、尿利澁滯し、下痢日に數行、腹微滿し、頭部に汗出づる症。

(三)、皮膚病性腎炎等。
類聚方廣義に云く

『疥癬内陷シ、一身瘙痒、發熱シ、喘咳シテ腫滿スル者ニ、反鼻ヲ加フレバ奇效有リ。

生梓白皮ハ採用シ易カラズ。今權ニ乾梓葉、或ハ桑白皮ヲ以テ之ニ代フ』と

此説、本方運用上の參考と爲すべし。

第三 白 虎 湯 類

此部門に於て説述する藥方は、白虎湯及び其去加方なり。

白虎湯 ビヤクコタウ (傷寒論方)

知母二・四 石膏六・四 甘草〇・八 粳米四・八

右四味、水二合を以て先づ米を煮て一合二勺を取り、後、三味を入れ、煮て六勺を取り、一回に温服す

(通常一日三回)。

此方、原本に在りては、其煮法詳かならず。今、類聚方廣義の改むる所に従ふ。

此方、石膏を以て君藥と爲す。

白虎は則ち四神の一にして、之を方名と爲せるは、其石膏の色白きに因ると稱せらる。

藥能

知母(チモ)の性能

古方藥品考に云く

『味苦クシテ甘シ。故ニ善ク燥渴ヲ潤ホシ、熱結ヲ清瀉ス』と。

又、古方藥議に云く

『味苦寒、消渴、熱中ヲ主ドリ、邪氣ヲ除キ、熱結ヲ療シ、亦タ瘧ノ熱煩ヲ主ドル。患人虚シテ口乾クニハ、加ヘテ之ヲ用ユ』と。

粳米(カウベイ)の性能

古方藥品考に云く

『氣味甘温ニシテ滋潤、專ラ補養ヲ主ドル』と。

又、古方藥議に云く

『味甘平、煩ヲ止メ、洩ヲ止メ、胃氣ヲ和シ、血脈ヲ通ジ、中ヲ温ム』と。

本方證

白虎湯の證として、傷寒論に擧ぐる所の要を摘めば

(一)脈浮滑にして、表に熱有り、裏に寒(寒冷に非ず、邪毒の意)有る證。(太陽病下篇)。(二)三陽の合病、腹滿して身重く、以て轉側し難く、口不仁にして面に垢つき、讞語、遺尿し、自汗出づる證。(陽

明病篇)。 (三)脈滑にして、厥し(所謂熱厥の證)、裏に熱有る證。(厥陰病篇)なり。

本方の作用

此方は、知母以下の四味より成り、而して石膏は其量最も多く、粳米之に次ぎ、知母また之に次ぎ、甘草は最も少量なり。

即ち此方は、以上の四味互に相協同し、以て其效用を全うするものなり。

故に方極に云く

『大渴引飲シ、煩躁スル者ヲ治ス』と。

又、醫聖方格に云く

『熱病、脈浮滑、汗出デ、煩渴シ、時ニ譫語シ、其人小便快利シ、甚シキ者ハ遺尿シ、必ズ舌黄ニシテ、大便セザル者ハ、白虎湯之ヲ主ドル』と。

此二説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

應用

(一)、熱性病、發熱すれば汗出で、起臥すれば身體疼痛し、其脈滑なる症。

(二)、熱性病、腹滿して汗出で、口舌乾燥し、脈浮數なる症。

(三)、汗出で、全身倦怠し、安臥し難く、舌乾燥し、脈沈緊なる症。

(四)、脈浮滑にして、汗、頭髮を潤ほし、尿利頻繁、喘して渴し、心悸亢進を覺ゆる症。

(五)、發熱し、微惡寒し、自汗出で、解せず、其脈疾促にして、頻りに冷水を欲する症。

(六)、手足厥冷し、身體疼痛し、然かも其脈滑なる症。

(七)、發狂し、大に渴し、其脈洪大の症。

(八)、痘瘡、熱熾盛にして身體火の如く、大に渴し、結膜充血し、或は皮膚に斑點を發する症。

(九)、頭痛甚しく、脈長洪にして、口舌乾燥し、舌苔黄黒なるも、未だ承氣劑を與ふ可らざる症。

集驗良方に云く

『白虎湯ハ、中暑、口渴シテ水ヲ飲ミ、身熱シ、頭暈、昏暈スル等ノ證ヲ治ス』と。

又、醫學入門に云く

『白虎湯ハ、一切ノ時氣、瘟疫、雜病、胃熱シ、欬嗽シテ斑ヲ發シ、及ビ小兒ノ痘瘡、癩疹、伏熱等ノ證ヲ治ス』と。

又、類聚方廣義に云く

『麻疹、大熱、譫語シ、煩渴引飲シ、唇舌燥裂シ、脈洪大ナル者ヲ治ス。

齒牙疼痛シ、口舌乾キテ渴スル者ヲ治ス。眼目熱痛スルコト灼クガ如ク、赤脈怒張シ、或ハ頭腦、眉稜骨痛ミ、煩渴スル者ヲ治ス。俱ニ黄連ヲ加フレバ良シ。應鐘散ヲ兼用シ、時ニ紫圓ヲ以テ之ヲ攻ム』と。

此等の諸説、宜しく本方運用上の參考と爲すべし。

白虎加人參湯　ビヤクコカニンジンタウ　（傷寒論及金匱要略方）

知母二・〇　石膏五・二　甘草〇・六　粳米四・〇　人參一・〇

右五味、水二合を以て先づ米を煮て一合二勺を取り、後、四味を入れ、煮て六勺を取り、一回に温服す（通常一日三回）。

此方は、白虎湯の去加方にして、即ち其原方に、人參を加味せるものなり。

本方證

白虎加人參湯の證として、傷寒論に擧ぐる主なるもの、要を摘めば

（一）大汗出で、後、大煩渴して解せず、脈洪大なる證。（太陽病上篇）。（二）若くは吐し、若くは下して後解せず、熱結ばれて裏に在り、表裏俱に熱し、時々惡風し、大に渴し、舌上乾燥して煩し、水數升を飲まんと欲する證。（太陽病下篇）。（三）口燥渴し、心煩し、背微惡寒する證。（同上）。（四）渴して水を飲まんと欲し、表證無き證。（同上）。

又、金匱要略に於けるものは

（一）^{えつ}喝（中熱、即ち熱射病、或は日射病の類）にして、汗出で、惡寒し、身熱して渴する證。（瘧濕喝病篇）。（二）渴して水を飲まんと欲し、口乾き舌燥く證。（消渴小便利淋病篇）等なり

本方の作用

此方は、知母以下の五味より成り、而して石膏は其量最も多く、粳米之に次ぎ、知母また之に次ぎ、人參また之に次ぎ、甘草は最も少量なり。

即ち此方は、恰も白虎湯に加ふるに、更に人參を以てせるもの、如し。

故に方極附言に云く

『白虎湯證ニシテ、心下痞鞭スル者ヲ治ス』と。

又、醫聖方格に云く

『陽病、汗出デ、大煩渴シテ解セズ、脈洪大、其人必ズ舌黃、大便鞭クシテ腹濡^{ナシ}、或ハ心下痞シ、或ハ疲勞スル者ハ、白虎加人參湯之ヲ主ドル』と。

此二説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

應用

- （一）、熱性病、汗出で、表證なく、煩躁するも食欲減退せず、四肢疼重し、渴飲甚しき症。
- （二）、熱性病、脈緊、舌、焦色を現はし、身體痛み、汗出で、煩悶し、二便に著變なき症。
- （三）、寒熱去來し、口邊麻痺し、汗出で、渴し、心煩、腹滿し、身體疼痛し、尿利頻繁なる症。
- （四）、四肢厥冷して汗出で、心煩して微しく惡寒を覺え、其脈滑數なる症。
- （五）、四肢微しく厥冷し、汗出で、心煩し、關節疼痛して屈伸自由ならず、其脈沈滑なる症。

(六)、發汗の後、脱汗止まず、心煩し、微喘し、身體少しく痛みて屈伸し難く、尿利頻繁なるも大便に著變なく、其脈浮滑なる症。

(七)、尿崩症、或は糖尿病等にして、舌に白苔ありて乾燥する症。

(八)、日射病、及び熱射病等。

類聚方廣義に云く

『霍亂(吐瀉病)、吐瀉ノ後、大熱、煩躁シ、大渴引飲シ、心下痞鞭シ、脈洪大ナル者ヲ治ス。

消渴(糖尿病の類)、脈洪數ニシテ、晝夜引飲歇マズ、心下痞鞭シ、夜間、肢體煩熱スルコト更ニ甚シク、

肌肉日ニ消鑠スル者ヲ治ス。瘧病(「マラリア」の類)、大熱燬クガ如ク、讞語シ、煩躁シ、汗出ヅルコト

淋漓、心下痞鞭シ、渴飲、度無キ者ヲ治ス』と。

此説、本方運用上の参考と爲すべし。

白虎加桂枝湯 ビヤクココケイシタウ (金匱要略方)

知母二・〇 石膏五・二 甘草〇・六 粳米四・〇 桂枝一・〇

右五味、水二合を以て、先づ米を煮て一合二勺を取り、後、四味を入れ、煮て六勺を取り、一回に温服す(通常一日三回)。

『汗出ヅレバ即チ愈ユ。』

此方、原本に在りては、粳米の分量少なし。今、類聚方の改むる所に従ふ。

此方は、白虎湯の去加方にして、即ち其原方に、桂枝を加味せるものなり。

本方證

白虎加桂枝湯の證として、金匱要略に擧ぐる所の要を摘めば

○温瘧、身に寒無く、但だ熱し、骨節疼痛し、時に嘔する證。(瘧病篇)なり。

本方の作用

此方は、知母以下の五味より成り、而して石膏は其量最も多く、粳米之に次ぎ、知母また之に次ぎ、桂枝また之に次ぎ、甘草は最も少量なり。

即ち此方は、恰も白虎湯に加ふるに、更に桂枝を以てせるものゝ如し。

故に方極に云く

『白虎湯證ニシテ、上衝スル者ヲ治ス』と。

又、醫聖方格に云く

『所謂温瘧ニシテ、身ニ寒無ク、但だ熱シ、其發スルヤ、或ハ一日ニ一發シ、或ハ隔日ニ一發シ、骨節疼痛シ、渴シテ水漿ヲ引キ、頭痛、頭汗シ、必ズ大便鞭ク、或ハ小便微難ナル者ハ、白虎加桂枝湯之ヲ主ドル』と。

此二説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

應用

- (一)、「マラリア」様疾患にして、發熱甚しく、發汗淋漓たる症。
 - (二)、頭痛甚しく、常に逆上感ある症。
 - (三)、齒牙疼痛し、逆上感ある症。
- 類聚方廣義に云く

『霍亂、吐瀉ノ後、身體灼熱シ、頭疼、身痛シ、大渴、煩躁シ、脈浮大ノ者ハ、此方ニ宜シ』と。
 此説、本方運用上の参考と爲すべし。

第四 小半夏湯類

此部門に於て説述する藥方は、小半夏湯及び其去加方、並に附方なり。

小半夏湯 セウハンゲタウ (金匱要略方)

半夏九・六 生薑六・四

右二味を一包となし、水三合八勺を以て、煮て六勺を取り、一回に温服す(通常一日二回)。
 或は之を冷却し、少量宛、頻回服用するも亦可なり。

本方證

小半夏湯の證として、金匱要略に擧ぐる所の要を摘めば

- (一)嘔家、反つて渴せず、心下に支飲有る證。(痰飲欬嗽病篇)。(二)黄疸病、小便の色變せず、自利せんと欲し、腹滿して喘し、臑する證。(黄疸病篇)。(三)諸嘔吐、穀、下るを得ざる證。(嘔吐臑下利病篇)なり。

本方の作用

此方は、半夏、生薑の二味より成り、而して半夏は其量多く、生薑は少量なり。

即ち此方は、以上の二味互に相協同し、以て其效用を全うするものなり。

故に方極に云く

『吐シテ、渴セザル者ヲ治ス』と。

又、醫聖方格に云く

『心下ニ支飲有リ、渴セズシテ嘔吐スル者ハ、小半夏湯之ヲ主ドル』と。

此二説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

腹證

腹診配劑錄に云く

『心下痞シ、且ツ水氣有リ。之ヲ按ズレバ即チ鳴ル』と。

應用

諸般の嘔吐には、先づ本方を與へて其嘔を止め、然る後に、證に隨ひて他の適方を處す。
醫林集要に云く

『欬逆シテ死セント欲スルヲ通治ス』と。

又、聖濟總錄に云く

『霍亂、涎沫ヲ嘔吐スルニ、醫反ツて之ヲ下シ、心下痞ヲ作スヲ治ス』と。

又、類聚方廣義に云く

『諸病、嘔吐甚シク、或ハ病人、湯藥ヲ惡ミテ嘔吐、惡心シ、對症ノ方ヲ服スルコト能ハザル者ハ、皆宜シク此方ヲ兼用スベシ。』

此方、嘔吐ノ主藥也。若シ嘔吐シテ渴シ、飲ミテ復タ嘔吐シ、嘔渴俱ニ甚シキ者ハ、此方ノ主治ニ非ザル也。小半夏加茯苓湯、五苓散、茯苓澤瀉湯ヲ撰用ス可シ。

此方ハ能ク臟ヲ治ス。然レドモ傷寒大熱シ、譫語、煩躁シ、腹滿、便閉ノ諸症未ダ退カザル者ハ、當ニ其主症ヲ治スベシ。主症治スレバ臟自カラ止マン。若シ臟甚シキ者ハ、兼用スルモ亦好シ』と。
此等の諸説、宜しく本方運用上の參考と爲すべし。

小半夏加茯苓湯 セウハンゲカブクリヤウタウ (金匱要略方)

半夏七・二 生薑四・八 茯苓二・四

右三味を一包と爲し、水二合八勺を以て、煮て六勺を取り、一回に溫服す(通常一日二回)。

或は少量宛、頻回冷服するも亦可。

此方は、小半夏湯の去加方にして、即ち其原方に、茯苓を加味せるものなり。

本方證

小半夏加茯苓湯の證として、金匱要略に擧ぐる所の要を摘めば

(一)卒嘔吐、心下痞し、膈間に水有り、眩悸する證。(痰飲欬嗽病篇)。(二)先づ渴し、後に嘔する證。

(同上)

なり。

本方の作用

此方は、半夏以下の三味より成り、而して半夏は其量最も多く、生薑之に次ぎ、茯苓は最も少量なり。

即ち此方は、恰も小半夏湯に加ふるに、更に茯苓を以てせるもの、如し。

故に方極に云く

『小半夏湯證ニシテ、眩悸スル者ヲ治ス』と。

此説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

應用

(一)、諸種の嘔吐症。

(二)、急性胃腸「カタル」等にして、殊に嘔吐甚しき症。

(三)、水腫性脚氣等にして、嘔吐を發する症。

(四)、眩暈、嘔吐を發し、心悸亢進を自覺する症。

(五)、妊娠嘔吐等。

(六)、小兒の吐乳症等。

仁齋直指方に云く

「水結胸ノ證、心下怏滿シ、大熱無ク、頭ニ汗出ヅルヲ治ス」と。

又、張氏醫通に云く

「痰飲、汗多クシテ、小便利セザルヲ治ス」と。

又、婦人良方に云く

「痰飲、脾胃和セズ、欬嗽、嘔吐シ、飲食入ラザルヲ治ス」と。

此等の諸説、宜しく本方運用上の参考と爲すべし。

半夏厚朴湯 ハンゲコウボクタウ (金匱要略方)

半夏四・八 厚朴一・二 茯苓一・六 生薑二・〇 乾蘇葉〇・八

右五味を一包と爲し、水一合を以て、煮て六勺を取り、一回に溫服す(通常一日三、四回)。

此方は、小半夏湯の附方と見做すべきものなり。

藥能

蘇葉(ソエフ)の性能

古方藥品考に云く

「其味微辛ニシテ芳烈ナリ。故ニ逆氣ヲ下降シ、鬱結ヲ開發スルノ能有リ」と。

又、古方藥議に云く

「味辛溫、氣ヲ下シ、寒ヲ除キ、中ヲ寬メ、上氣、欬逆ヲ主ドリ、胃ヲ開キ、食ヲ下シ、魚蟹ノ毒ヲ解ス」と。

本方證

半夏厚朴湯の證として、金匱要略に擧ぐる所は

○婦人、咽中に炙𩺰(しやん)(炙りたる小肉の意)有るが如き證。(婦人雜病篇)なり。

吉益東洞氏曰く

「按ズルニ、當ニ悸ノ證有ルベシ。又按ズルニ、千金ニハ、胸滿シ、心下堅ク、咽中帖帖トシテ炙肉有ルガ如ク、之ヲ吐ケドモ出デズ、之ヲ吞メドモ下ラズニ作ル」と。

本方の作用

此方は、半夏以下の五味より成り、而して半夏は其量最も多く、生薑之に次ぎ、茯苓また之に次ぎ、厚朴また之に次ぎ、蘇葉は最も少量なり。

即ち此方は、以上の五味互に相協同し、以て其效用を全うするものなり。

故に方極に云く

『咽中ニ炙臙有ルガ如ク、或ハ嘔シ、或ハ心下悸スル者ヲ治ス』と。

又、醫聖方格に云く

『病人、咽中ニ炙臙有ルガ如ク、之ヲ吐ケドモ出デズ、之ヲ吞メドモ下ラズ、心下微滿スル者ハ、半夏厚朴湯之ヲ主ドル』と。

此二説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

腹證

腹診配劑錄に云く

『胸滿シ、心下微シク軟ク、咽中ニ紙屑ヲ帖スルガ如シ』と。

應用

(一)、食道狭窄、及び其類症。

(二)、「ヒステリー」性咽喉絞搾感等。

(三)、喉頭及び氣管等の「カタル」症候。

(四)、氣管枝加答兒等。

(五)、妊娠嘔吐等。

(六)、皮膚病性腎炎等には、證に由り犀角を加ふ。

方機に云く

『若シ感冒、桂枝ノ證ニシテ、痰飲有ル者ハ、桂枝湯合方之ヲ主ドル（下略）』と。

又、類聚方集覽に云く

『宜シク近方ノ四七湯ト、併せ考フベシ。且ツ其方、正ニ同ジ。又、桔梗、枳實ヲ加フレバ益ス可也。又、蘇葉ニ代ルニ蘇子ヲ以テスレバ尤モ可ナリ』と。

又、類聚方廣義に云く

『此症（咽中の炙臙）ハ、後世ノ所謂梅核氣也。桔梗ヲ加フレバ尤モ佳ナリ。南呂丸ヲ兼用ス。又妊娠惡阻ヲ治スルコト極メテ妙ナリ。大便不通ノ者ハ、黃蘗丸、或ハ大蘗丸ヲ兼用ス（下略）』と。

此等の諸説、宜しく本方運用上の參考と爲すべし。

第五 柴胡湯類

此部門に於て説述する藥方は、小柴胡湯及び其去加方、變方、變方の去加方、附方、並に小柴胡湯の附方、小柴胡湯と他方との合方等なり。

小柴胡湯 セウサイコタウ (傷寒論及金匱要略方)

柴胡三・二 黃芩 人參 甘草 生薑 大棗各一・二 半夏二・四

右七味を一包と爲し、水二合四勺を以て、煮て一合二勺を取り、再煎して六勺を取り、一回に温服す
(通常一日三回)。

『後加減ノ法。(下略)』

藥能

柴胡(サイコ)の性能

藥徵に云く

『胸脇苦滿ヲ主治スル也。旁ヲ寒熱往來、腹中ノ痛、脇下ノ痞鞭ヲ治ス』と。

又、古方藥議に云く

『味苦平、心腹ヲ主ドリ、寒熱、邪氣ヲ去リ、煩ヲ除キ、驚ヲ止メ、痰ヲ消シ、嗽ヲ止メ、婦人産前後ノ諸熱、及ビ熱入血室、經水不調ヲ治シ、血氣ヲ宣暢シ、氣ヲ下シ、食ヲ消ス』と。

本方證

小柴胡湯の證として、傷寒論に擧ぐる主なるもの、要を摘めば

(一)往來寒熱し、胸脇苦滿し、默々として飲食を欲せず、心煩、喜嘔(屢ば嘔すの意)し、或は胸中煩し

て嘔せず、或は腹中痛み、或は脇下痞鞭し、或は心下悸し、小便利せず、或は渴せず、身に微熱有り、或は咳する證。(太陽病中篇)。(二)傷寒、四五日にして、身熱、惡風し、頸項強ばり、脇下滿ち、手足温にして渴する證。(同上)。(三)傷寒、中風、柴胡の證有りて、但だ一證を見はせば便ち是なり。(同上)。

(四)婦人の中風、七八日にして續いて寒熱を得、發作、時有り、經水適^{また}斷^{たつ}る證。(太陽病下篇)。(五)傷寒五六日、嘔して發熱する證。(同上)。(六)潮熱を發し、大便^{ゆる}溏^{ゆる}く、小便自から可、胸脇滿去らざる證。

(陽明病篇)。(七)脇下鞭滿し、大便せずして嘔し、舌上白胎の證。(同上)。(八)脇下鞭滿し、乾嘔して食すること能はず、往來寒熱し、脈沈緊の證。(少陽病篇)。(九)傷寒、差えて已後、更に發熱する證。(陰陽易差後勞腹痛病篇)。

又、金匱要略に於けるものは

(一)諸黃、腹痛して嘔する證。(黃疸病篇)。(二)婦人、草蓐(産牀)に在り、自から發露して風を得、四肢煩熱に苦しみ、頭痛する證。(婦人産後病篇附方)等なり。

本方の作用

此方は、柴胡以下の七味より成り、而して柴胡は其量最も多く、半夏之に次ぎ、黃芩、人參、甘草、生薑、大棗は最も少量なり。

即ち此方は、以上の七味互に相協同し、以て其效用を全うするものなり。

故に方極附言に云く

『胸脇苦滿シ、心下痞鞭シ、或ハ寒熱往來シ、或ハ嘔スル者ヲ治ス』と。

此説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

腹證

腹診配劑錄に云く

『凡ソ柴胡湯類ノ腹狀ハ、皆之ヲ按ズルニ力有リ。而シテ此小柴胡湯ハ、胸脇下痞鞭シテ、鳩尾（胸骨下一寸の部に位す）ニ及バズ。或ハ心下ニ微動有リテ滿ツル也』と。

應用

此方は、所謂少陽正對の藥方にして、其應用範圍最も廣大なり。

- (一)、熱性病、胸痛あり、時に發熱、惡寒し、心下痞鞭して嘔し、脈弦なる症。
- (二)、惡風して時に發熱し、氣鬱し、胸滿感あり、汗出で、尿利減少する症。
- (三)、熱候無く、腹痛刺すが如く、嘔、渴ありて心煩し、脈沈なる症。
- (四)、熱性病、便秘し、時に譫語し、喘咳ありて嘔吐し、食慾無くして脈浮緊の症。
- (五)、熱性病、胸腹膨滿を覺えて食を欲せず、若し食すれば則ち嘔吐する症。
- (六)、胸部膨滿感ありて心悸亢進し、時々腹痛し、其脈沈遲なる症。
- (七)、發汗の後、發熱減退するも、未だ心身爽快ならず、時に腹痛甚しく、口乾きて嘔する症。

(八)、婦人、産後の頭痛にして、胸脇苦滿を感ずる症。

(九)、小兒、乳食を吐し、發熱する症。

(十)、諸般の黃疸にして、腹痛、嘔吐を發する症。

(十一)、「マラリア」、及び其類症。

(十二)、「フルンケル」、及び其類症にして、往來寒熱を發する症。

(十三)、麻疹、及び痘瘡等にして、煩渴甚しき者には、證に由り石膏を加味し、或は白虎湯を合方す。

(十四)、癩癰には、證に由り、石膏を加ふ。

(十五)、腸「カタル」等には、證に由り、芍藥を加味し、或は又五苓散を合方す。

(十六)、吃逆には、證に由り、橘皮竹茹湯を合方す。

(十七)、肋膜炎等には、證に由り、小陷胸湯を合方す。

仁齋直指方に云く

『男女諸熱出デ、血、熱シテ蘊隆ナルヲ治ス。

剛瘧ノ熱有ルヲ治ス。

咽乾喉塞、亡血家、淋家、衄家、瘡家、動氣ハ、並ニ汗ス可ラズ。皆此湯ヲ用フ』と。

又、名醫方考に云く

『瘧、發スルノ時、耳聾、脇痛シ、寒熱往來シ、口苦、喜嘔シ、脈弦ナル者ハ、名ケテ風瘧ト曰フ。此方

之ヲ主ドル」と。

又、易簡方に云く

『小兒ノ温熱ハ、悉ク能ク治療ス』と。

又、證治準繩に云く

『痘瘡、發熱甚クシテ、嘔スル者ハ、宜シク之ヲ服スベシ』と。

又、類聚方廣義に云く

『柴胡ノ諸方ハ、皆能ク瘧ヲ治ス。要ハ當ニ胸脇苦滿症ヲ以テ、目的ト爲スベシ。

痘瘡、貫膿、收靨ノ間、身熱熾クガ如ク、胸滿、嘔渴シ、瘙痒、煩躁スル者ヲ治ス。又收靨ノ後、餘熱久

シク解セズ、前症ノ如キ者モ、亦此方に宜シ。

初生兒、時時故無クシテ發熱、胸悸シ、或ハ吐乳スル者ハ、之ヲ變蒸熱ト稱ス。此方ニ宜シ。大便秘スル

者ハ、加芒消湯ニ宜シ。或ハ紫圓ヲ兼用ス。

傷寒愈エテ後、唯ダ耳中啾啾トシテ安カラズ、或ハ耳聾累月復セザル者有リ。此方ヲ長服ス可シ』と。

此等の諸説、宜しく本方運用上の参考と爲すべし。

大柴胡湯 ダイサイコタウ

(傷寒論及金匱要略方)

柴胡三・二

黄芩

芍藥

大棗各一・二

半夏二・四

生薑二・〇

枳實一・六

大黃〇・八

右八味を一包と爲し、水二合四勺を以て、煮て一合二勺を取り、再煎して六勺を取り、一回に温服す(通常一日三回)。

『一方ニハ、大黃二兩ヲ用フ。(下略)。』

此方、宋板に在りては、大黃無し。今、成本及び金匱要略に従ふ。

此方は、小柴胡湯の去加方にして、即ち其原方に、人參、甘草を去り、生薑を増量し、枳實、芍藥、大黃を加味せるものなり。

藥能

枳實(キジツ)の性能

藥徵に云く

『結實ノ毒ヲ主治スル也。旁ラ胸滿、胸痺、腹滿、腹痛ヲ治ス』と。

又、古方藥議に云く

『味苦寒、寒熱結ヲ除キ、痢ヲ止メ、胸脇ノ痰癖ヲ除キ、停水ヲ逐ヒ、結實ヲ破リ、脹滿ヲ消シ、心下ノ急、痞痛、逆氣、喘咳ヲ主ドル』と。

本方證

大柴胡湯の證として、傷寒論に擧ぐる主なるもの、要を摘めば

(一)柴胡の證仍は在り、先づ小柴胡湯を與へて、嘔止まず、心下急、鬱鬱として微煩する證。(太陽病中篇)。(二)熱結れて裏に在り、復つて往來寒熱する證。(太陽病下篇)。(三)發熱し、汗出で、解せず、心下痞鞭し、嘔吐して下利する證。(同上)。(四)傷寒、後、脈沈にして、内實する證。(辨可下病篇)。
又、金匱要略に於けるものは
○之を按じて心下滿痛する證。(腹滿寒疝宿食病篇)
等なり。

本方の作用

此方は、柴胡以下の八味より成り、而して柴胡は其量最も多く、半夏之に次ぎ、生薑また之に次ぎ、枳實また之に次ぎ、黃芩、芍藥、大棗また之に次ぎ、大黃は最も少量なり。
即ち此方は、恰も小柴胡湯中の人參、甘草を去りて生薑を増量し、更に之に加ふるに、枳實、芍藥、大黃を以てせるもの、如し。

故に類聚方廣義に云く

『小柴胡湯證ニシテ、腹滿、拘攣シ、嘔劇シキ者ヲ治ス』と。

又、類聚方に云く

『按ズルニ、小柴胡湯證ニシテ、胸腹拘攣シ、下ス可キ者、之ヲ主ドル』と。

此二説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

腹證

腹診配劑錄に云く

『小柴胡湯證ノ如クニシテ、心下ノ急ヲ加フル者也。心下ノ急トハ、心下ノ拘急也。故ニ呼吸ニ拘ハリ、又ハ心下滿痛スル者之レ有リ。若シ夫レ心下、屹然トシテ石ノ如クニ鞭クシテ、其痛、呼吸ニ拘ハル者ハ、大陷胸湯ノ腹也。又大柴胡湯ノ滿ハ、定處無ク、或ハ心下、或ハ臍傍ナリ。一概ニシテ之ヲ論ズ可ラズ』と。

應用

- (一)、熱性病、安臥を好みて食を欲せず、尿利減少し、大便秘結し、其脈弦にして數なる症。
- (二)、胸滿を覺え、心下鞭く、氣急息迫の感ありて喘咳し、尿利減少、脈浮數なる症。
- (三)、譫語を發し、血便を漏らし、心悸亢進し、煩悶して安んぜず、脈弦數なる症。
- (四)、脈浮數にして寒熱去らず、心下鞭くして食を欲せず、二便難利の症。
- (五)、發汗の後、熱去らずして頭痛し、心下鞭滿し、或は痛み、其脈弦數なる症。
- (六)、發汗の後、復た時に寒熱を發し、嘔吐甚しく、呼吸促迫し、心下鞭くして胸痛を覺え、其脈沈なる症。
- (七)、諸般の下痢性疾患にして、心下鞭滿し、或は嘔吐する症。
- (八)、半身不隨等にして、腹滿、拘攣、便秘の症ある者。
- (九)、諸種の黃疸にして、腹痛、嘔吐等を發し、脈沈實なる症。

(十)、耳鳴、耳聾等にして、胸脇膨滿の感ある症。

(十一)、齒痛等。

(十二)、「フルンケル」、及び其類症にして、脇下硬滿ある症。

(十三)、諸般の胃疾患にして、便秘の傾向ある症。

(十四)、小兒の吐乳症等にして、心下鞭き者。

(十五)、種痘後に發熱し、便秘の傾向ある症。

直指附遺に云く

「瘧、熱多ク、寒少ク、目痛ミ、汗多ク、脈大ナルハ、此湯ヲ以テ微利スルヲ度ト爲ス」と。

又、類聚方廣義に云く

「麻疹、胸脇苦滿シ、心下鞭塞シ、嘔吐シ、腹滿痛シ、脈沈ナル者ヲ治ス。

狂症、胸脇苦滿シ、心下鞭塞シ、腹拘攣シ、臍中（即ち心下部）ノ動甚シキ者ヲ治ス。鐵粉ヲ加フレバ奇效有リ。

平日心思鬱塞シ、胸滿、少食、大便二三日、或ハ四五日ニ一行ニシテ、心下時時痛ヲ爲シ、宿水ヲ吐スル者ハ、其人多クハ脇肋妨張シ、肩背強急シ、臍傍ノ大筋堅韌ニシテ、上ハ胸肋ニ入り、下ハ小腹ニ連リ、或ハ痛ミ、或ハ痛マズ、之ヲ按ズレバ必ず攣痛シ、或ハ吞酸、嘈雜等ノ症ヲ兼ヌル者ハ、俗ニ疝積留飲ノ痛ト稱ス。宜シク此方ヲ長服スベシ。當ニ五日、十日ヲ隔テ、大陷胸湯、十棗湯等ヲ用ヒテ之ヲ攻ムベシ。

シ。

微毒沈滯シテ、頭痛、耳鳴シ、眼目雲翳、或ハ赤脈、疼痛シ、胸脇苦滿シ、腹拘攣スル者ヲ治ス。時ニ紫圓、梅肉散等ヲ以テ之ヲ攻ム。大便燥結スル者ハ、芒消ヲ加フルヲ佳ト爲ス」と。

此二説、本方運用上の参考と爲すべし。

柴胡加龍骨牡蠣湯 サイコカリユウコツボレイタウ (傷寒論方)

柴胡二・四 半夏一・八 黃芩 大棗 生薑 人參 龍骨 鉛丹 桂枝 茯苓

牡蠣各〇・九 大黃一・二

右十二味、水二合四勺を以て、先づ十一味を煮て一合二勺を取り、後、大黃を入れ、再び煮て六勺を取り、一回に温服す（通常一日二、三回）。

此方、成本に在りては、黃芩無く、且つ半夏の量稍や少なし。今、宋板に従ふ。

此方は、小柴胡湯の去加方にして、即ち其原方に、諸藥の半量を減じ、甘草を去り、龍骨、牡蠣、鉛丹、桂枝、茯苓、大黃を加味せるものなり。

藥能

鉛丹（エンタン）の性能

古方藥品考に云く

第五 柴胡湯類

『其性大寒ニシテ、體重ク、鎮墜ナリ。故ニ能ク驚風ヲ定^{ヤス}ンジ、心煩ヲ止ム』と。
又、古方藥議に云く

『味辛寒、痰ヲ墜シ、怯ヲ去リ、積ヲ消シ、蟲ヲ殺シ、驚癇、瘧痢ヲ治シ、外用スレバ熱ヲ解シ、毒ヲ拔キ、瘀ヲ去リ、肉ヲ長ズ』と。

本方證

柴胡加龍骨牡蠣湯の證として、傷寒論に擧ぐる所の要を摘めば

○傷寒、之を下し、胸滿煩驚し、小便利せず、讞語し、一身盡く重く、轉側す可らざる證。(太陽病中篇)なり。

吉益東洞氏曰く

『按ズルニ、當ニ胸腹ニ動有ルノ證有ルベシ』と。

本方の作用

此方は、柴胡以下の十二味より成り、而して柴胡は其量最も多く、半夏之に次ぎ、大黃また之に次ぎ、黃芩、大棗、生薑、人參、龍骨、鉛丹、桂枝、茯苓、牡蠣は最も少量なり。

即ち此方は、恰も小柴胡湯を半減して、其甘草を去り、更に之に加ふるに、龍骨、牡蠣、鉛丹、桂枝、茯苓、大黃を以てせるものゝ如し。

故に類聚方廣義に云く

『小柴胡湯證ニシテ、胸腹ニ動有リ、煩躁、驚狂シ、大便難ク、小便不利ノ者ヲ治ス』と。

又、醫聖方格に云く

『熱病、胸脇滿チテ嘔セント欲シ、煩驚シテ心下悸シ、小便少ナク、讞語シ、休作、時有リ、一身盡ク重ク、轉側ス可ラザル者ハ、柴胡加龍骨牡蠣湯之ヲ主ドル』と。

此二説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

應用

- (一)、熱性病、逆上して精神昏み、身體倦怠の狀ありて安臥せず、二便澁滯し、脈數急なる症。
- (二)、怵惕、煩滿の狀ありて、精神昏亂し、時に或は讞語を發し、其脈緊急なる症。
- (三)、胸滿感ありて心悸亢進し、身體微痛し、脈弦遲なる症。
- (四)、神經衰弱性不眠症等。
- (五)、症候性癲癇様發作。
- (六)、小兒の夜啼症等にして、腹部に動悸ある者。
- (七)、火傷後の發熱等。

傷寒類方に云く

『按ズルニ、此方ハ能ク肝膽ノ驚痰ヲ下ス。之ヲ以テ癲癇ヲ治スレバ、必ズ效アリ』と。
又、類聚方集覽に云く

『驚癇、或ハ心氣不定ノ者、之ヲ主ドル』と。
又、類聚方廣義に云く

『狂症、胸腹ノ動甚シク、驚懼、人ヲ避ケ、兀座、獨語シ、晝夜寐ネズ、或ハ猜疑多ク、或ハ自死セント欲シ、床ニ安ンゼザル者ヲ治ス。

癇症、時時寒熱交モ作り、鬱鬱トシテ悲愁シ、多夢少寐、或ハ人ニ接スルヲ惡ミ、或ハ暗室ニ屏居シ、殆ンド勞瘵ノ如キ者ヲ治ス。狂、癇ノ二症モ、亦當ニ胸脇苦滿、上逆、胸腹ノ動悸等ヲ以テ目的ト爲スベシ。

癲癇、居常胸滿、上逆シ、胸腹ニ動有リ、毎月二三發ニ及ブ者、常ニ此方ヲ服シテ懈ラザルトキハ、則チ屢バ發スルノ患無シ』と。

此等の諸説、宜しく本方運用上の參考と爲すべし。

柴胡去半夏加栝蔞湯 サイコキヨハンゲカクワロウタウ (金匱要略方)

柴胡三・二 人參 黃芩 甘草 大棗各一・二 生薑〇・八 栝蔞根一・六

右七味を一包と爲し、水二合四勺を以て、煮て一合二勺を取り、再煎して六勺を取り、一回に溫服す

(通常一日二回)。

此方は、小柴胡湯の去加方に於て、即ち其原方に、生薑を減量し、半夏を去り、栝蔞根を加味せるものな

藥能

栝蔞根(クワロウコン)の性能

古方藥品考に云く

『味苦ク、微シク甘ク、質涼降ニシテ滋潤ナリ。故ニ津液ヲ生シ、燥渴ヲ潤ホスノ能有リ』と。

又、古方藥議に云く

『味苦寒、消渴、身熱、煩滿、大熱ヲ主ドリ、小便ノ利ヲ止メ、膿ヲ排シ、腫毒ヲ消シ、津液ヲ行ラス。

心中結痛スル者ハ、是ニ非ズンバ除クコト能ハズ』と。

本方證

柴胡去半夏加栝蔞湯の證として、金匱要略に擧ぐる所は

○瘧病、渴を發する證。また勞瘵。(瘵病篇附方)なり。

吉益東洞氏曰く

『按ズルニ、當ニ胸脇苦滿ノ證有ルベシ』と。

本方の作用

此方は、柴胡以下の七味より成り、而して柴胡は其量最も多く、栝蔞根之に次ぎ、人參、黃芩、甘草、大

棗また之に次ぎ、生薑は最も少量なり。

即ち此方は、恰も小柴胡湯中の生薑を減量し、半夏を去り、更に之に加ふるに、括萎根を以てせるもの、如し。

故に方極附言に云く

『小柴胡湯證ニシテ、渴シ、若クハ微嘔スル者ヲ治ス』と。

此説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

應用

(一)、「マラリア」様疾患にして、口舌乾燥感あるも、敢て水を欲せざる症。

(二)、「マラリア」、及び其類症にして、慢性経過を取り、漸やく疲勞し、口中乾燥感ある症。

(三)、肺結核、及び其類症にして、日晡潮熱甚しからず、骨立羸瘦し、手掌、足蹠煩熱に堪へざる等の症。

(四)、腐敗性氣管枝炎等には、證に由り、少量の白芥子を加ふ。

醫學入門に云く

『小柴胡加瓜湯ハ、傷寒、汗後、嘔シテ渴シ、煩スルヲ治ス。即チ小柴胡湯ニ半夏ヲ去リ、人參ヲ倍シ、瓜萎(即ち括萎)根ヲ加フ』と。

此説、本方運用上の参考と爲すべし。

柴胡桂枝乾薑湯 サイコケイシカンキヤウタウ

又柴胡桂薑湯 サイコケイキヤウタウ (傷寒論及金匱要略方)

柴胡三・二 桂枝 乾薑 黃芩 牡蠣各一・二 括萎根一・六 甘草〇・八

右七味を一包と爲し、水二合四勺を以て、煮て一合二勺を取り、再煎して六勺を取り、一回に温服す(通常一日三回)。

『初メ服シテ微煩シ、復タ服シテ汗出ヅレバ便チ愈ユ。』

此方、宋板に在りては、乾薑及び牡蠣の量稍や少なし。今、成本に従ふ。

此方は、小柴胡湯の變方と見做すべきものなり。

本方證

柴胡桂枝乾薑湯の證として、傷寒論に擧ぐる所の要を摘めば

○已に汗を發し、復た之を下し、胸脇滿微結し、小便利せず、渴して嘔せず、但だ頭に汗多く、往來寒熱し、心煩する證。(太陽病下篇)。

又、金匱要略に於けるものは

○瘧、寒多くして微しく熱有り、或は但だ寒にして熱せざる證。(瘧病篇附方)なり。

吉益東洞氏曰く

『按ズルニ、頭ニ汗出ヅル者ハ、是レ衝逆也。又曰ク、當ニ胸腹ニ動有ルノ證有ルベシ』と。

本方の作用

此方は、柴胡以下の七味より成り、而して柴胡は其量最も多く、括蕪根之に次ぎ、桂枝、乾薑、黄芩、牡蠣また之に次ぎ、甘草は最も少量なり。

即ち此方は、以上の七味互に相協同し、以て其效用を全うするものなり。

故に方極附言に云く

『胸脇苦滿シテ、胸腹ニ動有リ、乾嘔シ、上衝シ、渴スル者ヲ治ス』と。

此説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

腹證

腹診配劑錄に云く

『小柴胡湯ノ如クニシテ、之ヲ按ズルニ力無ク、亦苦滿少ナクシテ動氣甚ダシ』と。

應用

(一)、心煩あり、微熱去らず、睡眠すれば、盜汗出で、覺醒すれば微しく渴し、舌面白滑にして、大便澀痢し、尿利減少する症。

(二)、「マラリア」様疾患にして、寒戰著しきも、發熱甚しからざる症。

(三)、神經衰弱様疾患にして、鬱々として樂まず、身體疲倦し、胸滿感あり、臍上に動悸劇しき症。

(四)、不眠症、耳鳴し易く、驚怖し易く、或は發汗し易き等の者。

(五)、神經性心悸亢進等。

(六)、脚氣等。

類聚方廣義に云く

『勞瘵、肺痿、肺癰、癰疽、瘰癧、痔漏、結毒、微毒等、久シキヲ經テ愈エズ、漸ヤク衰憊ニ就キ、胸滿、乾嘔シ、寒熱交モ作り、動悸、煩悶シ、盜汗、自汗シ、痰嗽シ、乾欬シ、咽乾、口燥、大便澀泄シ、小便利セズ、面ニ血色無ク、精神困乏シ、厚藥ニ耐ヘザル者ハ、此方ニ宜シ』と。

此説、本方運用上の参考と爲すべし。

黄連湯 ワウレンタウ (傷寒論方)

黄連 甘草 乾薑 桂枝 大棗各一・八 人參一・二 半夏三・六

右七味を一包と爲し、水一合を以て、煮て六勺を取り、一回に溫服す(通常一日三、四回)。

此方は、小柴胡湯の變方と見做すべきものなり。

藥能

黄連(ワウレン)の性能

第五 柴胡湯類

藥微に云く

「心中ノ煩悸ヲ主治スル也。旁ラ心下ノ痞、吐下、腹中ノ痛ヲ治ス」と。

又、古方藥議に云く

「味苦寒、熱氣、腸澼、腹痛、下痢、煩躁ヲ主ドリ、血ヲ止メ、口瘡ヲ療ス」と。

本方證

黃連湯の證として、傷寒論に擧ぐる所の要を摘めば

○胸中に熱有り、胃中に邪氣有り、腹中痛み、嘔吐せんと欲する證。(太陽病下篇)なり。

吉益東洞氏曰く

「按ズルニ、當ニ心中ノ悸、心煩、上衝ノ證有ルベシ」と。

本方の作用

此方は、黃連以下の七味より成り、而して半夏は其量最も多く、黃連、甘草、乾薑、桂枝、大棗之に次ぎ、人參は最も少量なり。

即ち此方は、以上の七味互に相協同し、以て其效用を全うするものなり。

故に方極附言に云く

「心中煩悸シ、心下痞鞭シテ、上衝シ、嘔吐セント欲スル者ヲ治ス」と。

又、醫聖方格に云く

「熱病、心下痞シ、胸中熱煩シ、心腹痛ミテ嘔吐セント欲シ、其人、頭ニ汗出デ、心下悸シテ臥スコト能ハザル者ハ、黃連湯之ヲ主ドル」と。

此二説、能く本方の效用を約言せりと謂ふべし。

腹證

腹診配劑錄に云く

「心下ニ物無ク、上中脘(上脘は臍上五寸、中脘は同四寸の部に位す)ノ邊ニ凝有^コリテ痛ミ、食臭ヲ聞ケバ、則チ嘔セント欲ス」と。

應用

(一)、胸部に熱煩、鬱滿の感ありて食欲缺損し、時に胃痛んで堪ふ可らず、二便に著變なき症。

(二)、胸部に煩熱を覺え、或は腹痛し、或は便通不整にして、脈弦數なる症。

(三)、脈微緩にして、胸腹部に不快感あり、心下部殊に膨滿するも、之を按ずるに軟、時に嘔吐を發せんとする症。

(四)、胸中煩熱し、心下部膨滿し、或は喘し、或は嘔吐し、或は腹痛し、兩便著變なく、脈微しく弦なる症。

(五)、下痢性疾患にして、腹痛し、嘔氣ある症。